

2023年8月30日(水)

RYB1

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表①

座長：須甲 理生（日本女子体育大学）

10:20～11:19 RYB1（良心館地下1階RYB1番教室）

[競技スポーツ-A-01] 大学生球技系スポーツチームにおける選手間のマウンティング（コーチング）

*湯浅 暁子¹、中山 雅雄¹、秋山 央¹、門間 貴史¹（1. 筑波大学体育系）

10:20～10:34

[競技スポーツ-A-02] アスリートのリーダーシップスキルの成長に関する検討（心）

*小菅（町田） 萌¹、廣光 佑哉²（1. 大阪体育大学 大学院、2. 同志社大学）

10:35～10:49

[競技スポーツ-A-03] バスケットボール指導者の有効な「権限の行使」に関する一考察（コーチング学）

*仲澤 翔大¹、小井土 正亮¹、藤本 元¹、會田 宏¹（1. 筑波大学体育系）

10:50～11:04

[競技スポーツ-A-04] 体操競技における宙返り技のひねりに関する発生運動学的考察（スポーツ運動学）

*山下 龍一郎¹（1. 鹿屋体育大学）

11:05～11:19

RYB2

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表②

座長：永野 康治（日本女子体育大学）

10:20～11:19 RYB2（良心館地下1階RYB2番教室）

[競技スポーツ-A-05] サッカーにおけるゴールキーパーのクロス処理難易度を定量化する回帰式の構築およびその検証（測,方）

*平嶋 裕輔¹、高宮 佳祐¹、鈴木 健介²、浅井 武³、中山 雅雄³（1. 静岡大学、2. 国際武道大学、3. 筑波大学）

10:20～10:34

[競技スポーツ-A-06] オリンピック選手におけるDRD2遺伝子rs7131056多型の頻度（生）

*上妻 歩夢¹、本間 洋樹¹、齋藤 未花¹、出口 実¹、膳法 浩史²、松本 隆太郎³、松本 慎吾¹、岡本 孝信¹、中里 浩一¹、菊池 直樹¹（1. 日本体育大学、2. 東京聖栄大学、3. 育英大学）

10:35～10:49

[競技スポーツ-A-07] アスリートにおける膝関節靭帯損傷の既往と遺伝子多型との関連性（生）

*田代 空¹、アルメイダ ケトリーン¹、上妻 歩夢¹、出口 実¹、本間 洋樹¹、齋藤 未花¹、竹腰 誠¹、梶 規子¹、岡本 孝信¹、中里 浩一¹、菊池 直樹¹（1. 日本体育大学）

10:50～11:04

[競技スポーツ-A-08] 空手組手競技における先取点獲得に有効な戦術（方）

*大徳 紘也¹、松本 剛志¹、大石 健二²（1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学）

11:05～11:19

RY103

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 口頭発表①

座長：國友 亮佑（環太平洋大学）

10:20～11:19 RY103（良心館1階RY103番教室）

[競技スポーツ-C-01] パワー向上を目的とした漸減負荷プロトコルの開発（生）

*望月 佑季奈¹、菊池 さやか¹、齋藤 未花¹、アルメイダ ケトリーン¹、尾崎 隼朗²、橋本 卓弥³、菊池 直樹¹（1. 日本体育大学、2. 東海学園大学、3. 東京理科大学）

10:20～10:34

[競技スポーツ-C-02] 野球の指導現場における効率的なデータ集積方法に関する実践研究（測,方）

*河村 剛光¹、光川 真壽²、染谷 由希¹、中村 絵美³（1. 順天堂大学スポーツ健康科学部、2. 東洋学園大学、3. 順天堂大学保健医療学部）

10:35～10:49

[競技スポーツ-C-03] 大学男子バスケットボール選手における異なるフィードバック方法がランニングジャンプの跳躍高および動作改善に及ぼす即時的影響（バ）

*早田 亘輝¹、高山 慎¹、下河内 洋平¹（1.

大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科)

10:50 ~ 11:04

[競技スポーツ-C-04] 異なる速度低下を用いたレジスタンス
エクササイズと スプリントインターバル
トレーニングが最大酸素摂取量に与
える影響 (生)

*菊池 さやか¹、望月 佑季奈¹、本間 洋樹¹、
菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学)

11:05 ~ 11:19

RY107

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンス
スポーツ (トップレベルの競技スポーツ) におけるトレーニングをいかに効果
的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 口頭発表②

座長: 九鬼 靖太 (大阪経済大学)

10:20 ~ 11:19 RY107 (良心館1階 R Y 1 0 7 番教室)

[競技スポーツ-C-05] サッカーにおける継続的なドリブルト
レーニングがドリブル動作様式に及ぼ
す効果 (方)

*多賀 健^{1,2} (1. 苫小牧工業高等専門学
校、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院
コーチング学位プログラム)

10:20 ~ 10:34

[競技スポーツ-C-06] カヌースプリント選手を対象としたラン
ダム化比較試験を用いたトレーニング
プログラム運用の試み (生)

*本間 洋樹¹、望月 佑季奈¹、菊池 さやか¹、
菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学)

10:35 ~ 10:49

[競技スポーツ-C-07] ゲームパフォーマンスビッグデータに
項目反応理論を適用したサッカー集団
攻撃技能の達成度評価基準 (測)

*徐 広孝¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学
部)

10:50 ~ 11:04

[競技スポーツ-C-08] サッカーにおけるマークを外すプ
レーの成否に影響を与える要因の解明
(方)

*鈴木 健介¹、佐々木 竜治²、与座 英之²、平
嶋 裕輔³ (1. 国際武道大学、2. 東海大
学、3. 静岡大学)

11:05 ~ 11:19

RY201

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに
良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】 口頭発表①

座長: 高橋 浩二 (長崎大学)

10:20 ~ 11:19 RY201 (良心館2階 R Y 2 0 1 番教室)

[学校保健体育-A-01] 体育原理履修者におけるスポーツや体
育の問題意識に関する検討 (教)

*早田 剛¹、清田 美紀¹、柴山 慧¹、白石
翔¹、坂本 康輔¹、久田 孝¹ (1. 環太平洋大
学)

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-A-02] 移動過程に着目したランニングによる
大学生の認識変容に関する研究 (教)

*齋藤 祐一¹ (1. 鳴門教育大学)

10:35 ~ 10:49

[学校保健体育-A-03] 大学体育授業において身体運動をつく
り出すプラグマティック的思考への一
考察 (教,バ)

*山崎 正枝¹ (1. 金沢大学)

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-A-04] Gaze behavior of Physical education
(PE) teacher trainees in organizational
arrangements (教)

*Oesterhelt Verena¹、Neumann
Melanie、Appel Sebastian、Junge-
Bornholt Lea (1. University of Giessen
(Germany))

11:05 ~ 11:19

RY202

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科
学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】 口頭発表①

座長: 末永 祐介 (熊本大学)

10:20 ~ 11:19 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

[学校保健体育-C-01] 高等学校におけるベースボール型の学
習内容に関する研究 (教)

*榊 悠勝¹、鈴木 聡² (1. 東京学芸大学教職
大学院、2. 東京学芸大学)

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-C-02] 水中を歩きながら泳動作を行う
ウォーキングスイムは平泳ぎの技能獲
得に有効である (教)

*山村 涼乃¹、豊田 郁豪²、原 英喜³、森山
進一郎³、杉田 渚颯¹ (1. 東京学芸大学大学
院教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院連

合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学)

10:35 ~ 10:49

[学校保健体育-C-03] 男女共習体育の実態と教師がもつ認識について (教)

*中條 愛未¹、鈴木 聡¹ (1. 東京学芸大学教職大学院)

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-C-04] 状況判断能力の発達過程における知識構造の変化について (教)

*中島 友樹¹、後藤 幸弘² (1. 鹿児島大学、2. 兵庫教育大学名誉教授)

11:05 ~ 11:19

系、2. 筑波大学大学院体育学学位プログラム)

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-B-06] 表現系ダンスにおける「ひと流れの動き」を創り出す指導に関する研究

(1) (教)

*安江 美保¹、山崎 朱音² (1. ノートルダム清心女子大学、2. 横浜国立大学)

10:35 ~ 10:49

[学校保健体育-B-07] 表現系ダンスにおける「ひと流れの動き」を創り出す指導に関する研究

(2) (教)

*山崎 朱音¹、安江 美保² (1. 横浜国立大学、2. ノートルダム清心女子大学)

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-B-08] ダンス領域におけるコンタクト・インプロヴィゼーションの実践について

(教)

*齋藤 萌々子¹ (1. お茶の水女子大学大学院)

11:05 ~ 11:19

R Y 203

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長：岩田 英樹 (金沢大学)

10:20 ~ 11:19 RY203 (良心館2階RY203番教室)

[学校保健体育-B-01] ジェンダー分析による体育カリキュラム変革の可能性 (教,社)

*井谷 恵子¹、三上 純²、井谷 聡子³ (1. 京都教育大学、2. 大阪大学大学院人間科学研究科、3. 関西大学)

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-B-03] 中・高等学校における「体育理論」の授業実施状況と授業実施に当たったの課題等 (教)

*浜田 幸史¹ (1. 鹿屋体育大学)

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-B-04] 体育実技と保健の感染症対策の学習を関連づけた単元構成のあり方 (教)

*高田 佳孝¹、神谷 拓² (1. 京都ノートルダム女子大学、2. 関西大学)

11:05 ~ 11:19

R Y 204

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長：細越 淳二 (国土館大学)

10:20 ~ 11:19 RY204 (良心館2階RY204番教室)

[学校保健体育-B-05] ツイート内容分析による不登校と体育との関連についての探索的研究 (ア)

*澤江 幸則¹、金子 真悠² (1. 筑波大学体育

R Y 206

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長：今宿 裕 (作新学院大学)

10:20 ~ 11:19 RY206 (良心館2階RY206番教室)

[学校保健体育-A-05] 大学体育授業におけるバドミントン指導法の検討 (生)

*深田 喜八郎¹ (1. 日本大学文理学部)

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-A-06] 大学体育授業後の運動・身体活動に対する意識の変容 (保)

*池田 悠真¹、上地 勝²、大津 展子²、吉野 聡²、加藤 敏弘² (1. 茨城大学大学院教育学研究科、2. 茨城大学)

10:35 ~ 10:49

[学校保健体育-A-07] 静岡県の大学における大学体育の成績評価の観点について (生)

*太田 洋一¹ (1. 静岡福祉大学)

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-A-08] 大学体育授業にて高い学修成果を導く要因 (心)

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

11:05 ~ 11:19

RY301

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大塚 隆（東海大学）

10:20～11:04 RY301（良心館3階RY301番教室）

[健康福祉-A-01] 転倒回避動作を伴う「とっさの一步」誘発装置の検討（介,測,方）

*檜皮 貴子¹、井上 咲子²、松浦 稔³、長谷川 聖修⁴
（1. 新潟大学、2. 新潟大学大学院、3. 筑波大学大学院、4. 日本Gボール協会）

10:20～10:34

[健康福祉-A-02] 大学生のロコモティブシンドローム予防を目的とした体操試案に関する研究（介,方）

*井上 咲子¹、檜皮 貴子²（1. 新潟大学大学院、2. 新潟大学）

10:35～10:49

[健康福祉-A-03] フィットネスプログラムへの参加継続を促す指導の質的研究（介）

*伊藤 麻希¹（1. 静岡産業大学 スポーツ科学部）

10:50～11:04

RY302

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表②

座長：城所 哲宏（日本体育大学）

10:20～11:04 RY302（良心館3階RY302番教室）

[健康福祉-A-05] 異なる季節に行うセルフペースの有酸素運動が卵胞期および黄体期の気分状態や月経関連症状に及ぼす影響（保,生）

*中村 有紀¹（1. 国立スポーツ科学センター）

10:35～10:49

[健康福祉-A-06] 自重負荷を用いた HIITにおける各エクササイズの種類強度の評価（生）

*松井 咲樹¹、沢井 史穂²（1. 日本女子体育大学大学院、2. 日本女子体育大学）

10:50～11:04

RY303

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長：榎本 雅之（滋賀大学）、河西 正博（同志社大学）

10:20～11:34 RY303（良心館3階RY303番教室）

[スポーツ文化-A-01] ジョルジュ・エベールの女子体育思想（哲）

*広瀬 健一¹（1. 帝京大学）

10:20～10:34

[スポーツ文化-A-02] ノルベルト・エリアス

「フィギュレーション」論の現代的意義に関する予備的考察（社）

*村下 慎一¹（1. 立命館大学）

10:35～10:49

[スポーツ文化-A-03] 1964年東京大会聖火リレーの記録と記憶（哲）

*荒牧 亜衣¹（1. 武蔵大学）

10:50～11:04

[スポーツ文化-A-04] 茨城県霞ヶ浦の流入河川である新川の川面の浮遊物をカヌーで収集した調査報告（保,教,発）

*橋爪 和夫¹（1. 学校法人筑波学園アール医療専門職大学）

11:05～11:19

[スポーツ文化-A-05] 成人期におけるスポーツライフが主観的幸福に及ぼす影響（経）

*林田 敏裕¹、醍醐 笑部¹、清水 紀宏¹（1. 筑波大学）

11:20～11:34

RY305

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長：後藤 光将（明治大学）

10:20～11:04 RY305（良心館3階RY305番教室）

[生涯スポーツ-A-01] 総合型地域スポーツクラブの経営課題とその解決策（ア）

*賽 夫¹（1. 早稲田大学）

10:20～10:34

[生涯スポーツ-A-02] Jリークラブのスクールに通わせる保護者の満足度特性（測）

*難波 宏明¹、大坪 健太²、春日 晃章³（1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜協立大学、3. 岐阜大学）

10:35～10:49

[生涯スポーツ-A-03] 総合型地域スポーツクラブの衰退・存続に関する事例研究（経）

*柴田 紘希¹、清水 紀宏²（1. 日本体育大学、2. 筑波大学）

10:50 ~ 11:04

RY306

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長：内田 匡輔（東海大学）

10:20 ~ 11:04 RY306（良心館3階RY306番教室）

[生涯スポーツ-A-04] 大学生による部活動支援ボランティアに関する一考察（教）

*笠井 義明¹、木村 駿介¹、清宮 孝文¹（1. 静岡産業大学スポーツ科学部）

10:20 ~ 10:34

[生涯スポーツ-A-05] 運動部活動における体罰問題の解決に向けた教育環境の構築（保,教,社,心）

*霜触 智紀¹、笠巻 純一²（1. 宇都宮共和大学、2. 新潟大学）

10:35 ~ 10:49

[生涯スポーツ-A-06] 中学校運動部活動の全面地域移行における学校及び地域関係者の認識と課題（政,社）

*麻原 恒太郎¹（1. 日本体育大学大学院）

10:50 ~ 11:04

RYB1

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長：内田 若希（九州大学）

11:25 ~ 12:09 RYB1（良心館地下1階RYB1番教室）

[競技スポーツ-A-09] アクションリサーチを用いた中央競技団体事業マネジメント担当者に対する学習支援の検証（方）

*山下 修平^{1,2}、和久 貴洋^{1,3}、尾懸 貢³（1. 日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター、2. 筑波大学スポーツウェルネス学学位プログラム、3. 筑波大学体育系）

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-A-10] トップアスリートの心理的競技力が自身のメンタルヘルスに与える関係性について（心）

*早川 琢也¹、高橋 由衣²、實宝 希祥²、近藤 みどり²、柄木田 健太²、大西 壮流²、立谷 泰久²（1. 京都先端科学大学、2. 国立スポーツ科学センター）

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-A-11] 学生アスリートのメンタルヘルスに関する研究（心）

*堀野 博幸¹、並木 伸賢²（1. 早稲田大学、2. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科）

11:55 ~ 12:09

RYB2

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長：谷釜 尋徳（東洋大学）

11:25 ~ 12:09 RYB2（良心館地下1階RYB2番教室）

[競技スポーツ-A-12] 女子プロサッカー選手における社会貢献に対する意識（方）

*東海林 祐子¹、森 将輝¹（1. 慶應義塾大学）

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-A-13] 戦前の日本における女子陸上競技史に関する一考察（史）

*喜多 綾音¹（1. 筑波大学大学院）

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-A-14] 我が国におけるアスリート・キャリア政策の政策形成過程（政,経）

*阿部 拓真¹、木村 和彦²、作野 誠一²（1. 大正大学、2. 早稲田大学）

11:55 ~ 12:09

RY103

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表③

座長：丹治 史弥（東海大学）

11:25 ~ 12:24 RY103（良心館1階RY103番教室）

[競技スポーツ-C-09] フルマラソンの失速を事前のハーフマラソンの結果から予測できないか（方,生）

*鍋倉 賢治¹、大木 祥太²、小山 和人²、畑山 大知²（1. 筑波大学体育系、2. 筑波大学大学院）

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-C-10] 陸上競技800m選手の体力とパフォーマンスの関係（生）

*菅原 遥¹、榎本 靖士²（1. 筑波大学大学

院、2. 筑波大学)

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-C-11] フルマラソントイムに影響する要因の走力および大会別の検討 (生)

*井上 恒志郎¹、山口 明彦¹、福家 健宗¹、鍋倉 賢治² (1. 北海道医療大学、2. 筑波大学)

11:55 ~ 12:09

[競技スポーツ-C-12] 女子中長距離ランナーのランニング中の下肢対称性 (バ)

*本庄 悠紀奈¹ (1. 筑波大学)

12:10 ~ 12:24

RY107

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ (トップレベルの競技スポーツ) におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 口頭発表④

座長: 徐 広孝 (静岡産業大学)

11:25 ~ 12:24 RY107 (良心館1階 R Y 1 0 7 番教室)

[競技スポーツ-C-13] スノーボードビッグエア競技のパフォーマンス構造モデル (バ)

*尾崎 宏樹¹、稲葉 優希¹、木村 新¹ (1. ハイパフォーマンススポーツセンター/国立スポーツ科学センター)

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-C-14] テニスの試合におけるプレッシャー状況下でのショットの配球の変化 (方)

*木俣 健¹、神藤 隆志²、北濃 成樹³、白石 洋隆¹、鈴木 ひかり¹、三橋 大輔⁴ (1. 筑波大学大学院体育学学位プログラム、2. 大阪教育大学表現活動教育系、3. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所、4. 筑波大学体育系)

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-C-15] パラサイクリングにおける1kmタイムトライアルのレース分析 (バ)

*小池 岳太¹、西山 哲成¹、山口 雄大¹ (1. 日本体育大学大学院)

11:55 ~ 12:09

[競技スポーツ-C-16] 東京2020バドミントン競技男女シングルスにおける試合序盤のサービス権に着目した勝利ゲームの傾向 (方)

*松本 剛志¹、大徳 紘也¹、大石 健二² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

12:10 ~ 12:24

RY201

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】 口頭発表③

座長: 大林 太郎 (筑波大学)

11:25 ~ 12:09 RY201 (良心館2階 R Y 2 0 1 番教室)

[学校保健体育-A-09] 大学体育授業の教育効果に対する認識に影響を及ぼす要因の検討 (測)

*白井 祐介¹、木村 華織¹、宮崎 彰吾²、松元 隆秀³、大田 穂⁴、高橋 啓悟⁵ (1. 東海学園大学、2. 静岡産業大学、3. 桃山学院大学、4. 順天堂大学、5. 京都先端科学大学)

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-A-10] 大学体育の多様な可能性の追求 (哲)

*森田 啓¹、佐藤 和²、中島 早苗³、戸枝 美咲⁴、小谷 恭子⁵、河鱈 一彦⁶、高橋 浩二⁷、畑 孝幸⁸ (1. 大阪体育大学、2. 千葉工業大学、3. 共立女子短期大学、4. 日本女子大学、5. 帝塚山学院大学、6. 関西学院大学、7. 長崎大学、8. 東海学園大学)

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-A-11] スノーシューと大学体育に関する一考察 (教)

*早坂 一成¹ (1. 名古屋学院大学)

11:55 ~ 12:09

RY202

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】 口頭発表②

座長: 春日 晃章 (岐阜大学)

11:25 ~ 12:24 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

[学校保健体育-C-05] 幼児の遠投能力と家庭環境との複合的関連 (教, 測, 発)

*大坪 健太¹、春日 晃章²、清水 紀宏³、中野 貴博⁴ (1. 岐阜協立大学、2. 岐阜大学、3. 筑波大学、4. 中京大学)

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-C-06] 幼児期から中学生期における運動能力特性のトラッキング度合いの検証 (発)

*小椋 優作¹、春日 晃章² (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学)

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-C-07] 幼児期の自由遊びにおける身体組成と

身体活動量の関係 (測,発)

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期
大学部、2. 岐阜大学)

11:55 ~ 12:09

[学校保健体育-C-08] 幼児期における動感発生の契機に関する発生運動学的研究 (教,方,スポーツ運動学)

*濱崎 裕介¹ (1. 白鷗大学)

12:10 ~ 12:24

RY203

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】 口頭発表③

座長：原 祐一 (岡山大学)

11:25 ~ 12:24 RY203 (良心館2階 R Y 2 0 3 番教室)

[学校保健体育-B-09] ランニングフォームの学習を取り入れた長距離走授業の検討 (保)

*舟山 謙佑¹、佐藤 善人¹ (1. 東京学芸大学)

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-B-10] インページョンゲームにおける「攻撃」と「防御」の捉え方に関する研究 (教)

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学
附属小金井中学校、2. 東京学芸大学)

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-B-11] 小学校体育におけるラケットを用いたテニス授業の一般化可能性の検討 (発,心)

*大西 祐司¹、北村 哲¹、小谷 幸平²、津田
恵実³ (1. びわこ成蹊スポーツ大学、2.
兵庫教育大学連合大学院、3. ウェスト
バージニア大学)

11:55 ~ 12:09

[学校保健体育-B-12] 力強く打つ楽しさを味わう小学校3年生のベースボール型授業 (教)

*斉藤 雅記¹ (1. 山口大学)

12:10 ~ 12:24

RY204

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】 保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】 口頭発表④

座長：澤江 幸則 (筑波大学)

11:25 ~ 12:24 RY204 (良心館2階 R Y 2 0 4 番教室)

[学校保健体育-B-13] 高等専門学校におけるゴールボールを取り入れた体育授業プログラムの検討 (ア)

*濱中 良¹、飯干 明²、金高 宏文³、森 司朗³、井福 裕俊⁴ (1. 京都先端科学大学、2.
鹿児島県立短期大学、3. 鹿屋体育大学、4.
熊本大学)

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-B-14] 聴覚障害者の学校体育における経験が成人期のスポーツ実施意欲に与える影響 (ア)

*池川 博史¹、齊藤 まゆみ² (1. 兵庫県立伊
丹北高等学校、2. 筑波大学)

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-B-15] 不登校経験者を対象とした1年間の「からだ」の授業で獲得されるからだづくりの認識 (保)

*上野 亜海¹、佐藤 海音¹、鹿野 晶子²、野井
真吾² (1. 日本体育大学大学院博士前期課
程、2. 日本体育大学)

11:55 ~ 12:09

[学校保健体育-B-16] 不登校児童生徒の能動的運動参加に関わる要因 (ア)

*金子 真悠¹、澤江 幸則²、齊藤 まゆみ² (1.
筑波大学大学院体育学学位プログラム、2.
筑波大学体育系)

12:10 ~ 12:24

RY301

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題 A】 口頭発表③

座長：都筑 真 (日本女子体育大学)

11:25 ~ 12:09 RY301 (良心館3階 R Y 3 0 1 番教室)

[健康福祉-A-07] 一般成人と体育・スポーツ系学部同窓生の Physical literacyの違い (測)

*松永 美咲¹、鈴木 宏哉¹、染谷 由希¹、河村 剛光¹、鄧 鵬宇¹、春日 晃章²、青野 博³、森丘 保典⁴、伊藤 静夫⁵、松尾 哲矢⁶、岡出 美則⁷、内藤 久士¹ (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 岐阜大学教育学部、3. 日本スポーツ協会、4. 日本大学スポーツ科学部、5. 東京マラソン財団、6. 立教大学コミュニティ福祉学部、7. 日本体育大学スポーツ文化学部)

11:25 ~ 11:39

[健康福祉-A-08] オンラインでの自重トレーニングがメンタ

ルヘルス関連指標に与える影響

(介,生,心,トレーニング科学)

*佐藤 雄也¹、望月 佑季奈¹、齋藤 未花¹、出口
実¹、上妻 歩夢¹、菊池 さやか¹、田代 空¹、本間
洋樹¹、岡本 孝信¹、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大
学)

11:40 ~ 11:54

[健康福祉-A-09] 膝前十字靭帯再建術後のアスリートの膝関
節屈曲・伸展筋力 (スポーツ医学)

*梅田 朋宏¹、若原 卓¹、新井 彩²、北條 達也¹
(1. 同志社大学大学院スポーツ健康科学研究
科、2. 同志社大学スポーツ健康科学部)

11:55 ~ 12:09

RY305

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向け
た生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表③

座長：綿引 清勝 (東海大学)

11:25 ~ 12:09 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

[生涯スポーツ-A-07] 放課後等デイサービスの指導者が運動
指導場面において困難感を抱える心理
的プロセスの類型化 (ア)

*高橋 一真¹、澤江 幸則² (1. リーフラス株
式会社、2. 筑波大学 体育系)

11:25 ~ 11:39

[生涯スポーツ-A-08] スポーツ中継を通じた視覚障害者のス
ポーツ理解と面白さの生成に関するコ
ミュニケーション論的分析 (政,ア,社)

*植田 俊¹、山崎 貴史² (1. 東海大学、2.
北海道大学)

11:40 ~ 11:54

[生涯スポーツ-A-09] 障害者のスポーツ施設利用を阻害する
要因の検討 (ア,社)

*高田 侑子¹、渡 正² (1. 順天堂大学ス
ポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学ス
ポーツ健康科学部)

11:55 ~ 12:09

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表①

座長：須甲 理生（日本女子体育大学）

2023年8月30日(水) 10:20～11:19 RYB1 (良心館地下1階RYB1番教室)

[競技スポーツ-A-01] 大学生球技系スポーツチームにおける選手間のマウンティング (コーチング)

*湯浅 暁子¹、中山 雅雄¹、秋山 央¹、門間 貴史¹ (1. 筑波大学体育系)

10:20～10:34

[競技スポーツ-A-02] アスリートのリーダーシップスキルの成長に関する検討(心)

*小菅(町田) 萌¹、廣光 佑哉² (1. 大阪体育大学 大学院、2. 同志社大学)

10:35～10:49

[競技スポーツ-A-03] バasketボール指導者の有効な「権限の行使」に関する一考察 (コーチング学)

*仲澤 翔大¹、小井土 正亮¹、藤本 元¹、會田 宏¹ (1. 筑波大学体育系)

10:50～11:04

[競技スポーツ-A-04] 体操競技における宙返り技のひねりに関する発生運動学的考察 (スポーツ運動学)

*山下 龍一郎¹ (1. 鹿屋体育大学)

11:05～11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB1)

[競技スポーツ-A-01] 大学生球技系スポーツチームにおける選手間のマウンティング (コーチング)

アンケート調査により収集した選手の実体験について

*湯浅 暁子¹、中山 雅雄¹、秋山 央¹、門間 貴史¹ (1. 筑波大学体育系)

インターネット空間を中心に「マウンティング女子」という言葉が注目を集めている。人間同士の関係の中で自らの立ち位置が上であることを確認したいために、言葉や態度で優位性を誇示する現象を、主に霊長類に見られる序列確認の行為”マウンティング”になぞらえた用語である。「マウンティング」という言葉が最初に誌面に載ることになった2014年(瀧波ユカリ・犬山紙子著『女は笑顔で殴りあう マウンティング女子の実態』筑摩書房)以降、ネット掲示板やSNSにおいて中高生や若者を中心に認知度が高まり、今日においてはマウンティング女子やカースト女子などを取り上げた書籍やテレビドラマ、Webコンテンツなどが散見されるようになってきた。このように社会的関心が高まっているにも関わらず、その実態や構造は未だ解明されていない部分が多く、アンケート調査やアクションリサーチなどは行われていないのが現状である。

アスリートの序列を決定づける最たる指標は心技体知の総合力としての競技力であることは言うまでもないが、選手たちはチーム内の人間関係の中で様々な序列争いに奔走している可能性がある。しかしながらアスリート同士のマウンティング事例を対象にした研究は例がないため、現状それらを評価する指標などは存在しておらず、チームワークや凝集性に与える影響については未知である。そのため国内大学スポーツチームにおける実態を明らかにし、その様相について検討する必要がある。そうして得られた結果は今後の集団スポーツ指導のためのコーチング研究や行動社会学研究の発展において意義あるものであると考えられる。今回は大学生球技系スポーツチームに所属するアスリートを対象に、自身の「マウンティング」に関する実体験を自由記述回答により抽出し、整理した内容を発表する。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB1)

[競技スポーツ-A-02] アスリートのリーダーシップスキルの成長に関する検討 (心)

*小菅 (町田) 萌¹、廣光 佑哉² (1. 大阪体育大学 大学院、2. 同志社大学)

リーダーシップはチームの成功に関連する要因のひとつとして挙げられる。選手のリーダー(=アスリートリーダー)は、コーチとは異なる影響をチームに与えるとされ、特に近年、研究が積み重ねられている。しかしながら、アスリートリーダーの成長に関する研究はほとんど行われておらず、発展が求められる分野である。本研究の目的は、アスリートのリーダーシップスキルを構成する要素を探索し、リーダーシップスキルの成長とチームの一体感を示す集団凝集性との関連について検討することであった。研究1ではアスリート・リーダーシップスキル尺度(ALSI)を作成し、その構成因子を探索的構造方程式モデリング(ESEM)と確認的因子分析(CFA)を用いて検証した。学生競技スポーツ参加者、411名への調査の結果、アスリートリーダーシップスキルを構成する4因子(認知、対人、マネジメント、ビジョニングスキル)が確認され、また結果はESEMモデルよりも、4因子のCFAモデル、そして高次因子CFAモデルの採用を示唆した。研究2では、研究1の結果をもとに、211名の学生競技スポーツ参加者へ縦断的に調査を行い、ALSIの測定不変性を検証した。さらに、アスリートリーダーシップスキルの変化と、集団凝集性の関係について交差遅延パネルモデルを用いて検討した。結果、ALSIの縦断的な測定不変性が確認された。またアスリートリーダーシップスキルは集団凝集性の変化を有意に予測しないが、集団凝集性はアスリートのリーダーシップスキルの変化を有意に、正に予測することが示唆された。これらの結果は、集団凝集性を向上させ、チームの機能を向上させることが、アスリートのリーダーシップスキルの成長を促す可能性を示唆している。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB1)

[競技スポーツ-A-03] バスケットボール指導者の有効な「権限の行使」に関する一考察（コーチング学）

A大学男子部におけるベンチメンバー選考の事例に着目して

*仲澤 翔大¹、小井土 正亮¹、藤本 元¹、會田 宏¹ (1. 筑波大学体育系)

集団スポーツの指導者は、戦術・戦略の立案やメンバー選考などに関して重要な決定権を持ち、それを用いてチームづくりを行う。この「権限の行使」（東海林、2014）は、多用されるとメンバーの自律性や創造性を阻害するが、的確に用いられるとチームワークがより強固になる。本研究では、20XX年全国日本大学選手権で優勝したA大学男子バスケットボール部における大学選手権前のベンチメンバー選考を巡る出来事に着目し、大学バスケットボール指導者の有効な「権限の行使」について事例的に明らかにすることを目的とした。A大学監督のY氏に半構造化インタビューを実施し、その逐語録の精読を通して、テキストの作成・分析を行い、個別事例の様相を質的に解読した。当時のA大学には「（Y氏でも）教えられないくらいのセンス」があるが「そこに付随する姿勢がなく、精神的に未熟」な選手がいた。当初は彼を戦力として起用していたが、「駄目な時は本当にチームを下げてしまう言動を繰り返していた」ため、Y氏は「直接何回も話をした」「同期に『彼に声をかける』と伝え続けた」。しかし、彼の言動は変わらず、「周りが『あいつ無理です』となってきた」ため、「全体のことを考えて、戦力から外す」決断を下した。それにより、周囲の選手が「目標に向かって、自分のことに集中して良いんだ」となり、「チームとしてのまとまりが強く」なり、「結果として彼をベンチから外したことが優勝の要因となった」という語りが得られた。これらの語りから、指導者は権限を行使する際、1)「権限の行使」が適切か否かをチーム全体の状況を総合的に鑑みて判断すること、2)「権限の行使」までのプロセスを疎かにしないこと、3)「権限の行使」までに「quickコーチング」や「slowコーチング」（東海林、2014）など様々な手法を用い、周囲が納得できる状況を整えることの3点が重要であることが明らかとなった。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB1)

[競技スポーツ-A-04] 体操競技における宙返り技のひねりに関する発生運動学的考察（スポーツ運動学）

*山下 龍一郎¹ (1. 鹿屋体育大学)

体操競技の宙返り技の指導を行う上で、ひねりが上手くかからないという現象に立ち会うことが少なくない。これは筆者も例外ではなく、跳馬における〈伸身カサマツとび1回ひねり〉（アカピアン）という技でひねりがかからない大学生男子選手3名の指導にあっている。指導対象となる3名の特徴としては、〈伸身カサマツとび1/2ひねり〉までは高い習熟度を示すものの、「アカピアン」を実施しようとするとうひねりがかからず、場合によっては空中分解してしまうというものである。「アカピアン」という技は側転とびで着手してから着地までにおおよそ7/4回ひねりを行うものである。対象者3名はゆかの〈後方伸身宙返り3回ひねり〉や〈前方伸身宙返り2回ひねり〉といった技については高度に習熟しており、宙返りひねりの技術を十分に習得していると考えられる。このことから、ゆかにおける宙返りひねりと、跳馬における宙返りひねりではその技術が異なる可能性が考えられる。ゆかの宙返りひねりは足で踏切をしてからひねりを仕掛けるのに対し、跳馬においては着手してからひねりを仕掛けることになり、こうした違いがひねり技術の違いに関係していると考えられる。また、対象者3名は、跳馬の〈伸身カサマツとび1/2ひねり〉を実施する際にはひねっている感覚がないが、ゆかの〈後方伸身宙返り3/2ひねり〉や〈前方伸身宙返り1回ひねり〉ではひねっている感覚があると報告している。これらの技のひねり数はほぼ同様であるにも関わらず、跳馬の宙返りの方はひねりとして感覚されていないということであ

る。本研究においては、対象者の「アカピアン」の修正事例を通し、ゆかにおける宙返りひねりと跳馬における宙返りひねり技術の差異性について考察し、宙返りひねりという現象そのものについて発生運動学の立場から分析することとする。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表②

座長：永野 康治（日本女子体育大学）

2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB2 (良心館地下1階 R Y B 2 番教室)

[競技スポーツ-A-05] サッカーにおけるゴールキーパーのクロス処理難易度を定量化する回帰式の構築およびその検証（測,方）

*平嶋 裕輔¹、高宮 佳祐¹、鈴木 健介²、浅井 武³、中山 雅雄³（1. 静岡大学、2. 国際武道大学、3. 筑波大学）

10:20 ~ 10:34

[競技スポーツ-A-06] オリンピック選手における DRD2遺伝子 rs7131056多型の頻度（生）

*上妻 歩夢¹、本間 洋樹¹、齋藤 未花¹、出口 実¹、膳法 浩史²、松本 隆太郎³、松本 慎吾¹、岡本 孝信¹、中里 浩一¹、菊池 直樹¹（1. 日本体育大学、2. 東京聖栄大学、3. 育英大学）

10:35 ~ 10:49

[競技スポーツ-A-07] アスリートにおける膝関節靭帯損傷の既往と遺伝子多型との関連性（生）

*田代 空¹、アルメイダ ケトリーン¹、上妻 歩夢¹、出口 実¹、本間 洋樹¹、齋藤 未花¹、竹腰 誠¹、梶 規子¹、岡本 孝信¹、中里 浩一¹、菊池 直樹¹（1. 日本体育大学）

10:50 ~ 11:04

[競技スポーツ-A-08] 空手組手競技における先取点獲得に有効な戦術（方）

*大徳 紘也¹、松本 剛志¹、大石 健二²（1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学）

11:05 ~ 11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB2)

[競技スポーツ-A-05] サッカーにおけるゴールキーパーのクロス処理難易度を定量化する回帰式の構築およびその検証 (測,方)

*平嶋 裕輔¹、高宮 佳祐¹、鈴木 健介²、浅井 武³、中山 雅雄³ (1. 静岡大学、2. 国際武道大学、3. 筑波大学)

本研究の目的は、ロジスティック回帰分析を用いて、クロス処理難易度を定量化する回帰式を構築するとともに、その検証を行うことであった。標本は、回帰式の構築に2018FIFAワールドカップロシア大会予選リーグ48試合を、検証に決勝トーナメント16試合を用いた。

まず、ゲームパフォーマンス分析により、ゴールキーパーがクロスに対応するシーンから、クロス処理の難易度に関連すると考えられる20項目およびクロス処理の成否に関するデータを収集した。その後、収集したデータをロジスティック回帰分析により統計処理を行い、クロス処理難易度を定量化するための主要因を抽出した。

その結果、クロス処理難易度に影響を及ぼす主要因は、クロスに至るまでの状況 (セットプレー or オープンプレー)、クロス者に対する前方守備者の有無、クロス者に対する接触守備者の有無、クロスボールが蹴られた後の他選手による軌道の変化の有無、クロス到達地点5m以内の相手選手数、クロス到達地点5m以内の味方選手数、クロス到達地点両ポスト間の味方選手数、クロスが蹴られた地点からゴール中心までの距離、クロス到達地点からゴール中心までの距離、守備側最終ラインからゴールラインまでの距離、クロス速度の11要因であった。これら11要因の回帰係数を組み合わせることにより、クロス処理難易度を定量化する回帰式を構築した。

構築された回帰式の検証結果については学会当日報告する。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB2)

[競技スポーツ-A-06] オリンピック選手における DRD2遺伝子 rs7131056多型の頻度 (生)

*上妻 歩夢¹、本間 洋樹¹、齋藤 未花¹、出口 実¹、膳法 浩史²、松本 隆太郎³、松本 慎吾¹、岡本 孝信¹、中里 浩一¹、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学、2. 東京聖栄大学、3. 育英大学)

【背景】エリートアスリートのメンタルヘルスに関連するメタ分析では、不安症やうつ病の有病率が34%であることが報告されており、一般者を対象とした研究よりも高い傾向がある。メンタルヘルスは、遺伝的要因が関与していることが示唆されている。その中でもドーパミン受容体 D2(DRD2)遺伝子多型は、複数の研究で検討されており、DRD2遺伝子 rs7131056多型の Aアレルの頻度は、うつ病患者で高いことが報告されている。一方で、エリートアスリートを対象にメンタルヘルスに関連する遺伝子多型との関連性を検討した研究は少ない。そこで、本研究では、オリンピック選手を対象に DRD2遺伝子 rs7131056多型頻度についてコントロール群と比較することを目的とした。【方法】対象者は、オリンピック選手38名(男性33名、女性5名)、コントロール群202名(男性98名、女性104名)とした。オリンピック選手の競技は、ウエイトリフティング(19名)とレスリング(19名)であった。Oragene-DNA kitを用いて唾液を採取し、DNAの抽出を行った。DRD2遺伝子 rs7131056多型の解析は、ジャポニカアレイ v2(TOSHIBA 社製)を用いて実施した。統計処理は、カイ二乗検定を用いた。【結果】DRD2遺伝子 rs7131056多型の CC、CA、AA型の頻度は、コントロール群で38%(77名)、44%(89名)、18%(36名)であり、オリンピック選手では24%(9名)、37%(14名)、39%(15名)であった。コントロール群とオリンピック選手の多型頻度の比較において、genotypeおよび Recessiveモデル(CC + AC vs AA)で有意差が認められた(p = 0.009、p = 0.002)。【結論】オリンピック選手において、DRD2遺伝子 rs7131056多型の AA型の頻度が有意に高いことが示唆された。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB2)

[競技スポーツ-A-07] アスリートにおける膝関節靭帯損傷の既往と遺伝子多型との関連性 (生)

*田代 空¹、アルメイダ ケトリン¹、上妻 歩夢¹、出口 実¹、本間 洋樹¹、齋藤 未花¹、竹腰 誠¹、梶 規子¹、岡本 孝信¹、中里 浩一¹、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学)

[背景]膝関節靭帯(KEL)損傷はアスリートにとって重篤な損傷であり、損傷リスクを知ることは予防するための知見となる。KEL損傷に関する遺伝的要因について、単一の遺伝子多型との関連性の報告が多く、複数の遺伝子多型を合わせて検討されたものは少ない。そこで、本研究ではアスリートを対象として靭帯損傷に関連する複数の遺伝子多型を用いて膝関節靭帯損傷との関連性を検討することとした。[方法]対象者は、アスリート378名(男性257名、女性121名)とした。アンケート調査にてKEL損傷の既往歴を調査し、医師から診断を受けた79名をKEL群、既往歴がない299名をコントロール(CON)群とした。遺伝子解析は唾液を Oragene-DNA kitを用いて採取し、靭帯組織の構造と修復などに関与する、COL5A1遺伝子 rs12722多型、COL1A1遺伝子 rs1107946多型、MMP3遺伝子 rs679620多型、VEGFA遺伝子 rs699947多型を TaqManプローブ法にて解析をした。各多型は、先行研究を基に損傷リスクが高いホモ多型を2点、ヘテロ多型を1点、リスクが低いホモ多型を0点とした。さらに、合計スコアが3点以上または3点未満に分類した。[結果]4つの遺伝子多型において、KEL群とCON群との間に有意な多型頻度の違いはみられなかった。一方、KEL群において、合計スコアが3点以上を持つアスリートの割合がCON群と比較して有意に高かった(オッズ比 = 1.80, 95%信頼区間: 1.10-3.02, p = 0.03)。[結論]COL5A1遺伝子 rs12722多型、COL1A1遺伝子 rs1107946多型、MMP3遺伝子 rs679620多型、VEGFA遺伝子 rs699947多型を用いて算出した合計スコアは、アスリートにおける膝関節靭帯損傷に関連することが示唆された。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RYB2)

[競技スポーツ-A-08] 空手組手競技における先取点獲得に有効な戦術 (方)

*大徳 紘也¹、松本 剛志¹、大石 健二² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

空手組手競技は複数の動作からなる攻撃と防御技術により試合が展開され、有効な技を決めることによる得点数で勝敗を競うスコア競技である。組手競技における先取点は、同点で試合終了した場合に先取点を獲得していた選手を勝者とするルールがある。つまり先取点は1点という得点に加え、勝敗の判定基準の一つでもある。先取点は他の得点とは異なる効果を有すると同時に、優位に試合を展開していく上でも重要となる。大徳ら(2022)の報告により、国際大会における勝利した試合の70%が先取点を獲得しており、先取点を獲得することは勝利に強く関連することが明らかとなった。しかし、先取点を獲得するために、どのような戦術を用いることが有効なのかは明らかにされていない。そこで本研究は、先取点獲得のために有効な戦術に関する特徴について分析を行い、先取点獲得の可能性を高めるための戦術情報を明らかにすることを目的とした。分析対象は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会にて実施された、空手組手競技全132試合の内、先取点が確認された124試合とした。各試合における試合開始または試合中断から再開後の先取点獲得時点までの、各技の頻度と経過時間について分析を行った。本研究の結果、先取点獲得は試合開始から1分30秒以内の時間帯において85回(68.5%)確認された。先取点獲得までに技が繰り出されなかった試合が52試合(41.9%)と最も多く、次いで1回技を繰り出した試合が42試合(33.9%)であった。先取点獲得までに要した時間は、31-45秒が最も多く32回(25.8%)であった。先取点獲得までの戦術は、先取点を狙う技までに複数回技を繰り出す戦術よりも、少ない技数で展開していくことが有効と考えられた。先取点は試合時間の半分までに獲得される頻度が高いが、所要時間まで考慮した先取点獲得の戦術プランが必要と考えられた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表①

座長：國友 亮佑（環太平洋大学）

2023年8月30日(水) 10:20～11:19 RY103（良心館1階RY103番教室）

[競技スポーツ-C-01] パワー向上を目的とした漸減負荷プロトコルの開発（生）

*望月 佑季奈¹、菊池 さやか¹、齋藤 未花¹、アルメイダ ケトリン¹、尾崎 隼朗²、橋本 卓弥³、菊池 直樹¹（1. 日本体育大学、2. 東海学園大学、3. 東京理科大学）

10:20～10:34

[競技スポーツ-C-02] 野球の指導現場における効率的なデータ集積方法に関する実践研究（測,方）

*河村 剛光¹、光川 眞壽²、染谷 由希¹、中村 絵美³（1. 順天堂大学スポーツ健康科学部、2. 東洋学園大学、3. 順天堂大学保健医療学部）

10:35～10:49

[競技スポーツ-C-03] 大学男子バスケットボール選手における異なるフィードバック方法がランニングジャンプの跳躍高および動作改善に及ぼす即時的影響（バ）

*早田 亘輝¹、高山 慎¹、下河内 洋平¹（1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科）

10:50～11:04

[競技スポーツ-C-04] 異なる速度低下を用いたレジスタンスエクササイズとスプリントインターバルトレーニングが最大酸素摂取量に与える影響（生）

*菊池 さやか¹、望月 佑季奈¹、本間 洋樹¹、菊池 直樹¹（1. 日本体育大学）

11:05～11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY103)

[競技スポーツ-C-01] パワー向上を目的とした漸減負荷プロトコルの開発 (生)

パイロットスタディ

*望月 佑季奈¹、菊池 さやか¹、齋藤 未花¹、アルメイダ ケトリーン¹、尾崎 隼朗²、橋本 卓弥³、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学、2. 東海学園大学、3. 東京理科大学)

背景：Velocity loss トレーニングにおける速度低下が小さいプロトコルはパワーを向上させる(Hickmott et al.2022)。一方、セット内の回数が少なくトレーニング量の確保は難しい。したがって本研究では、セット内で負荷を漸減させることで速度低下を最小限に抑えた漸減負荷プロトコルを提案することを目的とし、トレーニング量を確保するとともに幅広い負荷でのパワー発揮能力の向上を目指す。方法：対象者はトレーニング経験のある男性14名(年齢 25.5 ± 3.2 歳、身長 171.6 ± 3.9 cm、体重 70.3 ± 6.7 kg)とし、低負荷(LL：n=5)、高負荷(HL：n=4)、漸減負荷(SLR：n=5)の3群ヘランダムに振り分けた。トレーニング期間は週2回3週間とした。プロトコルはベンチプレスで、LLが55%1RMを8回、HLが85%1RMを5回、SLRは85%1RMを2回、70%1RMを2回、55%1RMを2回の計6回を1セットとし、各群それぞれ3セット、休息時間は3分であった。トレーニング量は3群が同等となるように設定した(負荷×回数×セット数)。トレーニング前後にベンチスローを用いた30%、50%、70%1RMのピークパワー(PP)の測定を行った。結果：各群のトレーニング量は3群で同等であった(LL：440、HL：425、SLR：420)。トレーニング後におけるPPの変化率は30%1RMがHL<SLR<LL、50%1RMがLL<SLR<HL、70%1RMがLL<HL<SLRの順で高い変化を示した。結論：SLRにおけるベンチスローのPPは全ての負荷で変化した、LLやHLと比較して中負荷および低負荷での変化率が低かった。SLRはセッション内における各負荷に対する挙上速度が他の群と比べて低かったため、これらが影響した可能性がある。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY103)

[競技スポーツ-C-02] 野球の指導現場における効率的なデータ集積方法に関する実践研究(測,方)

*河村 剛光¹、光川 眞壽²、染谷 由希¹、中村 絵美³ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部、2. 東洋学園大学、3. 順天堂大学保健医療学部)

スポーツの指導現場に存在するデータを効率よく蓄積・活用することは、当該分野の発展にも関わる重要なテーマである。体育スポーツ健康に関わる多くの領域が横断するための方策と、現場と研究が連携するための工夫は類似する部分もあるだろう。本研究では、スポーツにおけるデータを現場から無理なく集積する持続可能な仕組みの基盤構築を最終目的とし、まずは野球における効率的なデータ集積に関する実践的な試みを報告する。本研究では、独自のデータ収集webシステムも活用しながら、野球の指導現場における各種データを集積していく実践的な取り組みを行った後、対象者(大学野球選手)へのアンケート調査を行った。データ項目は、主に①コンディション・トレーニング、②測定、③野球に分類した。アンケートでは、分類に対応して、重要及び重要ではないと考える項目を中心に調査した。48名のアンケートを集計した結果、①の重要項目は疲労感(67%)、練習時間(50%)、睡眠関係(42%)で、重要ではない項目は睡眠関係(23%)、体温・努力度等(各19%)であった。②の重要項目は体脂肪関連(90%)、体重(71%)、重要ではない項目は20mシャトルラン(44%)、RJ指数(35%)であった。③の重要項目はスクワットジャンプ(60%)、塁間走(33%)、重要ではない項目は12分間走(35%)であった。今回のwebシステムを元に、また普段の対象者の経験から、野球におけるデータとして重要と考える項目が明らかとなった。これらは優先的に収集すべきデータ群であろう。一方で、一定の入力の利便性があっても、他に方策がなく、ただデータを収集しようとするだけでは、データ入力率は早期に低下した。その要因はデータ項目や量による影響だけではないとも言える。今後は、データの重要度だけでなく、集積方法に関わ

多くの工夫について試行錯誤する必要がある。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY103)

[競技スポーツ-C-03] 大学男子バスケットボール選手における異なるフィードバック方法がランニングジャンプの跳躍高および動作改善に及ぼす即時的影響 (バ)

*早田 亘輝¹、高山 慎¹、下河内 洋平¹ (1. 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科)

【目的】本研究では1) iPhoneを用いた Running Jump(RJ)の跳躍高推定の妥当性と、2) RJ熟練者の跳躍高や動作改善に対する iPhoneを用いた視覚的 Feedback(FB)の有効性を検証した。【方法】大学男子バスケットボール選手20名を対象とし、Oral Feedback群(OF)と Oral & Visual Feedback群(OVF)に群分けした。初日に iPhoneによる RJ動作の撮影と iPhone及び地面反力計による滞空時間測定、反射マーカによる直接的な測定で RJ中の跳躍高を算出した(それぞれ JH_{iPhone} 、 JH_{FP} 、 JH_{RM})。二日目では初日の映像をもとに OFでは口頭のみ、OVFでは口頭と連続写真を用いた FBを行い、RJ測定を行った。【結果】 JH_{iPhone} 及び JH_{FP} は JH_{RM} より有意に小さく ($p<.05$)、それぞれ強い正の相関関係($r=.722-.974$)を示した。介入後、OVFのみ跳躍高が有意に向上した (OVF: $p<.05$, OF: $p=.521$)。動作改善数は OFよりも OVFで有意に多い傾向を示した($p=.052$)。【結論】 JH_{iPhone} は JH_{FP} と同等の精度であるが、 JH_{RM} と比べて過小評価する傾向にある。RJの跳躍高や動作の改善には、口頭に加えて視覚的 FBを用いることが望ましい。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY103)

[競技スポーツ-C-04] 異なる速度低下を用いたレジスタンスエクササイズとスプリントインターバルトレーニングが最大酸素摂取量に与える影響 (生)

*菊池 さやか¹、望月 佑季奈¹、本間 洋樹¹、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学)

【背景】スプリントインターバルトレーニング(SIT)は、少ない仕事量で最大酸素摂取量(VO_{2max})を高めることができる。現在、SITとレジスタンスエクササイズ(RE)との併用が、SIT時のパワー発揮およびトレーニング効果に与える影響は明らかになっていない。そこで本研究は、異なる速度低下(Velocity loss:VL)を用いた REが SIT実施後の血中乳酸濃度(La)および長期的な VO_{2max} の変化に与える影響を検討する。【方法】対象者は、成人16名(男性13名、女性3名:年齢 23.5 ± 3.7 歳)とした。REは、80%1RMの平行スクワット(SQ)を4セット(休息4分)で行った。挙上回数は、各セットの最高速度から10%低下(VL10)または、40%低下(VL40)した地点でセットを終了し、対象者は、SITのみ(SIT群)、10%とSIT(VL10群)、VL40%とSIT(VL40群)の3群をランダムに振り分けた。SITは自転車エルゴメーターを用いて、10秒の全力運動と80秒の休息を6回行った。急性反応として、SIT直後のLaを測定し、3週間計6回のトレーニング前後に VO_{2max} を測定した。【結果】対象者の VO_{2max} は 44.9 ± 6.9 ml/kg/minであった。SIT後のLaにおいて、VL40群: 16.2 ± 1.9 mmol/L、VL10群: 14 ± 3.6 mmol/L、SIT群: 12.6 ± 2.3 mmol/Lの順に高かった。 VO_{2max} の変化率は同等であった(SIT群: 2.2%、VL10群: 3.5%、VL40群: 3.1%)。【結論】異なる速度低下を用いたレジスタンスエクササイズは、スプリントインターバルトレーニング後の血中乳酸濃度に影響するが、3週間の最大酸素摂取量の変化には影響しない。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】口頭発表②

座長：九鬼 靖太（大阪経済大学）

2023年8月30日(水) 10:20～11:19 RY107 (良心館1階 R Y 1 0 7 番教室)

[競技スポーツ-C-05] サッカーにおける継続的なドリブルトレーニングがドリブル動作様式に及ぼす効果（方）

*多賀 健^{1,2} (1. 苫小牧工業高等専門学校、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院
コーチング学位プログラム)

10:20～10:34

[競技スポーツ-C-06] カヌースプリント選手を対象としたランダム化比較試験を用いたトレーニングプログラム運用の試み（生）

*本間 洋樹¹、望月 佑季奈¹、菊池 さやか¹、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学)

10:35～10:49

[競技スポーツ-C-07] ゲームパフォーマンスビッグデータに項目反応理論を適用したサッカー集団攻撃技能の達成度評価基準（測）

*徐 広孝¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

10:50～11:04

[競技スポーツ-C-08] サッカーにおけるマークを外すプレーの成否に影響を与える要因の解明（方）

*鈴木 健介¹、佐々木 竜治²、与座 英之²、平嶋 裕輔³ (1. 国際武道大学、2. 東海大学、3. 静岡大学)

11:05～11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY107)

[競技スポーツ-C-05] サッカーにおける継続的なドリブルトレーニングがドリブル動作様式に及ぼす効果 (方)

中学サッカー選手を対象として

*多賀 健^{1,2} (1. 苫小牧工業高等専門学校、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院コーチング学位プログラム)

本研究の目的は、中学サッカー選手を対象にサッカーにおける継続的なドリブルトレーニングがドリブルパフォーマンスや動作様式に及ぼす影響を明らかにすることである。被験者は中学1年生のサッカー選手であり、トレーニング群は17名、コントロール群は15名であった。トレーニング群はドリブルトレーニングを、コントロール群はアジリティ及びパス&コントロールトレーニングを1回2時間行うトレーニングの中でトレーニング開始から約40分間行い、それを1週間に約3回の頻度で16ヶ月間実施した。両群はドリブルテストとドリブル時の動作撮影をトレーニング前、3ヶ月後、6ヶ月後、10ヶ月後、16ヶ月後に実施した。ジグザグドリブルにおけるTimeはトレーニング群の方がコントロール群と比較しトレーニングが進むにつれ大幅に減少し、その要因としてジグザグドリブル時のボールタッチ毎の身体重心速度平均が大きく向上したことが考えられる。ダブルシザースフェイントでは、シザース時のTimeはトレーニング群の方がコントロール群より大幅に減少し、その要因としてトレーニング群の前額面の水平方向における体軸傾きの標準偏差が小さくなったことが考えられる。さらに、身体重心速度はトレーニング群のみトレーニングが進むにつれて有意に増加した。その要因として、ボール接地時の支持脚膝関節角度が減少したことが考えられる。ダブルタッチフェイントでは、ボール速度と身体重心速度は両群共に増加したが、トレーニング群の方がコントロール群より大幅に増加した。その要因として、ボール接地時の支持脚膝関節角度が減少したことが考えられる。以上の結果から、本研究の中学サッカー選手を対象とした継続的なドリブルトレーニングは、ドリブルテストのTimeの減少やドリブル時の動作様式を変化させることが示唆された。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY107)

[競技スポーツ-C-06] カヌースプリント選手を対象としたランダム化比較試験を用いたトレーニングプログラム運用の試み (生)

自転車エルゴメーターを用いたスプリントインターバルトレーニングでの実践

*本間 洋樹¹、望月 佑季奈¹、菊池 さやか¹、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学)

【背景】競技力向上には選手自身がメニューの目的や必要性を理解して主体的に練習に取り組んでいるかが重要となる。【目的】ランダム化比較試験を取り入れたトレーニングプログラムが、その後の練習メニューの選択および意識変化に与える影響を検討する。【方法】対象者はカヌースプリント選手44名（男性：41名、女性：5名）とした。対象のトレーニングは、週2回3週間の計6回の自転車エルゴメーターを用いたスプリントインターバルトレーニング（SIT）を実施した。SITは30秒（体重の7.5%負荷）運動、270秒休息を3回繰り返す30秒運動群（30S）および6秒（体重の10%負荷）運動、30秒休息を6回繰り返し、2セット（セット間休息240秒）行う6秒運動群（6S）の2群とし最初のサイクルはランダムに割り振った。トレーニング前後に、ウインゲートテスト、ピークパワーテスト、オールアウトテストおよび脚伸展パワーの測定を実施した。トレーニング後には、各トレーニングの効果についてのフィードバックを行い、次サイクルからのトレーニングを自由に選択させた。【結果】トレーニング後のフィードバックの結果、30S群から6Sに変更した対象者は6名（27%）、6Sから30Sに変更した対象者は12名（55%）であった。選択理由の一例として、6Sを実施した対象者は、ピークパワーテストにおいてピークパワーが674Wから781Wに向上し、トレーニングによって「より早く力が出せるようになった」との内省報告があった。さらに、「トップスピードを維持する能力がない」と分析を行い、ウインゲートテストの平均パワーおよびオールアウトテストの時間において変化量の大きかった30Sを選択した。【結論】トレーニングプログラムにランダム化比較試験を取り入れ、トレーニング効果をフィードバックすること

で、必要とするトレーニングを自ら選択できる可能性がある。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY107)

[競技スポーツ-C-07] ゲームパフォーマンスビッグデータに項目反応理論を適用したサッカー集団攻撃技能の達成度評価基準 (測)

*徐 広孝¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

サッカー選手の集団攻撃技能は実験的な測定が比較的困難であることから、指導者の主観によって測定、評価される傾向が強い。また近年のテクノロジーの発展によって、試合中のプレー結果を測定したゲームパフォーマンスデータが膨大化する傾向が続いており、ビッグデータとしての性質を有するようになった。こうした背景を受けて、本研究はJリーグの攻撃プレーのゲームパフォーマンスビッグデータを用いて、目標基準準拠測定によるサッカーの集団攻撃技能評価法の開発を試みた。対象は2011年のJリーグディヴィジョン1 (J1) とディヴィジョン2 (J2) の全686試合で測定された1,312,117の攻撃アクションであった。攻撃アクションはドリブル、パス、トラップ、シュートなどの個別アクションとその時の位置座標等から構成される。先行研究の測定項目と、数値データを二値化するための達成基準に基づき、18項目×147,032プレーのバイナリデータセットを構成した (特殊な攻撃パターンで遂行されることがあるため、コーナーキック、ペナルティキック、フリーキックは対象外とした)。項目の局所独立性と、最尤法、オプティム回転の因子分析によって次元性を確認し、2パラメータ・ロジスティック・モデルの項目反応理論を分析した。その結果、18項目すべての適合度、テストの適合性、妥当性、信頼性、およびパラメータの不変性が認められ、集団攻撃技能を測定する数理モデルが作成された。最終的に項目困難度に基づき、横方向にゆさぶりをかけ、縦方向に移動し、決定的エリアに進入してシュートするという、攻撃の順序性を有する7要因の達成度評価基準が構成された。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY107)

[競技スポーツ-C-08] サッカーにおけるマークを外すプレーの成否に影響を与える要因の解明 (方)

相手守備組織内に侵入したプレーを対象として

*鈴木 健介¹、佐々木 竜治²、与座 英之²、平嶋 裕輔³ (1. 国際武道大学、2. 東海大学、3. 静岡大学)

サッカーにおける得点機会獲得には、攻撃時に相手守備組織内に侵入すること、および相手守備組織内でシュートコースに相手守備者がいないノーマークの状況を作ることが重要であり、これらのことがJリーグの課題であることを明らかにした (鈴木ほか, 2018 ; 2019)。これら一連の研究によって、得点機会獲得には相手守備組織内でノーマークの状況を作る=マークを外す技能の習得が重要であること、マークを外す技能習得法の開発の必要性が示された。マークを外す技能習得法の開発には、まずマークを外すための有効なプレーを明らかにする必要があるが、マークを外すプレーに言及した文献は指導書のような定性的見解が多い。そこで、本研究の目的は、マークを外すプレーの成否に影響を与える要因の解明とした。

FIFAワールドカップ2018のグループステージ48試合における相手守備組織内に侵入した795プレーを対象とした。先行研究からマークを外すプレーに影響を与える可能性のある22項目を抽出し、それらの分析項目を用いて記述的ゲームパフォーマンス分析を行なった。統計処理にはロジスティック回帰分析を用いた。

その結果、マークを外すプレーに影響を与える要因は、「動き出しタイミング：パス出し手がボールを受ける前」・「ボール受けエリア」・「パスが出てからの守備組織侵入選手の移動距離」・「パス距離」・「守備組織

侵入選手より前にいる味方選手の人数」であった。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会 【課題 A】 口頭発表①

座長：高橋 浩二（長崎大学）

2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY201 (良心館2階 R Y 2 0 1 番教室)

[学校保健体育-A-01] 体育原理履修者におけるスポーツや体育の問題意識に関する検討
(教)

*早田 剛¹、清田 美紀¹、柴山 慧¹、白石 翔¹、坂本 康輔¹、久田 孝¹ (1. 環太平洋大学)

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-A-02] 移動過程に着目したランニングによる大学生の認識変容に関する研究 (教)

*齋藤 祐一¹ (1. 鳴門教育大学)

10:35 ~ 10:49

[学校保健体育-A-03] 大学体育授業において身体運動をつくり出すプラグマティック的思考への一考察 (教,バ)

*山崎 正枝¹ (1. 金沢大学)

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-A-04] Gaze behavior of Physical education (PE) teacher trainees in organizational arrangements (教)

*Oesterhelt Verena¹、Neumann Melanie、Appel Sebastian、Junge-Bornholt Lea (1. University of Giessen (Germany))

11:05 ~ 11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY201)

[学校保健体育-A-01] 体育原理履修者におけるスポーツや体育の問題意識に関する検討 (教)

*早田 剛¹、清田 美紀¹、柴山 慧¹、白石 翔¹、坂本 康輔¹、久田 孝¹ (1. 環太平洋大学)

【背景】「体育原理」は教員免許法施行規則に記載のある通り、保健体育での修得を要する科目である。現行の学習指導要領では、生涯にわたって運動に親しむ資質・能力を育てることや体力の向上を図ることをねらいとして、小学校から高等学校までを見通して、指導内容の系統化や明確化を図っている。また体育科教員養成課程を持つ大学は、学習指導要領の内容だけに留まらず、新しい世代における学生の課題意識を踏まえた教員養成をしていく必要がある。

【目的】本研究の目的は、「体育原理」を履修する大学生におけるスポーツや体育の問題意識を調査し、今後の教授内容について検討することとした。

【方法】「体育原理」を履修した2022年度学生442名、2023年度学生450名に対して、質問を「スポーツや体育にはどんな問題がありますか？一番気になる問題の具体例を挙げ、その問題の要因を『なぜならば、』を用いて説明し、400文字以上で答えてください」とし、Google Formにて回答させた。その後、各年度の回答をユーザーローカル テキストマイニングツールによって分析し比較検討した。

【結果】有効回答数と平均文字数は、2022年度：420件・460.4±114.6文字、2023年度：410件・452.6±290.5文字であった。テキストマイニング分析の結果、共通言語は名詞において「選手」「運動」「怪我」「指導」「暴力」が得られた。単語比較では、2022年度において「パワハラ」「根強い」「おかしい」「弱い」、2023年度において「怖い」「ほしい」「激しい」が得られた。

【考察】共通言語から体育原理の内容として捉えていくべき内容が明らかとなった。単語比較においては年度による違いがみられ、コロナ禍の影響と考察した。以上を踏まえて、「体育原理」の教授内容を検討した。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY201)

[学校保健体育-A-02] 移動過程に着目したランニングによる大学生の認識変容に関する研究 (教)

*齋藤 祐一¹ (1. 鳴門教育大学)

学校体育における長い距離を走る運動は、学習指導要領において陸上競技領域の長距離走と体づくり運動の持久走に大別される。しかしながら、実際にそれらの運動に取り組む主体である学習者にとっては、同様の運動形態ゆえの混乱があると考えられる。とりわけ、それぞれの特性に対する認識が曖昧なまま、人格形成や体力向上といった運動の効果が強調された長い距離を走る運動を経験してきた大学生は、矮小化された長い距離を走る楽しさしか味わっていない可能性がある。転じて、注目すべきは移動過程にあると言えないか。例えば、Cook (2015) はランニングを無意味な移動性の形態と指摘している。陸上競技場を周回したり、街中の道に沿って走ったりすることは、一定の時間や距離を走るという目的や、目的地での行動以上の意味を有しているのである。そこで、本研究では大学生がスタートからゴールまで走る、その移動過程に着目した。具体的には、GPSを用いた移動過程のトラッキングとコースの創造を含むランニング (GPSアート) を通して、大学生がランニングの意味を生成・変容する過程を明らかにすることとした。

2023年2月に O 県 K 大学で開講された集中授業の受講者の内、インタビューに応じた5名を調査対象とした。授業内で実施したランニングについて、半構造化面接によって録音データを収集した。その際、これまで調査対象者が体験してきた部活動や体育授業におけるランニングと対比させるよう促した。得られたデータは文字に起こし、M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) を用いて分析した。その結果、移動過程そのものに注目したランニングは、大学生にとってランニング概念を拡張する機能を有しており、走者の視点だけでなく地図を見るような俯瞰的な視点を生じさせ、それに伴って新たなランニングの魅力を探るモードを導く可能

性があることが示唆された。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY201)

[学校保健体育-A-03] 大学体育授業において身体運動をつくり出すプラグマティック的思考への一考察 (教,バ)

*山崎 正枝¹ (1. 金沢大学)

2023年5月に G7富山・金沢教育大臣会合が開催され、コロナ渦を経ての今後の教育のあり方に、全ての子どもたちの可能性を引き出す教育の実現、課題解決に成長を出す人材育成などが採択された。この経緯を含め、大学での教員養成課程を担う側の研鑽研究を深める。本研究では、大学授業でのダンス授業が、主体的で対話的な深い学びとして身体運動を創り出すプラグマティック的授業であったのかを、2022年を対象に具現化して検証する。授業では、振り返りや自己評価、認知プログラムに書くことを大切に、インフォームドコンセントを得てアンケート調査を実施した。方法は、記述の言葉を抽出してアルゴリズム化、プラグマティック的思考として重視した。結果、授業の学習における自己評価は高く満足度が示された。とりわけ、知識・技術には86.7%、思考力・判断力・表現力には86.7%、学びに向かう力には100%の自己評価を得た。振り返りでの記述された言葉の頻度は、「動き」が21.1%、「仲間と協力」が29.0%、「楽しい」が66.7%であった。実践を通して何を学んだかには「動き」を意識したこと、どのように参加したかは「仲間と協力」したこと、主観的評価にどうであったかは「楽しい」活動であったことが示された。毎時の感想での結びの記述は、前半では「難しかった、学習した」、中間では「理解した、挑戦した」、後半では「表現した、できた」であり、学習過程が推測される。以上、対象者が授業の過程から実践を重ねながらの実践したことを考察する。ダンス教育にて、総合的に「する、見る、支える、つくる」のアクティビティが、主体的で仲間との協働によって対話的な学びとなり、必然的に楽しく達成感を得ることに繋がったと思われる。授業での楽しい経験は、未来の教師が「子どもが楽しい授業づくり」への探求心を深めていくものと期待したい。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY201)

[学校保健体育-A-04] Gaze behavior of Physical education (PE) teacher trainees in organizational arrangements (教)

*Oesterhelt Verena¹、Neumann Melanie、Appel Sebastian、Junge-Bornholt Lea (1. University of Giessen (Germany))

Teachers operate within a complex, multi-dimensional, co-constructivist context. Their interpersonal behavior is fundamental for learning conditions and outcomes, providing a constantly morphing classroom environment (McIntyre et al., 2020). In PE, this is enhanced by the continuously necessary (re-)arrangement of spatial structures due to the PE-specific environment.

Communicative integration is vital for students as ‘relational beings’. Gaze toward students has an impact in terms of teacher credibility and authority as well as student validation. As students’ interpersonal experiences in class significantly affect their academic motivation, communicative integration is seen as an indicator for effective teaching (McIntyre, 2020; Howe & Abedin, 2013).

The study aims at teachers trainees’ gaze behavior in PE-specific circular arrangements. Research questions are: How is the gaze distributed among students? Can gaze patterns or content-related aspects that influence the gaze be detected?

19 PE teacher trainees (14f, 5m) in 25 lessons wore a mobile eye-tracker. The gaze data is analysed aligned

with the transcripts of classroom interactions. Within the 159 extracted circular formations preliminary results show i.a. differences in gaze behavior in relation to the communication type.

In line with present studies on teachers' gaze (Yamamoto & Imai-Matsumura, 2013) future research on PE should address cultural differences, novice-expert-comparisons along with gaze patterns focused on student behavior.

Howe, C. & Abedin, M. (2013). Classroom dialogue: A systematic review across four decades of research. *Cambridge journal of education*, 43(3), 325–356.

McIntyre, N.A., Kees, K.T. & Mainhard, M.T. (2020). Looking to relate: teacher gaze and culture in student-rated teacher interpersonal behaviour. *Social Psychology of Education*, 23. 411–431.

Yamamoto, T. & Imai-Matsumura, K. (2013). Teachers' gaze and awareness of students' behavior: using an eye tracker. *Innovative teaching*, 2, 6.

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会 【課題 C】 口頭発表①

座長：末永 祐介（熊本大学）

2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

[学校保健体育-C-01] 高等学校におけるベースボール型の学習内容に関する研究（教）

*神 悠勝¹、鈴木 聡² (1. 東京学芸大学教職大学院、2. 東京学芸大学)

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-C-02] 水中を歩きながら泳動作を行うウォーキングスイムは平泳ぎの技能獲得に有効である（教）

*山村 涼乃¹、豊田 郁豪²、原 英喜³、森山 進一郎³、杉田 渚颯¹ (1. 東京学芸大学大学院教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学)

10:35 ~ 10:49

[学校保健体育-C-03] 男女共習体育の実態と教師がもつ認識について（教）

*中條 愛未¹、鈴木 聡¹ (1. 東京学芸大学教職大学院)

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-C-04] 状況判断能力の発達過程における知識構造の変化について（教）

*中島 友樹¹、後藤 幸弘² (1. 鹿児島大学、2. 兵庫教育大学名誉教授)

11:05 ~ 11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY202)

[学校保健体育-C-01] 高等学校におけるベースボール型の学習内容に関する研究 (教)

教師への意識調査を視点として

*榎 悠勝¹、鈴木 聡² (1. 東京学芸大学教職大学院、2. 東京学芸大学)

高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説保健体育編体育編(以下、学習指導要領と記載)では球技領域において、ボール操作に加えて「ボールをもたない動き」に関する内容が示されている。また、「ボール運動の独自性は、ゲームの中で常に『意思決定』が要求される特質を有していること」(岩田,2016)からも、球技領域において意思決定に着目した指導が重要であるといえる。

しかし、滝澤(2004)が述べるようにベースボール型は「『戦術学習に焦点を当てた積極的なゲーム修正』への着眼は残念ながら欠如していたと言わざるを得ない」という視点がある。先行研究では、小学校や中学校を対象とした「判断」に着目した実践は多く報告されているが、高等学校を対象としたベースボール型の「意思決定」に関する先行研究は少ない。学習指導要領において、「状況に応じたバット操作」や「状況に応じた守備」などが示されていることから、高等学校では小学校・中学校段階と比較して、より高次な意思決定に関する学習が求められているといえる。しかし、先述の通り、高等学校におけるベースボール型の実践報告が少ないことから、高等学校のベースボール型で「意思決定」に関する学びの実態を知るためには、学習の実態そのものについて把握する必要があると考えられる。

そこで本研究は、現職の高等学校保健体育教師を対象に「ベースボール型の授業で何を学ばせているのか」について調査し、学習内容の実態とその傾向を明らかにすることを目的とした。質問紙調査の結果から、バット操作やボール操作などの技能習得が重視され、ボールをもたない動きや意思決定に関する指導については、実践者によって軽重がある可能性が示唆された。詳細は発表において報告する。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY202)

[学校保健体育-C-02] 水中を歩きながら泳動作を行うウォーキングスイムは平泳ぎの技能獲得に有効である (教)

*山村 涼乃¹、豊田 郁豪²、原 英喜³、森山 進一郎³、杉田 渚颯¹ (1. 東京学芸大学大学院教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 東京学芸大学)

【背景】ウォーキングスイムとは、水中を歩きながら、上肢や呼吸の動作の練習を行うため、学習課題を細分化して学習する分習法といえる。水泳時には実際の動きを認識しづらい(坂口・合屋,2021)ことに加え、平泳ぎは近代四泳法の中でも比較的上肢と下肢の動作のタイミングが複雑である。そのため、平泳ぎ初心者の平泳ぎ技能修得法としてウォーキングスイムの有効性が期待できる。そこで本研究では、平泳ぎの習得におけるウォーキングスイムの有効性を検証することを目的とした。【方法】水泳教室に参加した児童10名(男子8名、女子2名)を対象に、1回当たり15分間のウォーキングスイム指導が2日間実施され、指導前後に水中側面からの25m平泳ぎの撮影が、また指導後にアンケート調査がそれぞれ実施された。指導前後の平泳ぎの泳動作は、先行研究を参考に7項目の観察的動作評価基準を用いて、「できた or できなかった」の2段階で評価されてマクネマー検定を実施し、合計得点の差の検定にはウィルコクソンの符号順位検定を行った。【結果】指導の結果、「腕の動作は左右対称に行う」のみ有意な改善が認められた。合計得点は、指導前(2.3点)より指導後(4.6点)が有意に改善した($p=0.007, r=0.89$)。【考察】ウォーキングスイムでは、自分の上肢の動きを目視できたり、細分化された動作に集中して練習できたりしたことから、正しい動作の確認を容易にした可能性がある。ウォーキングスイムを経験した後の参加者に、「たくさん泳げるようになった」、「腕に集中して練習できた」や「コツがつかめた」のような、ウォーキングスイムの有用性を実感しているコメントが確認された。【結論】ウォーキングスイムは、左右対称の腕動作の習得に有効であることが明らかになった。それゆえ、未熟練者

の平泳ぎにおける上肢動作の改善に資する指導法の1つとしての活用が期待される。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY202)

[学校保健体育-C-03] 男女共習体育の実態と教師がもつ認識について (教)

中学校教師へのアンケート調査から

*中條 愛未¹、鈴木 聡¹ (1. 東京学芸大学教職大学院)

男女共同参画社会基本法（平成11年）が施行されて以降、益々ジェンダーフリーへの意識が高まっている。学校教育に目を向けると、中学校学習指導要領（平成29年告示）では、性別や障害の有無によらない「共生」の視点を重視した指導内容の改善を図ることが明記された。それに伴い、中学校の学習指導要領解説保健体育編（平成29年告示）では、豊かなスポーツライフの実現、並びにスポーツを通じた共生社会の実現を目指す観点から「原則として男女共習で学習を行うこと」（p 236）と明記され、男女共習による体育授業の実施が求められるようになった。

しかし、実際の中学校現場では男女共習体育への移行があまり進んでおらず、男女関係なく「武道」「ダンス」を選択させている学校が非常に少ないことが明らかになっている（北田、2006）。また、男女が同一の空間・時間内に授業を受けていても、お互いへの関わりが見られない「男女共習の中の男女別習」（佐野、2004）という状況もあり、「男女共習」にも様々な形態があることが考えられる。

そこで本研究では、中学校教師へのアンケート調査を通じ、保健体育の授業における男女共習の実態について把握し、成功裡な男女共習の在り方について考察することを目的とした。その結果、一単位時間の授業において男女共習体育の形態をとっていてもグループ編成は男女別であったり、陸上運動において目標タイムが男女別々に設定されたりしているような事例が見られた。一方で、男女共習だからこそ実現する生徒間の相互作用に言及する教師もあり、授業形態だけでなく学びそのものへの効果がある可能性も示唆された。詳細は発表にて報告する。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY202)

[学校保健体育-C-04] 状況判断能力の発達過程における知識構造の変化について (教)

バスケットボール初心者が3対2の局面を解決するまでの縦断的分析から

*中島 友樹¹、後藤 幸弘² (1. 鹿児島大学、2. 兵庫教育大学名誉教授)

状況判断能力に優れたオープンスキルの熟練者は、豊富な量の知識だけではなく高度に構造化された知識を記憶の中に持っていると考えられる。したがって、状況判断能力を高めるには、記憶内にある知識構造を改善しなければならない（中川、2000）。

そこで、本研究では、バスケットボールを対象として、状況判断能力の発達過程における知識構造の変化を説明するための基礎的知見を得ることを目的とした。

バスケットボール初心者の大学生3名に、-halfコートでの3対2をディフェンスが守り切ることの出来ない状況を意図的に創り出すことのできるようになるまで繰り返し行わせ、プレイ毎の振り返りや作戦会議における味方への指示内容等について記録するとともに、自身の視点から撮影された映像を見せながら遂行した状況判断の理由を尋ねるインタビュー調査を行った。

これらを窪田（2001）の仮説する「状況判断能力の構成要因とその関係」に基づき、状況判断の過程（情報獲得能力、認知能力、予測能力、決定能力）、判断基準、判断の前提にあるゲーム状況の認識、戦術の理解、時空間の認識、過去の経験の観点から、その量的拡大と質的向上の様子、ならびに、宣言的知識の蓄積と手続き的知識

識への変換の様子を縦断的に分析した。なお、遂行された状況判断の適否は、シュート時の状況（得点期待値の高い場所からのシュートか、ノーマークでのシュートか）等から評価した。

その結果、初期段階においては、判断基準（例：今のプレイは本当によかったのか）や、状況判断の過程における認知（例：ディフェンスの位置が思っていたよりも近い）に関する内容が多く抽出され、判断基準が曖昧な間はプレイの適否を評価できず、認知した内容の解釈ができないことがうかがわれた。このことから、よい状況判断のできる基底的要因には判断基準があり、その確立に前後して認知・予測能力が変化していくものと考えられた。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長：岩田 英樹（金沢大学）

2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY203 (良心館2階 R Y 2 0 3 番教室)

[学校保健体育-B-01] ジェンダー分析による体育カリキュラム変革の可能性（教,社）

*井谷 恵子¹、三上 純²、井谷 聡子³（1. 京都教育大学、2. 大阪大学大学院人間科学研究科、3. 関西大学）

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-B-03] 中・高等学校における「体育理論」の授業実施状況と授業実施に当たっての課題等（教）

*浜田 幸史¹（1. 鹿屋体育大学）

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-B-04] 体育実技と保健の感染症対策の学習を関連づけた単元構成のあり方（教）

*高田 佳孝¹、神谷 拓²（1. 京都ノートルダム女子大学、2. 関西大学）

11:05 ~ 11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY203)

[学校保健体育-B-01] ジェンダー分析による体育カリキュラム変革の可能性 (教,社)

フォーカス・グループ・インタビューによる「体育嫌い」の研究を通して

*井谷 恵子¹、三上 純²、井谷 聡子³ (1. 京都教育大学、2. 大阪大学大学院人間科学研究科、3. 関西大学)

【問題の所在】ジェンダード・イノベーションに象徴されるように、ジェンダーによる分析が科学・技術に変革と進展をもたらすことが明らかになっている。ジェンダー分析は、差別の是正やバイアスの解消といったレベルから、より積極的に科学・技術を発展させる視点と言える。これまでの体育科教育学研究では、男女別の集計さえないものが多く、男女差のある結果についてもその要因について検討が乏しい。体育の好き嫌いに関する研究の歴史は長く、「体育嫌い」の割合は中学生で17.5% (スポーツ庁、2022) と少なくない。さらに女子中学生で22.8%など、常に「男性よりも女性に体育嫌いの割合が高い」ことを示している。その要因として、能力主義など指導者の問題が指摘されるが、男女差の理由については概ね不問であり、女性が不得意で嫌いであるのは自明のこととして扱われてきた。また、要因分析や先行研究に基づく仮説や理論の検証など量的研究が中心で、設定された枠組みの外にある事実をつかめないことに限界があった。本発表では、「体育嫌い」のフォーカス・グループ・インタビューによる研究成果を通じて、ジェンダー分析の必要性を提示する。

【ジェンダー分析による「体育嫌い」の声】 H28年度から2期にわたる研究プロジェクトの成果であり、数本の論文や雑誌に公表済である。男女共通した要因として、体育が「身体やパフォーマンスが他者の目にさらされる場」「スポーツの特性としての競争・序列・記録が支配」、制度の変化にもかかわらず、実践では「技能中心の授業や評価」が根強いことが指摘できる。女性の声からは「男性基準で定められる規範」「女性の身体と(競技)スポーツ」の折り合いの悪さ、「隠すものとして扱われる生理への対応」など、男性の声から、「男はできて当たり前」という扱い、体育が「男らしさを競わせる場」となっていることなどが見出された。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY203)

[学校保健体育-B-03] 中・高等学校における「体育理論」の授業実施状況と 授業実施に当たっての課題等 (教)

*浜田 幸史¹ (1. 鹿屋体育大学)

「ワクワクするぞ、知のスポーツ」というキャッチフレーズで、平成20年告示の学習指導要領において、中学校で各学年3単位時間以上、高等学校で各学年6単位時間以上を割り当てて実施することになった「体育理論」について、平成29・30年告示の学習指導要領では、その内容がさらに詳しく具体的に示され、使用教科書も一新された。授業実施率の向上や授業の質の向上が期待されるが、その実態や新たに見出された課題等については明らかにされていない。そこで、授業実施状況と授業実施に当たっての課題等を明らかにすることを目的として、全国の公立中・高等学校の保健体育教員に対するアンケート調査を実施した。

「体育理論」を単元として実施している教員は中80.6%、高57.1%であり、その平均授業時数は中3.1単位時間、高4.7単位時間であった。実技等と合わせて、またはその中で実施、さらには未実施という実態も見られた。未実施最多の理由は、中・高ともに「時間が取りづらい」であった。授業実施については、各校における教育課程の見直し、年間指導計画への確実な位置付けを図ること等の必要性があると考えられる。「体育理論」の実施に何らかの困り感を抱える教員は中・高ともに90%超であった。「時間が取りづらい」の他、「教材」に関する内容が多く挙げられるとともに「運動することが重要」という実技を重んじる考えが根強いこと、必要性を感じないという考えが少なからずあることも明らかとなった。中・高等学校の保健体育教員が捉えている課題として、生徒にとっては教科書の内容が興味関心にそぐわなかったり、難しすぎたり易しすぎたりすること、教員にとっては教材の研究や開発、その時間を確保すること、実技との関連を図ることや評価をすることの難しさ等が挙げられる。生徒・教員双方の課題解決を目指した教材や授業モデルの開発の必要性があると考えられる。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY203)

[学校保健体育-B-04] 体育実技と保健の感染症対策の学習を関連づけた単元構成のあり方 (教)

学習カードの規律に注目して

*高田 佳孝¹、神谷 拓² (1. 京都ノートルダム女子大学、2. 関西大学)

従前から学習指導要領において、保健と体育の学習は関連づけて指導することが求められてきた。しかし、新型コロナウイルス感染症が広がり社会問題化した際に、保健と体育実技を関連づける実践がおこなわれてきたとは言い難い。感染症対策を取り入れた先駆的な授業実践においても、自分たちで作り上げたコロナ禍の生活様式を、実際の体育実技の中で活かしたり、発展させたりするまでには至らず、体育実技において保健の感染症の学習をどのように活かしていくのかについては、体育科教育学の課題として残されている。保健科教育学においても、感染症対策に関する正しい知識を理解し、体育実技などの学習や生活に活かしていくことが、新型コロナウイルス感染症が収束しつつある現状においても求められている。しかし、保健の授業研究において体育授業との関連性について指摘されることは少なく、実践研究も僅かである。

そこで本研究は、体育実技と保健の感染症対策の学習を関連づけた単元を構成し、その成果を検証することにした。具体的には、①感染症の予防に関わる保健の学習を、体育実技の単元に組み込み、②教師と児童で感染症を予防するための学習規律をつくる。③学習規律は学習カードに記載し、毎時間、児童に規律が守れたのかの振り返りをさせる。本研究では、この学習カードの分析と、実際の授業時間中の動画の分析を通して、保健の学習が体育実技に活かされているのかを検証する。詳細は当日に報告する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長：細越 淳二（国士館大学）

2023年8月30日(水) 10:20～11:19 RY204 (良心館2階RY204番教室)

[学校保健体育-B-05] ツイート内容分析による不登校と体育との関連についての探索的研究（ア）

*澤江 幸則¹、金子 真悠²（1. 筑波大学体育系、2. 筑波大学大学院体育学学位プログラム）

10:20～10:34

[学校保健体育-B-06] 表現系ダンスにおける「ひと流れの動き」を創り出す指導に関する研究（1）（教）

*安江 美保¹、山崎 朱音²（1. ノートルダム清心女子大学、2. 横浜国立大学）

10:35～10:49

[学校保健体育-B-07] 表現系ダンスにおける「ひと流れの動き」を創り出す指導に関する研究（2）（教）

*山崎 朱音¹、安江 美保²（1. 横浜国立大学、2. ノートルダム清心女子大学）

10:50～11:04

[学校保健体育-B-08] ダンス領域におけるコンタクト・インプロヴィゼーションの実践について（教）

*齋藤 萌々子¹（1. お茶の水女子大学大学院）

11:05～11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY204)

[学校保健体育-B-05] ツイート内容分析による不登校と体育との関連についての探索的研究 (ア)

*澤江 幸則¹、金子 真悠² (1. 筑波大学体育系、2. 筑波大学大学院体育学学位プログラム)

健康な生活を営み、より豊かなスポーツライフを営むことは国民に求められるひとつであり、それは不登校児であっても保障されなければならない。そのなか不登校児の相談や支援において体育に対するネガティブな発言が聞かれる。一方で体育授業のみ参加できる不登校児の事例がある。以上から不登校児にとって望ましい体育授業や体育活動のあり方を検討する必要があると考えた。しかしながら不登校児の意識を直接聞き取ることに難しさがある。そこで仮説生成を目的にTwitterによって発信されたツイート内容を分析することを試みた。高度検索において「不登校」と「体育」のキーワードを入れ、2022年5月1日から2023年4月31日まで、日本語、返信とリンクを含まずに条件設定して検索した。その結果、最近の話題のみを対象とし1,068件がヒットした。そのうち当事者および保護者であることがツイート内容やプロフィールからわかったもの、ツイート内容が体育授業や体育を担当している者が含まれていたものをハンド・リサーチした結果、当事者によるものが102件、保護者によるものが161件であった。これらを小学校期と中学校期以降の時期ごとと、不登校がはじまる状態（初期状態）から不登校を脱しようとする状態（後期状態）までの不登校状態ごとにツイート内容をテキスト分析した。その結果、保護者と当事者との間で体育授業に対する捉え方に違いがみられた。また小学校期と中学校期以降を比較したところ、体育に対する肯定的関連性について、特に初期状態において違いがみられた。その一方で、後期状態においては、体力低下に関する内容と進学や単位取得を動機とした関連性において、時期による明確な違いがみられなかった。これらの結果を、Sen (1985) によって構築されたケイパビリティ・アプローチを援用して、不登校児にとって望まれる体育における支援について検討を試みた。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY204)

[学校保健体育-B-06] 表現系ダンスにおける「ひと流れの動き」を創り出す指導に関する研究 (1) (教)

内容から「ひと流れの動き」を創りやすい「2人の戦い」における3つの重点課題の検証を通して

*安江 美保¹、山崎 朱音² (1. ノートルダム清心女子大学、2. 横浜国立大学)

本研究は、舞踊教育専門家と小・中学校現場の熟練指導者による専門家チーム5名で協議を重ねながら、表現系ダンスにおける「共通に学ばせたい内容」を明らかにすることに向けて、熟練指導者による実践Ⅰ、指導案モデルの再構築、未熟練指導者による実践Ⅱの過程を経て研究を進めた。

内容のひと流れを創りやすい典型教材として取り上げた「2人の戦い」では、「体をねじる」「すばやく・ストップ・超スロー」「床を使って動きを連続」の3つを重点課題と捉えて実践した。その結果、3つの重点課題を関連させて「変化のあるひと流れの動き」になっていく指導の様相と、それらの関連が薄く「変化のあるひと流れの動き」になりにくい指導の様相が明らかとなった。3つの重点課題の中で、指導者、学習者にとって最も難しい傾向にあったのが「体をねじる」ことであった。体をねじることは、体幹部を多様に使い、独自の表現的な動きになりやすく、「表したいイメージをひと流れの動きで表現する」表現系ダンスの特性に触れるためには欠かせない。体をねじることができている指導者や学習者は、体をねじりながら回ったり転がったりして、動きが途切れることなく連続していき、なきり度も高い傾向にあった。「すばやく・ストップ・超スロー」は、3つの重点課題の中で指導し易い傾向にあったが、「体をねじる」ことと「床を使って動きを連続」と合わせて指導していないと、速さに変化がついているだけで動きは同じような内容になってしまい、なりきり度は上がりにくい傾向にあった。

以上のことから、3つの重点課題を互いに関連させながら指導していくには、「体をねじる」ことへの指導を核にしつつ、「体をねじって床を使い、動きを連続」をスローモーションで行いながら体の使い方を学ばせ、そこ

から速さの変化や、空間に変化をつけることを重ねて指導していくという方向性が望ましいことが見出された。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY204)

[学校保健体育-B-07] 表現系ダンスにおける「ひと流れの動き」を創り出す 指導に関する研究 (2) (教)

動きから「ひと流れの動き」を創りやすい「新聞紙を使った表現」における3つの重点課題の検証を通して

*山崎 朱音¹、安江 美保² (1. 横浜国立大学、2. ノートルダム清心女子大学)

本研究は、舞踊教育専門家と小・中学校現場の熟練指導者による専門家チーム5名で協議を重ねながら、表現系ダンスにおける「共通に学ばせたい内容」を明らかにすることに向けて、熟練指導者による実践Ⅰ、指導案モデルの再構築、未熟練指導者による実践Ⅱの過程を経て研究を進めた。動きから「ひと流れの動き」を創りやすい典型教材として取り上げた「新聞紙を使った表現」の熟練指導者による実践Ⅰでは、「全身をギリギリ(極限)まで使う」「メリハリ(緩急強弱)をはっきりつける」「移動を入れて動きを連続する」の3つを重点課題と捉えて実践した。

その結果、表したい内容から「ひと流れの動き」を創り出す「2人の戦い」とは異なる教材の特徴があることが明確になったとともに、そこにある難しさから重点課題の修正、再考を行う必要があることが明らかとなった。特に「メリハリをはっきりつける」は、新聞紙の質感を動きにメリハリをつけて表現することが重要であった。ここには、新聞紙の質感のどのような特徴を捉え、それをどう身体で表現するのか、という課題が生じている。また、1つの質感の動きを表現するのではなく、異なる質感の動きを組み合わせることも重要な視点であった。「組み合わせること」によって動きが連続し、その連続が「ひと流れの動き」を創り出すことに繋がる。つまり、同じ動きでも動きの幅や強さ速さに変化をつけながら繰り返すことは、動きを連続させるための一つの方法と捉えられた。

また、3つの重点課題を互に関連させながら指導していくには、「2人の戦い」と共通して「全身を極限まで使う」という身体の使い方への指導を核にしつつ、新聞紙の多様な質感を捉えて動きに緩急強弱をつけることによって表現し、異なる質感を組み合わせたり繰り返したり、上下左右の空間や踊る場所を変えることを重ねて指導していくという方向性が望ましいことが見出された。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY204)

[学校保健体育-B-08] ダンス領域におけるコンタクト・インプロ ヴィゼーションの実践について (教)

*齋藤 萌々子¹ (1. お茶の水女子大学大学院)

コンタクト・インプロヴィゼーション (Contact Improvisation、以下「C.I.」と略す)とは、1972年にアメリカの舞踊家スティーブ・パクストンが「接触を通して可能となるコミュニケーションの探求」を即興の焦点として始めた、ダンスの即興形式(福本 2000他)である。これまでに体ほぐしの運動やダンス/身体表現の授業の一環として、また課外活動の文脈で、高校生または大学生を対象としたC.I.の指導事例がある(相馬・細川 2006; 相馬 2006a; 相馬 2006b; 岡野 2007; 麻生 2010; 丸山 2015; 齋藤 2023)。そこでは、自己の身体感覚へと意識を向けることや身体を介した他者とのコミュニケーションを体感すること等の学習目標が掲げられ、学習者の身体を通じた自他への気づき等が報告されている。しかし、このようなC.I.の活動が、どのようにしてダンスの学習へと繋がっていくのかについて言及している研究は少ない。そこで本研究は、ダンス領域における学習指導の難しさの1つとして指摘される恥ずかしさの克服に着目し、C.I.がダンス領域の学習に資する意義を考察することを目的とする。研究方法は、文献研究である。まず、中高生を対象としたダンスの授業において、学習者が恥ずかし

さを感じる要因や、それを取り除くための学習指導法として挙げられている事例、及びそこでの学習者間の自他関係を整理する。加えて、高校または大学で C.I.指導実践を報告する事例を参照し、C.I.の活動と学習者の恥ずかしさが関連している部分があるのかを捉える。結果として、恥ずかしさの要因として挙げられる他者からの視線が、C.I.では自他という2者における関係により軽減され得ることなどが捉えられる。これらを踏まえて、C.I.の学習が可能とし得る学習者の自他関係及びダンス学習への影響を考察していく。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会 【課題 A】 口頭発表②

座長：今宿 裕（作新学院大学）

2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY206 (良心館2階 R Y 2 0 6 番教室)

[学校保健体育-A-05] 大学体育授業におけるバドミントン指導法の検討（生）

*深田 喜八郎¹（1. 日本大学文理学部）

10:20 ~ 10:34

[学校保健体育-A-06] 大学体育授業後の運動・身体活動に対する意識の変容（保）

*池田 悠真¹、上地 勝²、大津 展子²、吉野 聡²、加藤 敏弘²（1. 茨城大学大学院教育学研究科、2. 茨城大学）

10:35 ~ 10:49

[学校保健体育-A-07] 静岡県のある大学における大学体育の成績評価の観点について（生）

*太田 洋一¹（1. 静岡福祉大学）

10:50 ~ 11:04

[学校保健体育-A-08] 大学体育授業にて高い学修成果を導く要因（心）

*西田 順一¹（1. 近畿大学）

11:05 ~ 11:19

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY206)

[学校保健体育-A-05] 大学体育授業におけるバドミントン指導法の検討 (生)

ロングサービス技術の自己評価尺度について

*深田 喜八郎¹ (1. 日本大学文理学部)

【緒言】バドミントンの技術のうち、ロングサービス技術は競技力と関係することが指摘されており(佐野、1997)、サービス技術の向上がより良いプレーに繋がると考えられる。本研究は、ロングサービス技術に着目し、技術向上のための自己評価尺度を考案することを目的とした。【方法】調査対象は、A大学およびB大学にてバドミントンの授業を受講した学生66名のうち、調査への協力に同意した58名(男性:32名、女性:25名、無回答:1名)とした。第4回目の授業においてロングサービスのスキルテスト及び動画撮影を実施した。スキルテストは、ロングサービスを5球打ち飛距離に応じた点数を確認するものとし、最高得点は25点とした。スキルテスト中、自身のフォームをスローモーションにて撮影した。学生はスローモーションの動画を振り返り、「構え(4項目)」、「シャトルを離すタイミングとラケットの振り出し(以下「振り出し」と略す、4項目)」、「打点および手首の角度(以下「角度」と略す、5項目)」の計13項目を5件法で回答し、自己評価の総合得点(最高65点)を記録した。【結果】スキルテストと各尺度の関連性を検討するため、ピアソンの積率相関係数を求めた。スキルテストの得点は、構え($p < 0.01$)、振り出し($p < 0.01$)、角度($p < 0.01$)のいずれの尺度とも有意な正の相関関係が認められた。さらに、構えでは「シャトルを持つ腕の方向」、振り出しでは「ラケットのフレームが足元を通過している」、角度では「手首が背屈している」という点が、スキルテストの得点に関連していた。【結語】学生による自己評価の総合得点はスキルテストの得点と有意な相関関係が認められたことから、本尺度はロングサービス技術の自己評価法として有用であることが示唆された。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY206)

[学校保健体育-A-06] 大学体育授業後の運動・身体活動に対する意識の変容 (保)

*池田 悠真¹、上地 勝²、大津 展子²、吉野 聡²、加藤 敏弘² (1. 茨城大学大学院教育学研究科、2. 茨城大学)

【目的】令和元年国民健康・栄養調査報告によると、運動習慣がある者の割合は低い割合に留まっている。運動習慣の形成には、身体を動かすことの楽しさとその意義に気づくことが必要であると考えられる。A大学の一般体育実技「ボディワーク」の授業は、「心身の課題に気づき、課題解決のための知識及び技能、思考力・判断力を養う」ことを目的としており、運動に苦手意識を持つ学生の多くが履修する。本研究では、「ボディワーク」の授業の履修者を対象として履修前後の運動・身体活動に対する意識を調査し、運動習慣の形成に繋がる体育授業の在り方を探ることを目的とした。【方法】2021年4月から7月にかけて、「ボディワーク」を履修する学生70名を対象に、運動経験、運動頻度、卒業後の運動意欲、高校・大学の身体活動や体育実技等、計30項目について質問紙調査を実施した。調査にあたっては、研究の参加は自由であること、参加の有無によって授業評価に関係はないこと、プライバシーは厳重に守られることを文書及び口頭で説明し、同意を得たもののみを研究対象とした。分析にはIBM SPSS Statisticsを用い、有意水準は5%とした。【結果】受講後に多くの学生が身体活動に対する意識が向上していた。自由記述では授業について運動が苦手な人でも楽しく参加することができる点を肯定的に捉えており、体のほぐし方、体の調子の整え方、運動習慣の形成等に関心を持つとともに、体を動かすことの楽しさや大切さに関する記述が多く見られた。【結論】本研究の対象者は、大学入学後運動習慣がほとんどない集団であった。しかし、「ボディワーク」の授業を通して、身体活動や体育実技に対する意識が向上しており、身体を動かすことの大切さに気付くことができていた。これらのことから、「ボディワーク」の授業は、運動習慣の形成、健康・体力の保持増進に役立つ授業であるといえる。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY206)

[学校保健体育-A-07] 静岡県の大学における大学体育の成績評価の観点について (生)

*太田 洋一¹ (1. 静岡福祉大学)

【目的】大学体育は履修人数の制限などの理由から、同一科目名で複数クラス開講されることが多く、クラスによって異なる成績評価基準で授業が実施されていることも少なくない。そこで、本研究では大学体育の成績評価の観点(方法・基準)について明らかにすることを目的とした。

【方法】本研究では、静岡県の大学で2022年度に非専門科目の実技科目としての体育・スポーツ科目のシラバスの詳細が確認できた13校を調査対象とした。各大学のWebサイトを閲覧し、公開されているシラバスから、科目名、担当教員名、授業目的、授業内容、成績評価方法が確認できたものを対象に、成績評価の基準・方法を集計した。集計の際に、同一大学の同一科目名で複数シラバスが確認された場合、担当教員もしくは授業内容のいずれかが異なるシラバスであれば、それぞれで成績評価方法を集計した。成績評価方法は「態度・意欲」「知識・理解」「技能」の3つの観点に分類した。また、シラバスに成績評価の比率が完全に記載されているものについては、「態度・意欲」「知識・理解」「技能」の3つの分類で比率を集計した。

【結果】成績評価方法が集計されたシラバスは110個であった。その内、「態度・意欲」を評価の観点と記述しているものは109個認められ、「知識・理解」は55個、「技能」は95個認められた。成績評価の比率が完全に記載されていたシラバスは95個で、「態度・意欲」の比率の平均は $45.8 \pm 19.1\%$ (最大80%、最小0%)、「知識・理解」は $15.7 \pm 19.8\%$ (最大75%、最小0%)、「技能」は $38.6 \pm 22.0\%$ (最大85%、最小0%)であった。

【まとめ】本研究で集計されたシラバスにおける成績評価の観点は、「知識・理解」と「技能」よりも「態度・意欲」を重視する傾向が認められた。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:19 RY206)

[学校保健体育-A-08] 大学体育授業にて高い学修成果を導く要因 (心)

決定木分析 (CART) による条件探索

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

近年、高等教育にて学修成果の可視化が各分野で進められている。大学体育授業では実践的かつ体験的な学びを通じ、様々な学修成果が獲得されることが明らかにされてきた。また学修成果の解明とあわせて、その影響要因の検討が行われている。ここまで体育授業の学修成果要因は幾らか見出されてきたが、影響要因に単独にフォーカスしている等、学修成果を高める上での知見は十分ではない。以上より、本研究では高い学修成果に影響を及ぼす大学体育授業の条件を探索することを目的とした。先行研究の検討等から、「学修者特性」として「パーソナリティ特性」、「対人スキル」、「レジリエンス要因」、「運動・スポーツ実施の好き嫌い」、「運動部・サークル所属有無」、「運動行動変容ステージ」を、そして「学修・教授行動」として「体育授業への意欲的な取組」、「体育授業のスポーツ経験」、「体育授業の雰囲気」、「体育教員の指導行動」を取り上げ、体育授業の主観的恩恵 (PBS-FYPE) への影響を検討した。対象者は4年制大学にて教養体育科目を履修した学生であった。UPEプロジェクトにて、2017年に複数回の調査を実施し、収集されたデータより体育授業の受講者を分析対象者とした。解析の結果、対象者が履修した体育実技授業の主観的恩恵得点は基準値より有意に高かった。また、決定木分析 (CART) による要因探索の結果、「運動スキル」においては、「挑戦達成 (体育実技経験)」が第1分岐変数として、また「共感・配慮 (体育教員の指導行動)」が第2分岐変数と示された。両変数の条件を満たす対象者の「運動スキル」平均値は最も高く、次いで「資質的レジリエンス要因」が第3分岐変数と

して示された。さらに、学修成果内容にて影響要因は異なることも示唆された。体育授業にて上記変数を考慮することでより高い学修成果を導く可能性が示され、またその意義や今後の課題等について議論を行う。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長：大塚 隆（東海大学）

2023年8月30日(水) 10:20～11:04 RY301 (良心館3階 R Y 3 0 1 番教室)

[健康福祉-A-01] 転倒回避動作を伴う「とっさの一步」誘発装置の検討（介,測,方）

*檜皮 貴子¹、井上 咲子²、松浦 稜³、長谷川 聖修⁴（1.新潟大学、2.新潟大学大学院、3.筑波大学大学院、4.日本Gボール協会）

10:20～10:34

[健康福祉-A-02] 大学生の口コモティブシンドローム予防を目的とした体操試案に関する研究（介,方）

*井上 咲子¹、檜皮 貴子²（1.新潟大学大学院、2.新潟大学）

10:35～10:49

[健康福祉-A-03] フィットネスプログラムへの参加継続を促す指導の質的研究（介）

*伊藤 麻希¹（1.静岡産業大学 スポーツ科学部）

10:50～11:04

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY301)

[健康福祉-A-01] 転倒回避動作を伴う「とっさの一步」誘発装置の検討 (介,測,方)

若年者を対象として

*檜皮 貴子¹、井上 咲子²、松浦 稜³、長谷川 聖修⁴ (1. 新潟大学、2. 新潟大学大学院、3. 筑波大学大学院、4. 日本Gボール協会)

【目的】転倒回避動作のステップングストラテジーを誘発する測定法の考案を試みた。具体的には、立位姿勢で前方へ身体を傾けることにより足元が傾斜する装置を用いて、前傾姿勢から足の踏み出し（とっさの一步）を誘発させ、①足を踏み出す反応時間、②踏み出し距離、③足の踏み出し速度を算出できる装置を整備した。本研究は、「とっさの一步」誘発装置で測定できる3つの測定値と転倒予防と関連の深い体力・バランス能力測定値との相関を明らかにすることで、本装置の転倒回避能力測定法としての有用性について検討することを目的とした。【方法】対象者は、健康な若者40名（21.1±1.6歳）であった。測定項目は、「とっさの一步」誘発装置の測定に加えて、開眼・閉眼片脚立ち、長座体前屈、握力、FR、10m全力歩行、TUG、最大一步幅、足指筋力、重心動揺であった。統計処理は、Pearsonの積率相関係数を用い、有意水準は5%未満とした。【結果】「とっさの一步」誘発装置による踏み出し距離と右手握力（ $r=0.349$ 、 $p=0.027$ ）、足の踏み出し速度と右手握力（ $r=0.379$ 、 $p=0.016$ ）、左手握力（ $r=0.381$ 、 $p=0.015$ ）、最大一步幅（ $r=0.336$ 、 $p=0.034$ ）、左足指筋力（ $r=0.343$ 、 $p=0.030$ ）に弱い正の相関が示された。さらに、足の踏み出し速度と10m全力歩行（ $r=-0.317$ 、 $p=0.046$ ）に弱い負の相関が認められた。【考察】転倒歴と握力には相関が示されている研究が多く、本装置における踏み出し距離と足の踏み出し速度には握力との相関関係が認められた。さらに、最大一步幅や10m全力歩行などの移動能力と本装置における足の踏み出し速度にも相関関係が認められた。そのため、ステップングストラテジーを伴う転倒回避能力について、本装置での踏み出し距離と足の踏み出し速度の値で検討できる可能性が示唆された。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY301)

[健康福祉-A-02] 大学生のロコモティブシンドローム予防を目的とした体操 試案に関する研究 (介,方)

靴下を用いた体操の介入を通して

*井上 咲子¹、檜皮 貴子² (1. 新潟大学大学院、2. 新潟大学)

【目的】大学生を対象に靴下を用いたロコモティブシンドロームの予防体操を考案した。本研究は、靴下体操の介入による柔軟性及び筋力、平衡能の変化と実施者の心理状態を明らかにすることで、考案した靴下体操のロコモ予防効果について基礎的知見を得ることを目的とした。【方法】健康な大学生及び大学院生18名（19.7±1.6歳）を対象に、3週間の靴下体操の介入と5回の対面指導を行った。靴下体操はバランス運動や下肢筋力、柔軟性向上を目的とした運動で構成し、音楽リズムに合わせて実施させた。靴下体操の効果を検証するため、介入前後と介入終了1ヶ月後に筋力（握力、立ち幅とび）、柔軟性（長座体前屈）、平衡能（重心動揺）、ロコモに関する測定（子どもロコモ基本動作チェック、ロコモ度テスト）を行い、対面指導3回目に TDMS-STを調査した。ロコモリスクの有無が介入効果に影響を及ぼすかを検証するために2要因分散分析を行った。TDMS-STについては、t検定を行った。有意水準は5%未満とした。【結果】ロコモに関する測定結果から、ロコモリスク群（4名）とロコモ非リスク群（14名）に分けられた。筋力に関する測定ではロコモリスクの有無に関わらず介入による影響は示されなかった。柔軟性に関する測定ではロコモリスク群において靴下体操介入により値が有意に向上し、介入終了1ヶ月後まで維持されていた。平衡能に関する測定ではロコモリスクの有無に関わらず、右片脚立ちの平衡能が有意に向上した。TDMS-STでは、体操実施後の活性度と覚醒度が有意に増加した。【考察】体操介入によって、実施後に対象者の気分を良好にできたことに加え、ロコモ予防において重要な柔軟性と平衡能の向上が

認められたため、考案した靴下体操は大学生の口コモを予防する運動として寄与する可能性が示唆された。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY301)

[健康福祉-A-03] フィットネスプログラムへの参加継続を促す指導の質的研究 (介)

インストラクターの声かけの事例から

*伊藤 麻希¹ (1. 静岡産業大学 スポーツ科学部)

本研究の目的は、フィットネスプログラムへの参加継続を促す指導を質的に分析し、参加者の運動の動機づけや継続化に対するインストラクターの関わり方や、フィットネスプログラムにおける指導の特徴を明らかにすることである。健康増進や体力向上の効果を高めるためには継続的な運動の実施が効果的ではあるものの、継続を断念する場合も多くみられる。運動の動機づけと継続化には、「運動に対する興味、目標、効果」「余暇」「運動施設」「指導者や集団での人間関係」に加え、「楽しさ、高揚感」といったものの必要性が明らかになっている。また、運動を継続するためには社会的支援（ソーシャル・サポート）の果たす役割も大きく、サポートの内容は「手段的サポート」と「情緒的サポート」の2つに大別されている。

そこで、毎週継続したフィットネスプログラムを指導する熟練のインストラクター（指導年数5年以上）10名にアンケートを実施した。フィットネスプログラムの参加者に対し、レッスンへの参加を継続させるための働きかけの有無、またその働きかけの内容を自由記述式アンケートで回収、質的分析方法である SCATを用いて分析した。

その結果、全てのインストラクターが参加継続を促す目的の声かけや指導を実施していた。抽出された概念「プログラムによる効果の説明」「継続による効果の説明」「参加者に合わせた指導」「発展的指導」は手段的なサポートとして、「積極的なコミュニケーション」「変化を自覚させる指導」「心理的障害を取り除く」「参加者を受け入れる態度」といった概念は情緒的サポートとして分類できるものであった。運動を継続している参加者を指導しているインストラクターは、運動の動機づけと継続化を促す手段的・情緒的サポートを実現しており、指導の具体的な内容の考察からは、さまざまな運動経験者の集まるレッスンでの指導の特性も明らかとなった。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表②

座長：城所 哲宏（日本体育大学）

2023年8月30日(水) 10:20～11:04 RY302 (良心館3階 R Y 3 0 2 番教室)

[健康福祉-A-05] 異なる季節に行うセルフペースの有酸素運動が卵胞期および黄体期の気分状態や月経関連症状に及ぼす影響（保,生）

*中村 有紀¹（1. 国立スポーツ科学センター）

10:35～10:49

[健康福祉-A-06] 自重負荷を用いたHIITにおける各エクササイズの評価（生）

*松井 咲樹¹、沢井 史穂²（1. 日本女子体育大学大学院、2. 日本女子体育大学）

10:50～11:04

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY302)

[健康福祉-A-05] 異なる季節に行うセルフペースの有酸素運動が卵胞期および黄体期の気分状態や月経関連症状に及ぼす影響 (保,生)

*中村 有紀¹ (1. 国立スポーツ科学センター)

【背景】月経関連症状のセルフケア法の一つとしてストレッチングや有酸素運動が推奨されている。一方、季節の違いによる気象条件が、セルフペースで行う運動(量)と気分状態や月経関連症状にどのように影響するかは明らかではない。そこで本研究では、異なる季節(夏季/冬季)において、卵胞期(F期)および黄体期(L期)にセルフペースの有酸素運動を行い、気分や月経関連症状に及ぼす影響を検討した。

【方法】正常月経周期の女子大学生、夏季8名、冬季7名が月経周期のF期およびL期に各1日ずつ実験に参加した。運動は自覚的運動強度(RPE)12~14(ややきつい)程度で行う30分間のセルフペースランニングとし、運動前、運動後、24時間後に気分プロフィール検査「POMS2短縮版」および「月経関連症状に関する調査フォームT」に回答した。

【結果】各季の気象条件(気温、相対湿度)は、夏季 $31.4 \pm 2.6^{\circ}\text{C}$ 、 $57.4 \pm 9.7\%$ 、冬季 $13.8 \pm 2.3^{\circ}\text{C}$ 、 $31.0 \pm 9.3\%$ であった。走行距離は夏季のL期にのみ有意に短縮した(F期: $3718 \pm 614\text{m}$ 、L期: $3607 \pm 549\text{m}$)。運動中のRPE、心拍数に月経周期の時期による違いは認められなかった。POMS2は、夏季のF期にTMD得点(ネガティブな気分状態)が、冬季のL期にCB(混乱-当惑)およびTA(緊張-不安)尺度の得点が運動により低下した。月経関連症状は、夏季のF期に「水分貯留」、「ネガティブな項目の合計点」が運動により低下した。また、冬季のL期に「集中力」、「行動変化」の点数が低下した。

【まとめ】セルフペースの有酸素運動は、冬季においては月経周期の時期に関わらず運動量が維持されたが、夏季においてはL期の運動量が低下した。また、運動後の気分や症状の改善も認められず、夏季の暑熱環境下では、運動により期待される効果は黄体期には得られにくい可能性が示唆された。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY302)

[健康福祉-A-06] 自重負荷を用いたHIITにおける各エクササイズの評価(生)

健康増進・体力向上のためのHIIT指導に向けて

*松井 咲樹¹、沢井 史穂² (1. 日本女子体育大学大学院、2. 日本女子体育大学)

【目的】1996年にタバタらによって開発された自転車漕ぎ運動を用いた高強度間欠的トレーニング(HIIT)は、有酸素性と無酸素性の両方のエネルギー供給能力を同時に飛躍的に高めることができ、生活習慣病予防にも効果があることが示唆されていることから、世界規模で広く普及しており、最近では器具を用いない自重負荷によるトレーニング法がSNS上などで数多く紹介されている。しかしながら、それら自重負荷によるトレーニング法がHIITとしての効果をもたらすかどうかは不明であり、トレーニングメニューとしてYouTube等で紹介されている様々なエクササイズの評価に関する研究も十分ではない。そこで本研究は、自重負荷によるHIITとして紹介されているエクササイズを個別に遂行した時の酸素需要量を測定し、対象者に合わせた最適な強度のHIITの提供につなげるための基礎資料を得ることを目的とした。【方法】20代前半の女子大学生を対象に、自重負荷によるHIITの種目の中から5種類のエクササイズ(ジャンピングジャック&シザース、3ステップ膝上げジャンプ、中腰前後ダッシュ、バーピージャンプ、シングルレッグスクワット&フロアタッチ)を選定し、それぞれを20秒間実施した時の運動中の酸素摂取量とEPOCから酸素需要量を算出し、各エクササイズの評価を行った。【結果】20秒間のエクササイズに必要な酸素需要量は、3ステップ膝上げジャンプ、バーピージャンプ、中腰前後ダッシュ、シングルレッグスクワット&フロアタッチ、ジャンピングジャック&シザースの順に多かった。各個人の最大酸素摂取量に対するエクササイズ中の酸素摂取量の割合をみた場合も同様の順位であり、3ステップ膝上げジャンプ及びバーピージャンプは、ジャンピングジャック&シザースに比べ、有意に高い酸素需要量を示し

た。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】 口頭発表①

座長：榎本 雅之（滋賀大学）、河西 正博（同志社大学）

2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:34 RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

[スポーツ文化-A-01] ジョルジュ・エベールの女子体育思想（哲）

*広瀬 健一¹（1. 帝京大学）

10:20 ~ 10:34

[スポーツ文化-A-02] ノルベルト・エリアス「フィギュレーション」論の現代的意義に関する予備的考察（社）

*村下 慎一¹（1. 立命館大学）

10:35 ~ 10:49

[スポーツ文化-A-03] 1964年東京大会聖火リレーの記録と記憶（哲）

*荒牧 亜衣¹（1. 武蔵大学）

10:50 ~ 11:04

[スポーツ文化-A-04] 茨城県霞ヶ浦の流入河川である新川の川面の浮遊物をカヌーで収集した調査報告（保,教,発）

*橋爪 和夫¹（1. 学校法人筑波学園アール医療専門職大学）

11:05 ~ 11:19

[スポーツ文化-A-05] 成人期におけるスポーツライフが主観的幸福に及ぼす影響（経）

*林田 敏裕¹、醍醐 笑部¹、清水 紀宏¹（1. 筑波大学）

11:20 ~ 11:34

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:34 RY303)

[スポーツ文化-A-01] ジョルジュ・エベールの女子体育思想（哲）

*広瀬 健一¹ (1. 帝京大学)

本発表では、20世紀の初頭のフランスにおいて「自然的方法」を提唱したジョルジュ・エベールの女子体育の思想を明らかにするために、彼の著書『女子体育：筋肉と彫塑美（L' é ducation physique fé minine : muscle et beauté plastique）』（1919）に着目した。エベールは女子体育の普及の観点から、当時の女性に対する2つの問題を懸念点として挙げていた。それは、（1）女性の運動への消極的な風潮、（2）美容・ファッションとして用いられるコルセットの2点であった。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:34 RY303)

[スポーツ文化-A-02] ノルベルト・エリアス「フィギュレーション」論の現代的意義に関する予備的考察（社）

ジークハルト・ネッケル『地位と羞恥』を導きとして

*村下 慎一¹ (1. 立命館大学)

スポーツにおける「不平等」、換言すれば「疎外」の問題を考える時、「疎外への順応」と形容できるような現状が確認される。それゆえ、「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」ということを議論の俎上に据える際、スポーツの場における「不平等」がどのように生成されてきたのか、ということの方法論的に問うこと、すなわち、こうした「疎外」の生成過程やその超克の契機を描き出す試みが、要求される。スポーツ・体育社会学における理論潮流の動向を踏まえると、こうした問題関心は、主にマルクス主義系の論者が担ってきた、といえる。

本報告では、この問題関心を共有し、また起点としたうえで、マルクス主義的なアプローチとは別の方法論的視角の確立を志向したい。そこで、参照枠とするのが、ノルベルト・エリアス「フィギュレーション」論である。ただし、エリアスおよびエリアス学派は、スポーツ社会学に限らず、多くの論者によって、その方法論的課題が提起されてきた。それゆえ、報告者は、単にエリアスの方法論を紹介するのではなく、その現代的意義について、探索的に再考した中間考察を踏まえて、報告したい。

以上の点を踏まえて、本報告では、ドイツの感情社会学における泰斗であるジークハルト・ネッケルの博士学位請求論文『地位と羞恥』を導きとして、ノルベルト・エリアス「フィギュレーション」論の現代的意義に関する考察を深めたい。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:34 RY303)

[スポーツ文化-A-03] 1964年東京大会聖火リレーの記録と記憶（哲）

オリンピック・ムーブメントの日本的受容と展開について

*荒牧 亜衣¹ (1. 武蔵大学)

本研究の目的は、1964年東京大会聖火リレー関連資料の分析を通してオリンピック・ムーブメント（以下、OMとする）の日本的な受容の一側面を明らかにすることにある。日本におけるOMの受容と展開については、1940年、1964年東京大会と東京2020大会との連続性に着目しメディア史の立場から論じた浜田

（2018）の研究やピエール・ド・クーベルタンや嘉納治五郎に注目した先行研究がある。例えば、小路田ら（2018）はクーベルタンや嘉納に焦点を置くことによって源流をたどりながら、オリンピズムの理想と現実の乖離を指摘する。オリンピック競技大会は、その空間的・時間的拡がりを考慮したとき、オリンピズムを具現化する

ものを開催都市にもたらすことができるのだろうか。本研究では、OMそれ自体に対する評価とオリンピズムの理想に関する検証を念頭に、1964年東京大会聖火リレーに着目する。1964年東京大会は当然ながら日本におけるOMのターニングポイントとなったわけであるが、吉見（2020）が指摘するように「国土全域を巻き込む巨大なナショナル・イベントに仕立て上げられた」聖火リレーの記憶は、日本におけるOMの受容や展開に関しても影響を与えたと推察される。本研究では、特に「東京オリンピック：オリンピック東京大会組織委員会会報（1960-1964）」や東京都内区市町村発行の広報誌、聖火リレーに関する記念誌等の記録を分析することによって、1964年東京大会聖火リレーの実態を明らかにする。1964年東京大会聖火リレーが日本におけるOMの受容と展開において果たした役割について検討することがねらいとなる。また、東京2020大会聖火リレーには、サポートランナー制度を採用した集団リレーの形式のように1964年東京大会の記憶を具体化するプログラムも確認できることから、海外の事例と比較検討することによって、その特徴を整理する。

11:05 ~ 11:19 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:34 RY303)

[スポーツ文化-A-04] 茨城県霞ヶ浦の流入河川である新川の川面の浮遊物をカヌーで収集した調査報告（保,教,発）

*橋爪 和夫¹（1. 学校法人筑波学園アール医療専門職大学）

【目的】本研究は、茨城県霞ヶ浦の流入河川である新川が霞ヶ浦に接する付近の浮遊物の状況を調査することである。

【方法】2022年10月から12月に5回カヌーで川面の浮遊物を採集した。採集物はカメラで撮影して、①飲料容器②プラスチック③発泡スチロール④ビニール⑤缶（飲料以外）⑥生活用品⑦スポーツ用品に分類した。飲料容器は①ノンアルコール②アルコールに分類し、さらに、①蓋付②蓋無③缶（コーヒー、紅茶、清涼飲料）④缶（アルコール）⑤瓶に分類した。採集物は土浦市の決まりに従って、燃えるゴミと不燃ゴミに仕分けて処分した。

【結果】各採集日の個数は、それぞれ、91個、75個、141個、179個、365個で合計851個であった。内訳は飲料容器392個（46%）、プラスチック容器311個(36.5%)、発泡スチロール35個、ビニール22個、生活用品46個、スポーツ用品12個であった。また、採集日5回の内3回で成人用CDがあった。飲料ペットボトルは245個が蓋付で23個が蓋無であった。缶でノンアルコールは50個でアルコールは17個であった。ガラス瓶はノンアルコール12個、アルコール5個であった。1回から4回までは飲料容器数がプラスチック製品よりも多かったが、5回目は飲料用品よりもプラスチック製品のほうが多かった。

【考察】霞ヶ浦は海と通じておらず、水質の悪化が懸念されている。河面や湖面の浮遊物の除去についてはほとんど手つかずの状況である。今回のサンプル調査から霞ヶ浦の約500m上流地点の浮遊物は飲料ペットボトルが約半数であり、プラスチック製品と合わせると約8割になることがわかった。川面や湖面で収集したペットボトルや缶はリサイクルができなくて燃やせるゴミが不燃ゴミになるという問題の所在もわかった。

11:20 ~ 11:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:34 RY303)

[スポーツ文化-A-05] 成人期におけるスポーツライフが主観的幸福に及ぼす影響（経）

20代から50代の東京都民を対象として

*林田 敏裕¹、醍醐 笑部¹、清水 紀宏¹（1. 筑波大学）

2011年に制定されたスポーツ基本法では、その前文において、「スポーツは、世界共通の人類の文化である」とともに「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」であることが明記されている。この法理念をもとに定められた第3期スポーツ基本計画では、成人の週1回以上のスポーツ実施率を70%にす

ることなどが施策目標として掲げられ、それらの目標を実現するために各種施策が展開されつつある。

だが、こうした施策目標を実現することが、スポーツ基本法が示した理念である人々の幸福で豊かな生活をもたらすのだろうか。清水ほか（2021）が報告したように、スポーツライフと人々の主観的幸福の関連については欧米を中心に学術的知見の急速な蓄積がなされている。ただし、それらの先行研究では、スポーツ実施頻度、強度、スポーツ種目といった観点と主観的幸福の関連が明らかにされているが、多様にあるスポーツライフの観点との関連については十分に検討されているわけではない。そこで本研究では、先行研究の知見をもとにスポーツライフの観点を整理し、主観的幸福との関連を明らかにすることを目的とする。

本研究の調査対象は、東京都在住の20代から50代までの成人を対象とした。なお、主観的幸福に強い影響を与える個人属性を統制するために、学歴、婚姻、世帯年収、雇用形態、子どもの有無に関して抽出条件を設定した。

得られたデータを分析した結果、家族とスポーツをすることや、地域のスポーツクラブに所属し日々の活動をするなど、特定のスポーツライフについては主観的幸福との正の関連が認められた。これらの基礎的な知見を踏まえた上で、実践的な示唆と今後必要となる研究課題を提示する。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表①

座長：後藤 光将（明治大学）

2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

[生涯スポーツ-A-01] 総合型地域スポーツクラブの経営課題とその解決策（ア）

*賽 夫¹（1. 早稲田大学）

10:20 ~ 10:34

[生涯スポーツ-A-02] Jリーグクラブのスクールに通わせる保護者の満足度特性（測）

*難波 宏明¹、大坪 健太²、春日 晃章³（1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜協立大学、3. 岐阜大学）

10:35 ~ 10:49

[生涯スポーツ-A-03] 総合型地域スポーツクラブの衰退・存続に関する事例研究（経）

*柴田 紘希¹、清水 紀宏²（1. 日本体育大学、2. 筑波大学）

10:50 ~ 11:04

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY305)

[生涯スポーツ-A-01] 総合型地域スポーツクラブの経営課題とその解決策 (ア)

クラブ間連携に関する研究を中心に

*賽夫¹ (1. 早稲田大学)

総合型地域スポーツクラブ（以下総合型クラブと略す）の役割は各方面から期待され、様々な支援（財政、地域）が行われているが、近年では総合型クラブ数の増加は鈍化しており、統廃合も進んでいる（スポーツ庁、2022）。総合型クラブに関する研究では、主に海外の総合型クラブの分析研究やそれとの比較研究、さらには日本国内の総合型クラブに関する政策や外部組織との連携、クラブの経営資源や経営理念などに注目されているということが明らかになった。これらの先行研究を考慮した結果、総合型クラブにおける組織間連携については、学校、大学、企業、地域団体などとの連携に関する検討は見られたものの、総合型クラブ間連携の研究は極めて少ないことが分かった。

そのため、本研究ではマネジメントリソース・ミックスの理論をもとに、クラブ間連携による経営資源共有について独自の仮説モデルを構築し、総合型クラブ間連携の可能性を探究することを目的とした。研究方法として、東京都内の全総合型クラブ（23区全域）に自記式調査票を配布し、回答を得た。調査結果からは、総合型クラブが保有するヒト・モノ・カネ・情報などの経営資源が十分ではなく、クラブ関係者自身も効率的な経営資源の活用のためにクラブ間連携に関心を持っていることが明らかになった。したがって、組織間連携による経営資源の共有による経営改善の可能性があると、総合型クラブ間連携と交流の新たな「場」の創出に重点を置くべきだと結論付けた。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY305)

[生涯スポーツ-A-02] Jリーグクラブのスクールに通わせる保護者の満足度特性 (測)

FC岐阜を対象に

*難波 宏明¹、大坪 健太²、春日 晃章³ (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜協立大学、3. 岐阜大学)

本研究は、FC岐阜が運営するサッカースクールに通う子どもの保護者を対象に、サッカースクールに対する満足度特性を明らかにすることを目的とした。対象は、FC岐阜が運営を行うサッカースクールに通う子ども（幼稚園・保育園児：35名および小学生245人）の保護者280名であった。調査はFC岐阜の協力のもとWEBアンケートにより実施し、クラブを通じて保護者に調査票を配布し5件法により回答を得た。調査票は先行研究を参考に作成し、フェイスシートおよびサッカースクールへの満足度に関する3要素（満足度、要望、不安）計23項目から構成された。保護者のサッカースクールへの満足度特性を検討するために、クロス集計表の作成および χ^2 検定を用いた。 χ^2 検定において有意な関連が認められた場合には残差分析を行った。 χ^2 検定の結果、教育的指導、技術指導、設備・環境および開催頻度の4項目において有意な関連が認められた。残差分析の結果、いずれの項目においても「とても満足」と感じている保護者は総合満足度が「とても満足」である割合が高かった。不安要素に関して、金銭面および日程面の2項目において有意な関連が認められた。残差分析の結果、総合満足度が相対的に低い保護者において金銭面に関する不安感が強い割合が有意に高く、不安感が弱い割合が有意に低かった。また、総合満足度が相対的に高い保護者において日程面に関する不安感が強い割合が有意に低く、不安感が弱い割合が有意に高かった。これらのことから、我が子をサッカースクールに通わせる保護者の満足度向上のために、教育的指導や技術指導といった個別の要因に関するサービスおよび設備・環境の充実はもちろん、他の習いごととの兼ね合いもふまえた金銭面や日程面での不安の軽減を図ることが重要であると推察された。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY305)

[生涯スポーツ-A-03] 総合型地域スポーツクラブの衰退・存続に関する事例研究（経）

*柴田 紘希¹、清水 紀宏² (1. 日本体育大学、2. 筑波大学)

少子高齢化や人口減少が急速に進むわが国では、これまでスポーツ振興を担ってきた行政や市場の役割が縮小し、地域におけるスポーツ環境の持続可能性が問われている。このため、行政や市場への依存から脱却し、これらに代わるスポーツ振興の担い手として地域スポーツクラブの育成が求められてきた。政策的には、総合型地域スポーツクラブ（以下、「総合型クラブ」とする）の育成が進められ、育成開始から四半世紀以上が経過している。しかし、近年ではクラブ数は減少傾向に転じ、解散・統廃合により消滅するクラブもみられる。これらのデータからは、わが国で地域スポーツクラブが存続していくことの困難さがみてとれる。地域スポーツクラブはなぜ存続が困難なのか、これが本研究の問いである。総合型クラブに関する研究では、クラブの存続に影響を及ぼす要因を設定し、成長あるいは衰退との関係を分析する仮説検証型研究がなされてきた。しかし、このアプローチは、なぜ・どのようにクラブは衰退するのか（あるいは存続するのか）、というプロセスやメカニズムを明らかにすることはできず、関連する重要な背景や文脈を見過ごす可能性がある。クラブにおいて生じる現象は、それらに関わる人々の相互作用の結果として生じる。このためクラブの衰退・存続メカニズムを考察するためには、人々の相互作用過程を詳細に記述する研究が求められる。そこで本研究では、クラブの時系列的過程（クラブヒストリー）の記述・説明を通じ、クラブの衰退・存続に関わるメカニズムを考察することを目的とする。調査は、関東地域に所在する総合型クラブを事例として、クラブ運営に関わる人物に対するインタビューと議事録等の関連資料の収集を行った。クラブヒストリーは、クラブの設立以前から現在に至るまでの期間を記述し、クラブの衰退・存続に関するメカニズムを考察した。なお、詳細な結果や得られた知見については発表において示す。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表②

座長：内田 匡輔（東海大学）

2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY306 (良心館3階 R Y 3 0 6 番教室)

[生涯スポーツ-A-04] 大学生による部活動支援ボランティアに関する一考察（教）

*笠井 義明¹、木村 駿介¹、清宮 孝文¹（1. 静岡産業大学スポーツ科学部）

10:20 ~ 10:34

[生涯スポーツ-A-05] 運動部活動における体罰問題の解決に向けた教育環境の構築（保,教,社,心）

*霜触 智紀¹、笠巻 純一²（1. 宇都宮共和大学、2. 新潟大学）

10:35 ~ 10:49

[生涯スポーツ-A-06] 中学校運動部活動の全面地域移行における学校及び地域関係者の認識と課題（政,社）

*麻原 恒太郎¹（1. 日本体育大学大学院）

10:50 ~ 11:04

10:20 ~ 10:34 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY306)

[生涯スポーツ-A-04] 大学生による部活動支援ボランティアに関する一考察 (教)

大学生の部活動指導者としての可能性と限界

*笠井 義明¹、木村 駿介¹、清宮 孝文¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

静岡県教育委員会は2010年から「大学生による部活動支援ボランティア事業（以下「本事業」という。）」を実施しており、大学生の部活動指導補助者の配置を希望する中学校や高等学校で、大学生が部活動の指導補助者として活動してきている。学生の旅費や傷害保険加入を県教育委員会が負担する。現在進められている「学校部活動の地域連携や地域クラブ活動への移行」においては、指導者の確保は大きな課題となっており、そこに大学生の参加を期待する声は大きく、大学としても地域貢献の観点からその期待に応えることは極めて重要だと捉えている。しかし本事業において、これまでの13年間で延べ378の学校部活動からの依頼に対し、実際の指導に当たった学生は延べ155人（充足率41%）であり、現場のニーズに十分には応えられていない状況がある。また、各学校での学生の指導回数が、本事業の上限である20回を超えている学生がいる一方で、指導回数が2、3回にとどまっている学生もあり、学生の取組にはバラツキが見られる。本研究は、学生が本事業に積極的に参加するための要因及び指導を継続できなくなる要因を明らかにし、部活動改革における指導者の確保、特に大学生を指導者として確保していくために必要となる条件を把握することを目的とする。研究方法については、本事業に参加した学生2名にインタビュー調査を実施し、その分析を行った。調査時期は2023年5月である。調査の結果、大学生が部活動指導に参加し続ける要因としては、当該部活動の顧問教員の存在が極めて大きいこと、指導を継続できない理由として、ボランティアとしては荷が重たすぎると感じることなどが挙げられた。発表当日は、調査結果を報告するとともに、改革推進期間1年目の部活動改革において、成長途上の大学生を指導者として確保する際の留意点について考察し発表する。

10:35 ~ 10:49 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY306)

[生涯スポーツ-A-05] 運動部活動における体罰問題の解決に向けた教育環境 の構築（保,教,社,心）

*霜触 智紀¹、笠巻 純一² (1. 宇都宮共和大学、2. 新潟大学)

【目的】近年、運動部活動の体罰問題が社会的に注目を集めている。この体罰問題の解決に向けて、発表者らは統計学的手法を用いて運動部活動の顧問が認知する体罰に関連する要因（以下、体罰関連要因）及び体罰行為に至るプロセスの解明に努めてきた。そこで本研究では、運動部活動における体罰問題の解決のための教育環境の構築に向けて、その支援方法を考察することを目的とした。【方法】これまでの研究で明らかとなった5つの体罰関連要因（霜触・笠巻、2022）と「運動部活動での指導のガイドライン」（文部科学省、2013）をもとに質的検討を行い、運動部活動における体罰問題の解決のために求められる支援策を提示した。【結果】1つ目には、「顧問の指導方針・信念」、「顧問の勝利至上主義的指導観」といった顧問に関する体罰関連要因へのアプローチが示され、生徒にとってのスポーツの意義についての理解を深めるための支援等が挙げられた。2つ目には、「外圧的指導環境」といった顧問を取り巻く指導環境である体罰関連要因へのアプローチが示され、顧問の教員だけに運営、指導を任せるのではなく、学校組織全体で運動部活動の目標、指導の在り方を考える体制を整えていくための運動部活動の経営的な支援等が挙げられた。3つ目には、「生徒・チームの目標未達成」、「生徒のネガティブな態度」といった生徒に関する体罰関連要因へのアプローチが示され、適切な指導方法、コミュニケーションの充実等により、生徒の意欲や自主的、自発的な活動を促す指導力を養う支援等が挙げられた。4つ目には、先に示したいずれの体罰関連要因にも関連するアプローチが示され、活動における指導の目標や内容を明確にした計画を策定するための内的・外的環境を整えるための支援等が挙げられた。【結論】体罰関連要因を基に適切なアプローチを検討及び実施していくことで体罰問題の解決につながるものと期待される。

10:50 ~ 11:04 (2023年8月30日(水) 10:20 ~ 11:04 RY306)

[生涯スポーツ-A-06] 中学校運動部活動の全面地域移行における学校及び地域関係者の認識と課題（政,社）

子どもを主語とした地方自治体における推進計画策定のための条件に関する考察

*麻原 恒太郎¹ (1. 日本体育大学大学院)

【背景・目的】本研究は「中学校運動部活動の地域移行」(以下「地域移行」という。)において、子どもにとって最善のあり方を実現させるための政策を見出す事を基本理念とし、スポーツ庁が2023年度から3年間を推進期間とした「休日の地域移行」に続き、段階的に行うとされている「平日を加えた地域移行」(以下「全面移行」という。)について、まずは、学校関係者、保護者団体関係者、スポーツ団体関係者、地域団体関係者等、多様な関係者の認識を明らかにし、そこから浮かび上がる課題について検討することを目的とした。

【研究方法】多様な立場の意見を得て認識を明らかにするため質的研究法を用い、対象者をA市(人口約24万人の地方都市)における、各関係団体の中枢を担う者17名(中学校長、部活顧問、競技団体役員、スポーツ推進委員役員、PTA役員、総合型地域スポーツクラブ役員、公民館役員、地区スポーツ協会役員)を機縁法により選択。インタビューに先立ち文部科学省・スポーツ庁の動き、A市の教育委員会・スポーツ所管課・スポーツ協会の取組みを説明し同意を得た。

【調査時期】スポーツ庁「地域移行に関する検討会議」提言(案)が公表された2022年3月の翌月から5月にかけて半構造化インタビュー調査を実施した。

【結果】全面移行の認知では、知っていた8、なんとなく知っていた8、全く知らなかった1であった。半構造化インタビューでは、危惧する事、メリット、デメリット、必要と思うこと、全体を通しての6項目を聞いた。休日移行の調査においてみられたコード数182に対し、全面移行では約300以上のコードがみられた。特に「必要と思うこと」のコード数が休日移行に比べて約50多く、学校・指導者・地域の相互連携、新たな地域部活動の創造の提案や教員の兼職兼業に係る心配などがみられた。今後は、中学生及び保護者へのインタビューを行う等、さらなる検討が必要である。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表③

座長：内田 若希（九州大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RYB1 (良心館地下1階 R Y B 1 番教室)

[競技スポーツ-A-09] アクションリサーチを用いた中央競技団体事業マネジメント担当者に対する学習支援の検証（方）

*山下 修平^{1,2}、和久 貴洋^{1,3}、尾縣 貢³（1. 日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター、2. 筑波大学スポーツウェルネス学学位プログラム、3. 筑波大学体育系）

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-A-10] トップアスリートの心理的競技力が自身のメンタルヘルスに与える関係性について（心）

*早川 琢也¹、高橋 由衣²、實宝 希祥²、近藤 みどり²、柄木田 健太²、大西 壮流²、立谷 泰久²（1. 京都先端科学大学、2. 国立スポーツ科学センター）

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-A-11] 学生アスリートのメンタルヘルスに関する研究（心）

*堀野 博幸¹、並木 伸賢²（1. 早稲田大学、2. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科）

11:55 ~ 12:09

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RYB1)

[競技スポーツ-A-09] アクションリサーチを用いた中央競技団体事業マネジメント担当者に対する学習支援の検証 (方)

*山下 修平^{1,2}、和久 貴洋^{1,3}、尾縣 貢³ (1. 日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター、2. 筑波大学スポーツウェルネス学学位プログラム、3. 筑波大学体育系)

公費が投入される競技力向上事業において、事業推進体制が適切に整備できず、計画した方策を実施しきれない中央競技団体 (NF) は、期待した成果を創出できていないことが課題となっている。その背景には、多くのNFが慢性的な人手不足であり、組織能力を向上させるための人材育成や事業マネジメントに目を向ける余裕がないという現状がある。この課題の解決は、NFの組織内での取組みだけでは難しく、組織外部からの働きかけが必要であると考えられる。そこで本研究は、NFだけでは解決が難しい課題解決の糸口を発見することを目指した学習支援の実践を通じて、NF事業マネジメント担当者への学習支援の成果と課題を明らかにし、より効果的な学習支援を行うための示唆を得ることを目的とした。本研究では、アクションリサーチ法を用いた。アクションは、小規模NFの事業マネジメント担当者4名に対して、3つの学習支援プログラム (研修、実践共同体、メンタリング) をパッケージ化し、提供することである。その過程を記録した上で、プロセス分析、ステークホルダー分析を行い、具体的な課題解決のための働きかけと反応を検証した。これらの分析は、議事録、メール等の文書、アンケート回答などの質的データに基づき行った。その結果、強化現場とNF事務局との間で利害や意見の調整を行っている対象者には、交流や越境によって得られた情報を活用した課題解決のための行動が見られた一方で、対象者が強化現場でのコーチの役割を兼ねている場合には、意識や行動の変容を生み出すことが難しかった。また、プログラムの企画、実施の過程において、計画段階では想定していなかったプログラム提供を行う組織の成員への支援が必要となった。NFに対する効果的な支援を行うためには、支援の内容や提供方法を検討するとともに、支援する側の組織の組織能力を向上させる方策についての検討も必要である可能性が示唆された。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RYB1)

[競技スポーツ-A-10] トップアスリートの心理的競技力が自身のメンタルヘルスに与える関係性について (心)

*早川 琢也¹、高橋 由衣²、實宝 希祥²、近藤 みどり²、柄木田 健太²、大西 壮流²、立谷 泰久² (1. 京都先端科学大学、2. 国立スポーツ科学センター)

世界保健機関 (2022) では、メンタルヘルスは日常のストレスに対応、自分自身の能力を認識、学習や仕事、自分が所属するコミュニティへの貢献、が実施できるような心の健康状態であると説明している。国際大会でプレーをするアスリートは、極度なプレッシャーに晒されやすい環境下でプレーしており、その結果として様々なメンタルヘルスの課題や心的疾患を抱えているケースが少なくない (Reardon et al., 2019; 立谷, 2018)。このように、アスリートのメンタルヘルス支援は重要な課題であるにも関わらず、十分な支援や情報が行き届いていない現状が窺える。これまで、メンタルヘルスの啓蒙や支援については、教育的支援やスティグマへの対応が主であったが、選手個々の心理的競技力に基づいたメンタルヘルスの支援方法については十分な検証がされてこなかった。そこで、本研究は、主要国際競技大会でプレーするトップアスリートの心理的競技力とメンタルヘルスの関係性について分析をすることを目的とした。オリンピック・パラリンピック出場経験のある114名を研究対象者とし、JISS競技心理検査 (J-PATEA) とK10 (メンタルヘルスを測定する尺度) について有効回答を得た。得られたデータについて、J-PATEAの下位尺度3つ (心理的スキル、自己理解、競技専心性) を独立変数とし、K10の総合点を従属変数とした重回帰分析を実施し、性別 (男性65名、女性47名)、競技特性 (個人種目: 81名、チーム種目33名) による比較と、研究対象者全体の傾向について分析した。その結果、研究対象者全体、女性群、個人種目群において、自己理解がK10の総合点に与える影響が確認された ($B=-0.28$, $B=-0.39$, $B=-$

0.56)。この結果から、自己理解能力の高まりがアスリート自身のメンタルヘルスに好影響を与えている可能性が示唆された。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RYB1)

[競技スポーツ-A-11] 学生アスリートのメンタルヘルスに関する研究 (心)

チームスポーツの事例調査

*堀野 博幸¹、並木 伸賢² (1. 早稲田大学、2. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)

現在、競技スポーツで活動するアスリートのメンタルヘルスが注目されている。近年の研究では、現役トップアスリートのうちメンタルヘルスに課題を抱える者の割合が30%を超えることが報告されている (Gouttebarger et al., 2019)。そのような状況から、それらメンタルヘルスに課題を抱えるアスリートへのサポートの重要性が指摘されている。その一方、競技スポーツのアスリートに関するデータ蓄積と多様な視点からのメンタルヘルスに関わる分析評価が課題となっている。そこで本研究では、競技スポーツで活動する学生アスリートのメンタルヘルスについて、チームスポーツに注目して調査を行った。調査では、同一種目で所属リーグの異なるチームに所属する学生アスリート男性184名に対し、webアンケート (Kessler 6 scale日本語訳版、Baron Depressing Screener of Athletes日本語版) を実施した。

その結果、所属クラブ内でパフォーマンスレベル別に分けられる所属カテゴリによってメンタルヘルスに差異が存在することが明らかとなった。その一方、所属リーグによる際は認められなかった。本研究の結果から、チームスポーツアスリートにおけるメンタルヘルスに対し、チーム内での競技レベルによる階層が大いに影響することが示唆された。今後は、競技特性の異なる多種目のアスリートに対しても同様の調査を広げていくことが課題となろう。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表④

座長：谷釜 尋徳（東洋大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RYB2 (良心館地下1階 R Y B 2 番教室)

[競技スポーツ-A-12] 女子プロサッカー選手における社会貢献に対する意識（方）

*東海林 祐子¹、森 将輝¹（1. 慶應義塾大学）

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-A-13] 戦前の日本における女子陸上競技史に関する一考察（史）

*喜多 綾音¹（1. 筑波大学大学院）

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-A-14] 我が国におけるアスリート・キャリア政策の政策形成過程（政,経）

*阿部 拓真¹、木村 和彦²、作野 誠一²（1. 大正大学、2. 早稲田大学）

11:55 ~ 12:09

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RYB2)

[競技スポーツ-A-12] 女子プロサッカー選手における社会貢献に対する意識 (方)

競技レベルの比較を通じて

*東海林 祐子¹、森 将輝¹ (1. 慶應義塾大学)

I 背景と目的

日本初の女子プロサッカーリーグ（以下、WEリーグ）は、競技力向上のみならず「世界一アクティブな女性コミュニティへ（社会事業）」などの理念を掲げ活動を推進している。これまで、日本のスポーツは勝利のみが優先され、スポーツの価値を社会に広めていく社会貢献活動の視点は不足していた。一方、アメリカの女子サッカーでは、興奮、希望、自信といった感情で示されるエンパワーメントを選手が自律的に高め（Allison,2016）、競技力と共にその価値を高めている。本研究では、WEリーグの理念に即した活動の推進が女子プロサッカー選手における社会貢献の意識に与える影響を競技力別に明らかにする。

II 研究の方法

参加者は2022年8月時点でWEリーグに加入するクラブの選手登録者307名のうち、①調査データ提供に対する同意が得られていること、②調査票に対して回答に不備がないこと、③WE ACTION活動に年間を通じてチームで参加していることを満たす136名を対象とした（年齢：平均24.5歳、レンジ18-35歳）。調査項目は、プロリーグ発足による環境変化に対する認識（環境変化）10項目、理念推進活動に対する理解（理念理解）12項目、一般的な社会貢献に対する意識（社会貢献意識）7項目であった。環境変化および理念理解を説明変数、社会貢献意識を被説明変数とし、重回帰分析を行った。重回帰分析は、日本代表経験の有無で対象者を群分けした上で行った。

III 結果と考察

日本代表経験の有無に関わらず「理念理解」は「社会貢献意識」に対して正の影響(有群： $\beta = .609, p < 0.001$ ；無群： $\beta = .571, p < 0.001$)があり、WEリーグの理念である社会貢献と競技力の両立に向けた意識が関連することが示唆された。「理念理解」に伴うクラブの枠を超えた交流が「社会貢献意識」に有効であることが示唆された。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RYB2)

[競技スポーツ-A-13] 戦前の日本における女子陸上競技史に関する一考察 (史)

寺尾正・文姉妹の活躍と引退をめぐって

*喜多 綾音¹ (1. 筑波大学大学院)

1920年代は日本女子陸上競技界の黎明期であった。1922年に日本初の女子連合競技大会が開催されるなど多くの大会が開催され、1926年には日本女子スポーツ連盟が創立された。これまで戦前の女子陸上競技に関する先行研究では、主に人見絹枝を先駆者と位置づけ、それとともに社会的背景をふまえてその隆盛と障壁を明らかにした。

一方で当時、人見のライバルとされた寺尾姉妹については、その存在が知られながらも、その活躍と引退をめぐる詳しい経緯は十分に明らかにされていない。特にその引退のきっかけとなったとされた雑誌『婦人倶楽部』上の連載小説『双鏡』と寺尾姉妹の競技歴との関係は検討されていない状況にある。

そこで本研究は、寺尾姉妹の活躍と引退について、①寺尾姉妹の競技歴とそれに対するメディアの評価、②小説『双鏡』の内容を分析し、小説に対する寺尾姉妹の母の捉え方を明らかにする。方法は、歴史学的手法を用い、文献史料（書籍、雑誌、新聞等）の分析を行った。

その結果、寺尾正・文それぞれの競技歴が明らかとなった。二人は短距離走において人見と肩を並べる存在であったが、アムステルダムオリンピックには出場せず、1929年に競技を引退した。その過程では、競技結果とと

もに美人の双子姉妹として、社会の関心が集まることがあった。

小説『双鏡』の内容分析を通して、その登場人物である「濱井姉妹」と寺尾姉妹の境遇が似ており、特に高い競技力と美貌をもって陸上界のアイドル的存在であったことが重なっていると考察された。一方、小説のフィクションと事実とを混雑する作風について、寺尾姉妹の母は「二人を正直にモデルとしたような口ぶりさえも漏らしていたのであります。（中略）私は本人の意見を聞き父の教示をもって初めて今後スポーツをエンジョイすることに極めました。」（1928.『野球界』）と述べており、このことは姉妹の競技引退につながったと推察された。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RYB2)

[競技スポーツ-A-14] 我が国におけるアスリート・キャリア政策の政策形成過程（政,経）

「スポーツキャリアサポート戦略」に着目して

*阿部 拓真¹、木村 和彦²、作野 誠一²（1. 大正大学、2. 早稲田大学）

昨年、第3期スポーツ基本計画が策定された。そこでは「多様な主体におけるスポーツの機会創出」が謳われ、これまで以上にスポーツ政策の発展・拡充が見受けられる。これらの政策における転換点の1つとして、スポーツ立国の実現に向けた国家戦略化から端を発した点があげられる（遠藤ほか,2012）。

この流れを受け、国際競技力向上における一方策として位置づけられたアスリート・キャリア政策は我が国特有ともいえる競技と教育が融合したエリートスポーツ体制において展開されてきた（阿部ほか,2021）。しかしながら、多様かつ複雑なアスリート・キャリアに関する問題に対しては紆余曲折を経ながら支援策を講じてきた。併せて、キャリアの多様性・多義性を扱うことへの政策上の複雑性も指摘されており（村上,2016）、アスリートのキャリア形成支援を目的とした政策の平準化がより一層困難であることが窺える。また、学術においても、アスリートを支援する対象が広範かつ多岐のケースに渡り、体系的な研究の蓄積がなされていない現状にあり、政策立案の礎になるような学術的知見は乏しいことが窺える。これらのことから、アスリート・キャリア政策の問題設定から政策決定するまでの政策形成過程において、議員及び官僚の政策選好による影響が大きいことが推察される。

以上のことから、本研究の目的は、これまで政策の平準化を模索してきたアスリート・キャリア政策における政策形成過程を明らかにすることである。発表当日は、質的アプローチに基づいた分析結果を報告し、アスリート・キャリア政策の柱である「スポーツキャリアサポート戦略」がどのように形成され展開されてきたのかを明らかにしながら、現在に至るまでの当政策について総括的に議論したい。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 口頭発表③

座長：丹治 史弥（東海大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY103 (良心館 1階 R Y 1 0 3 番教室)

[競技スポーツ-C-09] フルマラソンの失速を事前のハーフマラソンの結果から予測できないか (方,生)

*鍋倉 賢治¹、大木 祥太²、小山 和人²、畑山 大知² (1. 筑波大学体育系、2. 筑波大学大学院)

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-C-10] 陸上競技800m選手の体力とパフォーマンスの関係 (生)

*菅原 遥¹、榎本 靖士² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-C-11] フルマラソンタイムに影響する要因の走力および大会別の検討 (生)

*井上 恒志郎¹、山口 明彦¹、福家 健宗¹、鍋倉 賢治² (1. 北海道医療大学、2. 筑波大学)

11:55 ~ 12:09

[競技スポーツ-C-12] 女子中長距離ランナーのランニング中の下肢対称性 (バ)

*本庄 悠紀奈¹ (1. 筑波大学)

12:10 ~ 12:24

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY103)

[競技スポーツ-C-09] フルマラソンの失速を事前のハーフマラソンの結果から予測できないか (方,生)

*鍋倉 賢治¹、大木 祥太²、小山 和人²、畑山 大知² (1. 筑波大学体育系、2. 筑波大学大学院)

フルマラソンは身体に与えるダメージが非常に大きく、レース後半に失速や走行不能に陥ることもあり、レース後には筋肉痛が数日続き、日常生活遂行に困難をきたすこともある。それにも関わらず、わが国でフルマラソン（以下：フル）人気は非常に高い。フルにおける失速は、筋グリコーゲン低下、筋損傷、熱疲弊などが直接の原因となるが、さらに誘発要因として前半のオーバーペース、トレーニングの不足や失敗、環境因子などが考えられる。ところで、市民ランナーだけでなく、トップランナーにおいてもフルの数週間前にハーフマラソン（以下：ハーフ）を走る機会が多い。ここでは、トレーニング目的としてだけではなく、フルでのペース戦略の確認なども行われている。そこで本研究では、フルの失速を事前に予兆できないか、その可能性を探ることを目的に実施した。失速の要因として、ランナーの体力要因、オーバーペース、筋のダメージ、トレーニング状況、心拍数応答を検討した。市民ランナー45名がこの研究に参加し、そのうちハーフとフルのいずれも完走した41名（男性30名、女性11名）を分析対象とした。41名うち18名は初フルに臨む大学生であり、残りの25名は過去にフル完走経験のある大学生または市民ランナーであった。対象者は2022年11月13日開催の第42回つくばマラソン大会と、その3週間前（同年10月23日）のハーフマラソン（非公認）に参加した。レース前にトレーニング記録、12分間走テスト（または最大酸素摂取量テスト）、レース中は胸部に心拍計を装着し、速度変化及び心拍数を記録した。またレース前後の体重計測、レース前日から1週間後にかけて身体各部の筋肉の痛み（張り）を10段階で評価した。その結果、フルの失速には、持久力、トレーニング状況に関係は認められず、心拍数のドリフトと関連し、そのドリフトは事前のハーフにおいても認められた。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY103)

[競技スポーツ-C-10] 陸上競技800m選手の体力とパフォーマンスの関係 (生)

*菅原 遥¹、榎本 靖士² (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学)

目的：800m選手の無酸素及び有酸素性能力とパフォーマンスの関係から、体力とパフォーマンス及びそのペース配分との関係を明らかにすること。方法：対象者は、800m選手24名（男子15名、女子9名）とした。対象者に屋外の陸上競技場で60mの最大スプリントテストを、最大酸素摂取量における走スピード（ vVO_{2max} ）を明らかにするために実験室内のトレッドミル上で漸増負荷テストを実施した。またパフォーマンスを対象者の800m走のシーズンベスト記録平均スピード（ $v800$ ）とし、ペース配分の指標を800m走の前半と後半400mのタイム比（タイム比）とした。対象者の最大スプリントスピード（MSS）、 vVO_{2max} と $v800$ 、タイム比から選手の体力とパフォーマンス及びペース配分との関係を検討した。結果：MSSと $v800$ には、有意な正の相関関係がみられた（全体： $r=0.92$ $p<0.01$ 、男子： $r=0.77$ $p<0.01$ 、女子： $r=0.67$ $p<0.05$ ）。 vVO_{2max} と $v800$ の間には選手全体では、有意な正の相関関係がみられたが（ $r=0.80$ $p<0.01$ ）、男子選手では有意な相関関係はみられず（ $r=0.20$ $p=0.47$ ）、女子選手では有意ではないものの正の相関傾向がみられた（ $r=0.59$ $p=0.096$ ）。MSSと vVO_{2max} の和と $v800$ には有意な正の相関関係がみられた（全体： $r=0.94$ $p<0.01$ 、男子： $r=0.81$ $p<0.01$ 、女子： $r=0.71$ $p<0.05$ ）。タイム比とMSS、 vVO_{2max} の間には有意な相関関係はみられなかった。結論：800m選手の無酸素性能力をMSS、有酸素性能力を vVO_{2max} で評価した結果、無酸素及び有酸素性能力とパフォーマンスの間には関係がみられたが、体力の特性とペース配分との関係は弱いことが明らかになった。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY103)

[競技スポーツ-C-11] フルマラソンタイムに影響する要因の走力および大会別の検討 (生)

北海道マラソンとつくばマラソン参加男性ランナーを対象とした解析

*井上 恒志郎¹、山口 明彦¹、福家 健宗¹、鍋倉 賢治² (1. 北海道医療大学、2. 筑波大学)

フルマラソンのタイムは年齢や体格、トレーニング状況など様々な要因と関係があり、近年はこれらの要因からタイム予測も行われている。しかし、走力やレース環境、特に気温の違いを考慮した検討は行われておらず、タイム向上を目指す上で重要となる要因が走力や気温で異なるのか、また共通して重要な要因が存在するのか不明である。この課題解決に向けて、本研究は2022年の北海道マラソン（道マラ、8月下旬、25.6/22.6℃）とつくばマラソン（つくマラ、11月中旬、23.0/14.2℃）参加男性ランナーを対象にアンケート調査を実施し、タイム影響要因の走力別の検討を行った。アンケートでは、ゼッケン番号、過去3年以内のフルマラソンタイム（持ちタイム）、年齢、BMI、走歴、練習頻度、月間走行距離、60分または10 km以上走る際の練習時ペース、最長1回練習距離、30 kmペース走の実施状況を調査した。レース後、ゼッケン番号からネットタイムを確認し、ペース配分の目安として30 km以降のペース低下率を算出した。有効回答数は道マラ581人、つくマラ690人で、解析に必要なサンプル数確保のため、回答数が少ない道マラの持ちタイムを基準に上位（<3:40:00）、中間（<4:15:00）、下位（≥4:15:00）の走力群に分けて重回帰分析（ $p<0.05$ ）を行った。解析の結果、練習時ペースや30 km以降のペース低下率、年齢、月間走行距離は走力や気温に関係なくタイム影響要因となること、走力上位群と中間群では気温による顕著な違いはみられないもの上位群ではBMIがタイム影響要因となることが確認された。また走力下位群では気温による差異がみられ、道マラでは走歴が、つくマラでは30 kmペースの実施状況がタイム影響要因となることが確認された。

12:10 ~ 12:24 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY103)

[競技スポーツ-C-12] 女子中長距離ランナーのランニング中の下肢対称性 (バ)

*本庄 悠紀奈¹ (1. 筑波大学)

ランニングにおいて下肢対称性と障害の関係が研究されているが、下肢対称性は静止立位において測定、もしくはフォースプレートを用いた1サイクルのランニングにおいて測定され、実際のランニングにおいて連続的に評価したものは見当たらない。そこで本研究では、学生女子中長距離ランナーの走動作の下肢対称性をインソール型足圧センサを用いて評価し、ランニング中の下肢対称性の変化を明らかにすることを目的とした。被験者は、女子中長距離ランナー13名とした。400mトラック2周を走速度12.0、13.3、15.0km/hで左回りに走らせ、ランニング中の足圧を100Hzでインソール型圧力センサ（novel社製、Loadsol）を用いて計測した。1サイクルごとに左右の圧力のピーク値（ L_p , R_p ）の対称性指数（ Slp ）を $Slp=2(L_p-R_p)/(L_p+R_p) \times 100$ で算出した。被験者ごとの Slp の平均値と標準偏差は、12.0、13.3、15.0km/hにおいてそれぞれ 2.44、2.03、1.97%と3.64、3.55、3.81%であった。 Slp は速度による変化は小さかったが、被験者間には大きな差がみられた。被験者の5名が過去に足関節捻挫をしており、そのうち3名の患側足は Slp ではピーク値が大きい側であった。患側足の不安定性は接地後の足部プロネーションが不十分で、ピーク値が大きくなると考えられ、障害歴の Slp への影響が考えられる。さらに、障害歴が最も多い被験者と障害歴のない被験者では Slp の大きさよりも、 Slp の標準偏差に差がみられ、障害歴のない被験者で小さかった。Hamillら（2012）は、走動作のばらつきが大きくても小さくても、障害の危険性が高くなるという仮説を提唱している。これらのことは、 Slp の大きさばかりでなく、ばらつきに着目した評価が必要であることを示唆するものである。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 口頭発表④

座長：徐 広孝（静岡産業大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY107 (良心館 1階 R Y 1 0 7 番教室)

[競技スポーツ-C-13] スノーボードビッグエア競技のパフォーマンス構造モデル（バ）

*尾崎 宏樹¹、稲葉 優希¹、木村 新¹（1. ハイパフォーマンススポーツセンター/国立スポーツ科学センター）

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-C-14] テニスの試合におけるプレッシャー状況下でのショットの配球の変化（方）

*木俣 健¹、神藤 隆志²、北濃 成樹³、白石 洋隆¹、鈴木 ひかり¹、三橋 大輔⁴（1. 筑波大学大学院体育学学位プログラム、2. 大阪教育大学表現活動教育系、3. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所、4. 筑波大学体育系）

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-C-15] パラサイクリングにおける1kmタイムトライアルのレース分析（バ）

*小池 岳太¹、西山 哲成¹、山口 雄大¹（1. 日本体育大学大学院）

11:55 ~ 12:09

[競技スポーツ-C-16] 東京2020バドミントン競技男女シングルスにおける試合序盤のサービス権に着目した勝利ゲームの傾向（方）

*松本 剛志¹、大徳 紘也¹、大石 健二²（1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学）

12:10 ~ 12:24

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY107)

[競技スポーツ-C-13] スノーボードビッグエア競技のパフォーマンス構造モデル (バ)

*尾崎 宏樹¹、稲葉 優希¹、木村 新¹ (1. ハイパフォーマンススポーツセンター/国立スポーツ科学センター)

アスリートの競技力向上を目的とした医・科学支援を行う際、当該種目におけるパフォーマンスとは何かを予め明確にしておく必要がある。そのために、競技パフォーマンスを構成する諸要素同士のつながりをモデル化したパフォーマンス構造モデルを検討することは有用である。スノーボードビッグエアは、急傾斜面を滑り降りて踏切台から空中に飛び出し、空中での技を競い合う競技であり、複数の審査員が各演技に採点を行う採点競技である。したがって、ビッグエアの場合、パフォーマンスは各演技の「得点」となる。競技規則によると、この「得点」は、「完成度」、「難易度」、「多様性」、「新規性」、「高さ」によって構成されている。コーチと我々は、高得点を得るには、とりわけ、「難易度」の高い演技が必要であると仮定した。「難易度」で審査員の好印象を得るには、遂行が難しい回転軸の向きで回転し、かつ空中での回転数が多いことが重要である。このことから、「難易度」は踏切時の「回転数」、「回転軸の向き」、および「滞空時間」の3要素によって説明できる。この中でまず、より大きな「回転数」を生み出す力学的要因について検討した結果、踏み切り前に上半身に大きな角運動量を獲得すること、また、その際に生じる、反作用による下半身の回転を抑制することが重要である。上半身の角運動量獲得には体幹の回旋力が必要となるため、上半身の回旋筋群の筋力測定を行い、実際の回転数との関係を検討した結果、大きな回転数を得るには体の回旋筋力が重要であることが示唆された。また、下半身の回転の抑制には、板と雪面との摩擦を大きくする必要があるため、インソール型の圧力センサを選手のブーツ内に挿入し、踏み切り直前の足圧分布を観察した。その結果、回転数の多い選手は板と雪面との摩擦が大きくなるよう板の角度を調整していたと推測された。今後は、その他の構成要素についても検討を行う。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY107)

[競技スポーツ-C-14] テニスの試合におけるプレッシャー状況下でのショットの配球の変化 (方)

国内ランキングポイント対象の1大会における検討

*木俣 健¹、神藤 隆志²、北濃 成樹³、白石 洋隆¹、鈴木 ひかり¹、三橋 大輔⁴ (1. 筑波大学大学院体育学学位プログラム、2. 大阪教育大学表現活動教育系、3. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所、4. 筑波大学体育系)

テニスにおいて、プレッシャー状況下やエラー直後のポイントではエラーが増えることが報告されているが、その他のパフォーマンスの変化は明らかでない。そこで本研究では、テニスの試合におけるプレッシャー状況下でのパフォーマンスの変化について、ショットの配球の変化を中心に検討することを目的とした。2022年5月に開催された国内ランキングポイント対象の1大会におけるシングルの試合を研究対象とした。試合形式は、3セットマッチ、ノーアドバンテージ方式であった。対戦する両者の同意が得られた99試合(全試合の77%)、合計107名の選手による6376ポイント、40239打について動画撮影を行い、動画分析ソフトウェア Kinoveaと Microsoft Excel、統計解析ソフトウェア Rを用いてスタッツを集計した。先行研究に則り、以下の5つをプレッシャー状況下と定義した：①ゲーム後半、②相手があと1ゲームでセット取得となるゲーム、③ファイナルセット、④相手のゲームポイント、⑤相手のブレイクポイント。これらの5項目への該当数をプレッシャースコア(0-5点)とし、各スコアにおけるショットの種類とコースの割合、およびラリー回数の平均値を算出した。集計の結果、強いプレッシャーがかかっていると想定される状況下において、フォアハンドトップスピンはクロスへの打球が増加する傾向にあった(0点:16.6%、4点:22.2%、5点:20.3%)。同様に、バックハンドトップスピンはストレートへの打球が増加する傾向にあった(0点:5.3%、4点:6.5%、5点:8.9%)。また、プレッシャー状況下ではラリー回数が増加する傾向が見られた(0点:5.4回、4点:7.3回、5点:8.5回)。

プレッシャー状況下において、ラリーの増加に加えてフォアハンドとバックハンドで異なる配球が生じていることが明らかになった。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY107)

[競技スポーツ-C-15] パラサイクリングにおける1kmタイムトライアルのレース分析 (バ)

*小池 岳太¹、西山 哲成¹、山口 雄大¹ (1. 日本体育大学大学院)

自転車競技の1 kmタイムトライアル対象のレース分析はこれまで数多くの研究が行われ、健常者の一般的なペーシングは「all-out strategy」が有効とされている。身体障害者を対象とするパラサイクリングにおいては、重度障害対象としたレース分析は見られるが、軽度障害を含めた研究は見当たらない。昨今、パラスポーツの競技力向上に注目が高まっている中、パラサイクリングにおいても世界記録は更新され続けており、その要因を、区間タイムや区間速度から分析することで、より強化すべき局面を客観的に分け、個別にトレーニングメニューやレースプランを作成することは、国内のパラサイクリングの一層の強化と発展に資する有益な情報となり得る。本研究の目的は、パラサイクリング世界一流選手（重度障害から軽度障害全体）のペーシングの特徴を調査することである。2012、2016、2020年夏季パラリンピック3大会と2020年世界選手権に出場したパラサイクリスト世界一流選手115名と、比較対象に2020,2021,2022世界選手権に出場した健常者サイクリスト世界一流選手63名の公式記録を取得し、レース分析をした。障害の程度、スタート動作別の速度分析の結果、パラサイクリングにおいても、後半の速度低下を抑えるよりも最高速度を早い段階で発揮していくペーシングやトレーニングが記録向上に寄与するという先行研究の結果と一致した。しかしながら、パラサイクリストの絶対的な記録差の幅は個人の障害により大きかったことから、個別に装具作成や用具の改良により理想のペーシングに近付ける工夫が望まれる。

12:10 ~ 12:24 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY107)

[競技スポーツ-C-16] 東京2020バドミントン競技男女シングルスにおける試合序盤のサービス権に着目した勝利ゲームの傾向 (方)

*松本 剛志¹、大徳 紘也¹、大石 健二² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

渡邊と高橋(2008)は、バドミントン競技の特性として試合終盤での逆転が困難であると報告している。東京オリンピック2020におけるバドミントン競技男女シングルスは、8点先取時で勝率が80%を超える結果であり、試合終盤での逆転が困難であると明らかになった(松本ら、2022)。東京オリンピック2020では、男女シングルスともに、8点目を先取するための戦術が重要である可能性が推察される。試合序盤の戦術に関して蘭(2014)は、ロンドンオリンピックにおいてサービス権を持っている方の得点率が高いと報告している。このことから、東京2020オリンピックにおいてゲーム開始時にサービス権を獲得することで8点目を先取できるのではないかと推察した。そこで本研究の目的は、東京2020オリンピックのオープンデータから8点目を先取するための試合序盤の戦術とゲーム開始前サービス権の有効性を明らかにすることで、指導者が試合序盤の戦術を組み立てる際の一助となる知見を得ることを目的とした。

対象試合は、東京2020オリンピック男子シングルの54試合、女子シングルの57試合とした。本研究は公式サイトからデータを取得し、分析項目は得点経過とサービス権の有無とした。

東京オリンピック2020の男子シングルスにおける8点先取時のサービス権の有無の結果は、116ゲーム中

85ゲームでサービス権を獲得している結果であった。女子シングルスは、121ゲーム中97ゲームでサービス権を獲得している結果であった。世界バドミントン選手権では、ゲーム開始前のサービス権を獲得している方が男子は6点、女子は7点を先取していると報告している(松本ら、2022)。本研究は、先行研究を支持する結果であり東京2020オリンピックの男女シングルスでゲーム開始前のサービス権を獲得することで8点目を先取する可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】 口頭発表③

座長：大林 太郎（筑波大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY201 (良心館2階 R Y 2 0 1 番教室)

[学校保健体育-A-09] 大学体育授業の教育効果に対する認識に影響を及ぼす要因の検討 (測)

*白井 祐介¹、木村 華織¹、宮崎 彰吾²、松元 隆秀³、大田 穂⁴、高橋 啓悟⁵ (1. 東海学園大学、2. 静岡産業大学、3. 桃山学院大学、4. 順天堂大学、5. 京都先端科学大学)

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-A-10] 大学体育の多様な可能性の追求 (哲)

*森田 啓¹、佐藤 和²、中島 早苗³、戸枝 美咲⁴、小谷 恭子⁵、河緒 一彦⁶、高橋 浩二⁷、畑 孝幸⁸ (1. 大阪体育大学、2. 千葉工業大学、3. 共立女子短期大学、4. 日本女子大学、5. 帝塚山学院大学、6. 関西学院大学、7. 長崎大学、8. 東海学園大学)

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-A-11] スノーシューと大学体育に関する一考察 (教)

*早坂 一成¹ (1. 名古屋学院大学)

11:55 ~ 12:09

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY201)

[学校保健体育-A-09] 大学体育授業の教育効果に対する認識に影響を及ぼす要因の検討 (測)

*白井 祐介¹、木村 華織¹、宮崎 彰吾²、松元 隆秀³、大田 穂⁴、高橋 啓悟⁵ (1. 東海学園大学、2. 静岡産業大学、3. 桃山学院大学、4. 順天堂大学、5. 京都先端科学大学)

大学設置基準の見直し(大綱化)により大学の体育授業を必修とする法的根拠が喪失して以降、今後の大学体育がどのようにあるべきかの議論が盛んに行われている。そのなかでは、技能の獲得、体力の向上、運動習慣の獲得、ライフスキルの獲得、社会人基礎力の向上などに言及されていることから、体育授業には様々な教育効果が内包されていると推察される。実際の授業では、これらの教育効果の中から、授業実施者が受講者や授業の特性、取り扱う種目の特性などを踏まえ、授業内で重視する教育効果を選択し授業計画を立案していると考えられる。しかし、これまでに授業実施者がそれぞれの教育効果をどの程度重視しているのか、また、そうした教育効果の認識に影響を及ぼす要因については十分に検討されていない。そこで本研究では、大学体育の授業担当者を対象として、Webアンケートを用いて担当する授業の特性と重視する教育効果に関する調査を実施した。授業実施者の特性に関する項目として、性別、年齢、雇用形態、専門領域、最終学歴、保有資格、担当種目、担当種目における競技経験、授業外における担当種目への取り組みの9項目に回答させた。受講者および授業の特性に関する項目として、学年、学部、授業形態、授業回数、大学による授業方針の明示の5項目に回答させた。教育効果に関しては、技能の獲得、体力の向上、指導能力の向上、運動習慣の形成、ライフスキルの獲得、社会人基礎力の獲得の6項目について重視する程度(4件法)および具体的な取り組み(自由記述)に回答させた。これまでに得られた結果から、専門体育(保健体育教員養成)および教養体育に関わらず、技能獲得、ライフスキルおよび社会人基礎力が重視される傾向があり、運動習慣の獲得、体力の向上については重視されにくい傾向があった。本発表では、各要因についてより詳細な結果を報告する。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY201)

[学校保健体育-A-10] 大学体育の多様な可能性の追求 (哲)

スノースポーツを対象にした研究と関連づけた取り組み

*森田 啓¹、佐藤 和²、中島 早苗³、戸枝 美咲⁴、小谷 恭子⁵、河鱒 一彦⁶、高橋 浩二⁷、畑 孝幸⁸ (1. 大阪体育大学、2. 千葉工業大学、3. 共立女子短期大学、4. 日本女子大学、5. 帝塚山学院大学、6. 関西学院大学、7. 長崎大学、8. 東海学園大学)

大学体育とは何か。最初に考えるべきことは「体育」であって「スポーツ」ではない。自ら主体的、自主的に行うスポーツや体育系サークル等での活動ではなく、カリキュラムに組み込まれた「体育(あるいはスポーツ科目)」である。さらに「大学」の体育であって、小学校・中学校・高等学校の体育科・保健体育科の授業とは異なる。学校教育法や機関の位置づけに注目した場合、初等教育、中等教育と比較した場合の大学の特徴のひとつは「研究」である。高等学校が「教育機関」であるのに対して、大学は「教育研究機関」である。研究と関連づいた、あるいは研究に向かった取り組みであれば、大学教育としてふさわしい内容といえるだろう。林英彰は、大学体育は友人づくりや健康のためといった大学教育の前提的・予備的位置づけではなく、究極の目的をめざすべきと指摘した。それにはいくつかの可能性があるが、本研究では「研究」ととらえる。大学体育において身体活動(実技)は重要である。しかし、経営難の大学が増加している現状を考えれば実技のアウトソーシングも危惧される。AIと関連づけたカリキュラム以外の活動としても実施可能となろう。だが、体育は physical educationの和訳語を語源とし、身体に関連した教育を指す。身体に関係しない研究領域はないといっても過言ではないし、本研究で対象とするスノースポーツ(以下:SS)もスポーツ科学だけではなく、多くの研究領域と関係する。たとえば物理学、化学、社会学、環境科学、機械工学、ロボット工学、など。大学体育は身体活動(実技)だけでなく、講義や演習科目としても多様な可能性を有すると考えられる。講義や演習に基づき、それに関

連した実技が必要になるケースも考えられよう。本研究では、SSの受講生にSSと研究について検討してもらい、大学体育の従来とは異なる可能性について考察する。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY201)

[学校保健体育-A-11] スノーシューと大学体育に関する一考察 (教)

信濃町における森林セラピーのスキー実習への導入を通して

*早坂 一成¹ (1. 名古屋学院大学)

本研究では、信濃町黒姫高原で行われた大学のスキー実習においてスノーシューを実施し、その教育的、社会的な効果をあきらかにするためインタビュー調査を中心に行った。本学スポーツ健康学部は「幼児から高齢者までを対象とした、生涯スポーツを通しての健康づくりと維持・増進について学び、実践できる人材の養成」を教育目標としてカリキュラムポリシーを展開している。その中で2010年の学部発足より、学部共通科目としてスキー実習をアルペンスキーの技能習得を中心に行ってきた。しかし2019年度からの感染症拡大の影響で、3年間、閉講を余儀なくされた。それらの経緯から2022年より実習地域も変更をして開講の運びとなった。その際、前述の教育目標をもとに実習の意義を見直し、森林セラピーの一種であるスノーシューを実習の一部に組み入れた。近年のテクノストレスの増加に加え、コロナ禍による精神的なストレスを軽減するため、自然へ回帰するような社会的な行動と認知は再考されるべきである。特に実習地である信濃町黒姫高原は癒しの森推進事業を2006年よりこなっており、森林セラピーのプログラムを提供している。このプログラムは学校から企業までを対象とし、森の観察やフィールドワークを通して自然環境と生き物のつながりを理解することが目的である。このプログラムを大学のスキー実習初日に組み入れ、対象学生にインタビュー調査を行い、その効果をあきらかにした。さらに雪上にとどまらず、夏季のアウトドア実習でも教育的アクティビティとしての導入がどのように影響するかを探った。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会 【課題 C】 口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

[学校保健体育-C-05] 幼児の遠投能力と家庭環境との複合的関連（教,測,発）

*大坪 健太¹、春日 晃章²、清水 紀宏³、中野 貴博⁴（1. 岐阜協立大学、2. 岐阜大学、3. 筑波大学、4. 中京大学）

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-C-06] 幼児期から中学生期における運動能力特性のトラッキング度合いの検証（発）

*小椋 優作¹、春日 晃章²（1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学）

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-C-07] 幼児期の自由遊びにおける身体組成と身体活動量の関係（測,発）

*浅川 正堂¹、春日 晃章²（1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学）

11:55 ~ 12:09

[学校保健体育-C-08] 幼児期における動感発生の契機に関する発生運動学的研究（教,方,スポーツ運動学）

*濱崎 裕介¹（1. 白鷗大学）

12:10 ~ 12:24

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY202)

[学校保健体育-C-05] 幼児の遠投能力と家庭環境との複合的関連 (教,測,発)

*大坪 健太¹、春日 晃章²、清水 紀宏³、中野 貴博⁴ (1. 岐阜協立大学、2. 岐阜大学、3. 筑波大学、4. 中京大学)

本研究は、年長児を対象に遠投能力と家庭環境との複合的関連について明らかにすることを目的とした。対象は、2市17園の年長児312名(男児177名、女児135名)およびその保護者であった。そのうち、データ欠損のない303名を分析対象とした。遠投能力を測定するためにソフトボール投げテスト(1号球)を実施した。テストにより得られた測定値は男女別にTスコア化して分析に用いた。家庭環境は、関連する先行研究を参考に質問紙を作成し、調査を実施した。調査票は、子どものスポーツ活動に対する価値観7項目(回答形式:5件法)、近隣の運動施設1項目(4件法)、スポーツ嗜好性2項目(4件法)、子育て意識5項目(5件法)および家庭におけるボール所持の有無1項目(2件法)の計16項目から構成された。遠投能力と保護者の運動・スポーツに関する価値観や家庭環境との関連について検討するため、Tスコア化したソフトボール投げテストの記録を従属変数、家庭環境に関する16項目を独立変数とする重回帰分析を実施した。分析の結果、「子どもとスポーツのことを話す($\beta=0.21$)」、「将来、スポーツで活躍してほしい(標準偏回帰係数 $\beta=0.17$)」および「子どもとスポーツ観戦に出かける($\beta=0.14$)」の3項目において有意な標準偏回帰係数が認められた(調整済み $R^2=0.13$)。いずれも正の標準偏回帰係数を示しており、頻度あるいは期待の高さと遠投能力の高さが関連することが示唆された。また、「家庭におけるボール所持の有無」において有意な関連は認められなかったが、本研究対象の家庭においてボールを所持している割合はおよそ9割と高く、用具は充実している傾向が認められた。したがって、親子でのスポーツに関する会話やスポーツ観戦といった親子の関わりを充実させることが、子どもの遠投能力の向上に対して有用である可能性が示された。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY202)

[学校保健体育-C-06] 幼児期から中学生期における運動能力特性のトラッキング度合いの検証(発)

男子における年長時、小学6年時及び中学3年時の縦断的運動能力データから

*小椋 優作¹、春日 晃章² (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学)

本研究は、幼児期から中学生期における男子の縦断的運動能力データを用いて、各運動能力におけるトラッキングの程度を検討することを目的とした。分析対象は、年長時、小学6年時、中学3年時に運動能力測定(年長時:握力、体支持持続時間、長座体前屈、反復横跳び、25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ/小学6年時・中学3年時:握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ)を実施した男子24名であった。分析方法として、まず各運動能力における全国の平均値及び標準偏差値を用いて、年長時は0.5歳区分でTスコア化し、小学6年時及び中学3年時は各学年内でTスコア化した。そして、それぞれの運動能力値を3群(上位群:55.0以上、中位群:45.0以上55.0未満、下位群:45.0未満)に分類し、クロス集計およびカイ二乗検定と残差分析を適用した。分析の結果、中学3年時と年長時においては、立ち幅跳び及びソフトボール投げに有意性が、中学3年時と小学6年時においては、握力、50m走、ソフトボール投げに有意性が認められた。さらに、中学3年時に上位群であった者は年長時及び小学6年時においても上位群に属する割合が多く、中学3年時に下位群であった者は年長時及び小学6年時においても下位群に属する割合が多い傾向にあった。このことから、全ての運動能力ではないが、年長時や小学6年時の運動能力レベルは中学3年時までトラッキングする可能性があることが示唆された。また、握力を除くと、走・跳・投に有意性が認められたことから、基礎運動能力は他の運動能力よりもトラッキング度合いが高いことが窺えた。特に「投能力」は、年長時と小学6年時ともに中学3年時と関連があったことから、幼児期の投能力特性が中学生期まで大きく影響することが推察された。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY202)

[学校保健体育-C-07] 幼児期の自由遊びにおける身体組成と身体活動量の関係 (測,発)

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

本研究は、幼児期における身体組成と自由遊びの身体活動量との関係性について検討することを目的とした。対象は満5歳以上の幼児117名であり、調査項目は身長、体重、体脂肪量、除脂肪量および身体活動量 (METs) であり、身体組成はInBody270 (インボディジャパン社製) を使用し10月下旬に測定した。身体活動量はActive style Pro (オムロン社製) を使用し11月~12月の晴天時の平常保育3日間を測定した。分析にあたってBMI、体脂肪率 (% FM) および除脂肪量指数 (FFMI) を算出した。加えて、保育時間内の自由な外遊び時間における中高強度活動量率 (% MVPA) および高強度活動量率 (≥ 6 METs) を算出した。% MVPAに有意な性差が認められたため男女別にTスコア化し、% MVPA上位群 (25%)、中位群 (50%) および低位群 (25%) の三群に区分した。% MVPA三群における% FMおよびFFMIの差について検討するため、二要因分散分析 (% MVPA \times 性) を適用した。また ≥ 6 METsによる三群についても有意な性差が認められたため、% MVPAと同様の分析を行った。分析の結果、いずれの項目においても有意な交互作用は認められなかった。性に有意な主効果が認められた項目は、% FMおよびFFMIであり、多重比較検定の結果、FFMIにおいて男児が女児よりも高い値を示した。また% FMおよびFFMIにおいて% MVPAおよび ≥ 6 METsには有意な主効果は認められなかった。本研究の結果からは、自由な外遊びの時間における身体活動量の多寡と幼児期の身体組成の関係性は認められなかった。しかし、本研究において身体活動量の性差および身体組成の性差が示されていることや先行研究において幼児期の身体活動量の差は、保育時間内よりも降園後や休日に見られることが報告されており、今後、さらなる検討が必要だと考えられた。

12:10 ~ 12:24 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY202)

[学校保健体育-C-08] 幼児期における動感発生の契機に関する発生運動学的研究 (教,方,スポーツ運動学)

*濱崎 裕介¹ (1. 白鷗大学)

動きや技の系統性については学習指導要領解説において丁寧に説明されており、ある動きや技が他の動きや技とどのようにつながり、どのように発展していくのかが明示されている。新しい動きの発生には、似た動きの経験という感覚的な素材が必要である。学習指導要領解説では、その素材となる「動きかた」が具体的な例として示されている。しかし、新しい動きを覚えようとする動機づけには、似た動きの経験だけでなく、器具や用具の素材や硬さ柔らかさについての身体的な経験も重要な役割を果たす。つまり、身体経験を通した感覚の記憶は、過去に経験した「動きかた自体」だけでなく、「用具の素材や硬さ柔らかさ」の経験をも含めて新しい動きの発生 (動感発生) に関わるものである。

幼児期には自発的な活動としての遊びを通して次々と新しい動きかたを身につけていく。われわれ大人の場合は、過去の似た動きの感じを能動的に思い出しながら (再想起)、身体各部の動かし方を知的理解によってある程度詳細に組み立ててから練習することが多い。それに対して幼児の場合には、再想起ではなく、これまでの身体経験に基づいて過去把持されたぼんやりとした感覚 (空虚形態) やイメージ (空虚表象) から遊びの中で受動的に動きを発生させていくといわれる。

本研究では器械運動と関連の深い動きに焦点を当て、いくつかの例証を挙げながら幼児期に特徴的な動感発生の契機についてその深層地平に考察を加える。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長：原 祐一（岡山大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY203 (良心館2階 R Y 2 0 3 番教室)

[学校保健体育-B-09] ランニングフォームの学習を取り入れた長距離走授業の検討 (保)

*舟山 謙佑¹、佐藤 善人¹ (1. 東京学芸大学)

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-B-10] インベージョンゲームにおける「攻撃」と「防御」の捉え方に関する研究 (教)

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学附属小金井中学校、2. 東京学芸大学)

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-B-11] 小学校体育におけるラケットを用いたテニス授業の一般化可能性の検討 (発,心)

*大西 祐司¹、北村 哲¹、小谷 幸平²、津田 恵実³ (1. びわこ成蹊スポーツ大学、2. 兵庫教育大学連合大学院、3. ウェストバージニア大学)

11:55 ~ 12:09

[学校保健体育-B-12] 力強く打つ楽しさを味わう小学校3年生のベースボール型授業 (教)

*斉藤 雅記¹ (1. 山口大学)

12:10 ~ 12:24

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY203)

[学校保健体育-B-09] ランニングフォームの学習を取り入れた長距離走授業の検討 (保)

*舟山 謙佑¹、佐藤 善人¹ (1. 東京学芸大学)

近年、長距離走の走動作の技術習得がランニングエコノミーの向上に繋がると期待されていることや、ランニングパフォーマンスの向上を目指したフォームの良し悪しについて、研究が報告されている。また、中学校学習指導要領解説保健体育編においてもフォームに関する学習内容が例示されており、自己に適したフォームを身につけることは、記録向上のための基礎的な学習であると考えられる。しかし、中学校における長距離走授業の実践ではイーブンペースや競争の学習を主題化した実践は散見されるものの、ランニングフォームの学習を主題化した実践は少数である。

ランニングフォームの学習は自己に適したフォームを身につけることが目指されているため、教師や生徒自身の感覚に頼った指導に終始してしまっていると考えられる。現状を改善するには、ランニングフォームの学習をバイオメカニクスの観点から検討して、実施することが求められるのではないだろうか。

本研究では、ランニングフォームの学習を取り入れた長距離走授業が生徒の記録の向上やランニングに対する態度にどのような影響を及ぼすのか検討することを目的とした。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY203)

[学校保健体育-B-10] インベージョンゲームにおける「攻撃」と「防御」の捉え方に関する研究 (教)

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学附属小金井中学校、2. 東京学芸大学)

インベージョンゲームに関わる議論において、「攻撃」と「防御」双方の概念はその要点である。なぜならば、各種目のゲーム構造や戦術、また学校体育における戦術学習といった議論は、これらの概念を柱とした上でなされているためである。

「攻撃」と「防御」双方について、「攻撃」とは「ボールを所有する側」「得点しようとする」と、また、「防御」とは「ボールを所有しない側」「得点を阻止しようとする」とする捉えは、多くの人々に共有されている。しかしながらインベージョンゲームにおいて、ボールを所有する側でも相手に奪われないようにボールを守っているのであれば、それは「防御」として、対するボールを所有しない側が相手のボールを奪い取ろうとすれば、それは「攻撃」として捉えられるのではないかと思われる。つまり、従来の捉え方では「攻撃」と「防御」とは何かを適切に説明していない可能性がある。

ここに「攻撃」と「防御」とは何かを改めて問う根拠を見出せるわけだが、これまでこの問題に対する議論は十分になされてこなかったように思われる。では、インベージョンゲームに関わる議論は、従来「攻撃」と「防御」をいかに捉えてきたのであろうか。

そこで本研究は、「攻撃」と「防御」の捉え方の変遷を整理し、従来なされてきた捉え方の特徴について検討することを目的とした。

その結果、次第に捉え方が多様化していく状況にありながらも、その中心は「得点に関わる行為」や「ボールの所有」を視点とした捉え方であるということが明らかとなり、そうした「攻撃」と「防御」の捉え方は従来変わってきていないことが指摘された。そして、捉え方の多様化それ自体が「攻撃」と「防御」とは何かを不明瞭にするとともに、その理解に矛盾を生じさせているということが明らかとなった。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY203)

[学校保健体育-B-11] 小学校体育におけるラケットを用いたテニス授業の一般化可能性の検討（発心）

*大西 祐司¹、北村 哲¹、小谷 幸平²、津田 恵実³ (1. びわこ成蹊スポーツ大学、2. 兵庫教育大学連合大学院、3. ウェストバージニア大学)

平成29年改訂の小学校学習指導要領解説において、ボール運動ネット型の例示に初めてテニスが表示された。これまで小学校のネット型攻守一体タイプの授業実践は、手に板状のものを装着して行うテニピンを中心に多数報告がみられる（例えば、今井, 2012, 2018, 2021; 日本テニス協会, online）。これに対し、ラケットを使用した実践例は少なく、石原ら（2018）や佐藤・藤本（2018）の報告が見られるものの、前者は3時間のプログラムであること、後者は1クラス15名とクラス編成が比較的少数であることから特殊な事例といえる。したがって、報告されている教育効果も限定的である。そこで本研究は、小学校体育におけるラケットを用いたテニス授業の教育効果と授業実施の課題を明らかにすることを目的とした。研究対象は滋賀県内の小学校6年生3クラスの79名と授業者3名である。調査内容は、児童を対象とした単元前後の①体育授業への取り組み姿勢および②テニススキルの向上感、③テニスへの態度に関するアンケート調査、並びに授業者を対象とした単元前後の④インタビュー調査である。体育授業への取り組み姿勢の調査には、スポーツ版自己調整学習尺度（幾留ら, 2016）のエフォート因子を構成する6項目を用いた。その結果、体育授業への取り組み姿勢について、3クラス全体ではエフォート因子の値に単元前後で有意な差はみられなかった（ $t(71)=-.89, n.s.$ ）。「クラス」と「単元」を独立変数として二要因の分散分析を行なった結果、「クラス」と「単元」の交互作用に有意な差がみられ（ $F(2,69)=3.85, p<.05$ ）、単純主効果はみられなかった。当日の発表では、上述の結果詳細に加え、児童のテニススキルの向上感およびテニスへの態度、そして授業者のインタビュー調査の分析結果を踏まえて、テニス授業の一般化可能性について論じる。

12:10 ~ 12:24 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY203)

[学校保健体育-B-12] 力強く打つ楽しさを味わう小学校3年生のベースボール型授業（教）

体重移動とスイングの軌道に着目して

*齊藤 雅記¹ (1. 山口大学)

ベースボール型ゲームでは、打つことの面白さや楽しさが学習の原動力となる。子どもたちには打つ喜びを十分に味わわせることが重要となる。そのためにはボールの種類やバットなどの用具を工夫したり、ピッチャーの投げたボールではなく止まったボールを打つなど、必要に応じてルールを工夫したりすることが大切である。現行の小学校学習指導要領（文部科学省, 2017）の中学年の「ベースボール型ゲーム」でも、バットだけでなく手やラケットを使ってボールを打つことが例示されており、技能を緩和しながらも、ゲームの楽しさや喜びに触れ、易しいゲームをできるようにすることが求められている。それをふまえ、ベースボール型の授業研究では、守備的局面に焦点を当てたものや、バットを使わずに打撃を行うものが多く行われている（濱田, 2018; 松本ら, 2013; 竹内ら, 2006; 山本, 2019;）。一方、佐々木（2015）は、子どもたちにとってのベースボール型の魅力や楽しさは、ボールを思い切り打つことや、一人ひとりに打席が保証され、ゲームの主人公になり得ることだと述べている。そのためには、「ボールを打って遠くへ飛んだ」「自分の打球が得点に結びついた」といった運動の楽しさや、「以前より強く打てるようになった」といった技能の高まりを十分に保証することが必要だとしている。

本研究では、ボールを遠くへ飛ばす技能に着目し、「体重移動のあるバッティング」、「地面と平行なスイング軌道」の2点を中心に、初めてベースボール型に取り組む小学校3年生を対象に授業を展開した。本研究の成果を明らかにするために、バッティングの飛距離とバッティング動作、スイングの軌道、打球の角度などから授業成果を検討した。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長：澤江 幸則（筑波大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY204 (良心館2階 R Y 2 0 4 番教室)

[学校保健体育-B-13] 高等専門学校におけるゴールボールを取り入れた体育授業プログラムの検討（ア）

*濱中 良¹、飯干 明²、金高 宏文³、森 司朗³、井福 裕俊⁴（1. 京都先端科学大学、2. 鹿児島県立短期大学、3. 鹿屋体育大学、4. 熊本大学）

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-B-14] 聴覚障害者の学校体育における経験が成人期のスポーツ実施意欲に与える影響（ア）

*池川 博史¹、齊藤 まゆみ²（1. 兵庫県立伊丹北高等学校、2. 筑波大学）

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-B-15] 不登校経験者を対象とした1年間の「からだ」の授業で獲得されるからだづくりの認識（保）

*上野 亜海¹、佐藤 海音¹、鹿野 晶子²、野井 真吾²（1. 日本体育大学大学院博士前期課程、2. 日本体育大学）

11:55 ~ 12:09

[学校保健体育-B-16] 不登校児童生徒の能動的運動参加に関わる要因（ア）

*金子 真悠¹、澤江 幸則²、齊藤 まゆみ²（1. 筑波大学大学院体育学学位プログラム、2. 筑波大学体育系）

12:10 ~ 12:24

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY204)

[学校保健体育-B-13] 高等専門学校におけるゴールボールを取り入れた体育授業プログラムの検討 (ア)

新たな身体知への気づきと障害観の変化

*濱中 良¹、飯干 明²、金高 宏文³、森 司朗³、井福 裕俊⁴ (1. 京都先端科学大学、2. 鹿児島県立短期大学、3. 鹿屋体育大学、4. 熊本大学)

本研究では、高専の2・3年生を対象に、ゴールボールを取り入れた体育授業プログラムを考案し実施した。プログラムは、90分の実技3コマと30分の講義で構成した。アンケート調査により、本プログラムが学習者の新たな身体知へ気づき、運動技能感、障害観に及ぼす効果を明らかにすることを目的とした。また、本プログラムの有効性について検討するとともに、新たな身体知への気づきに焦点を当てた今後のプログラム開発の留意点についても検討した。

調査は各授業前後に Webアンケート調査を行った。対象は、高専に在籍する17-18歳の生徒248名（男子157名、女子91名）である。アンケートに全て回答した125名（回答率50.4%）のデータを分析した。

本研究の結果、考案したプログラムを実践することで運動技能感の向上が見られ、新たな身体知への気づきを得られることが明らかとなった。また、障害観の肯定的な変化は、実技の前後では確認できず、障害についての知識を学ぶ機会や考える機会により生じることが明らかとなった。なお、立案した授業プログラムについて検討した結果、概ね単元目標を達成しており妥当であったといえる。さらには、今後に向けたプログラムの構成、課題設定、障害理解との関連付けに関する改善点を見つけることができ、新たな身体知に気づくことをねらいにした授業プログラムを開発する際の注意点も示すことができた。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY204)

[学校保健体育-B-14] 聴覚障害者の学校体育における経験が成人期のスポーツ実施意欲に与える影響 (ア)

*池川 博史¹、齊藤 まゆみ² (1. 兵庫県立伊丹北高等学校、2. 筑波大学)

聴覚障害者は特別なルールや用具に対するアダプテッドの必要性が低く、既存のスポーツを実施することができる。しかし、令和2年度の成人聴覚障害者における週1日以上スポーツ実施率は31.0%と、健常者の59.9%に比べて低いことが示されている（スポーツ庁、2021）。成人のスポーツ実施に影響を与えるものとして、小学校・中学校・高等学校の体育におけるポジティブな経験が指摘されていることから、小学校・中学校・高等学校に在学する聴覚障害のある生徒が体育においてポジティブな経験をしていない場合、成人期のスポーツ実施意欲にも影響を与えることが考えられる。そこで、本研究の目的は、聴覚障害者の学校体育における経験が成人期のスポーツ実施意欲に与える影響を明らかにすることとした。研究対象者は、中等度以上の難聴があり、小学校・中学校・高等学校のいずれかもしくは全てに在学経験があり、現在スポーツ実施意欲が低い成人聴覚障害者5名とした。調査方法は個別の半構造化面接とし、「学校体育における楽しさに関する経験」「学校体育で聴覚障害が影響した経験」を調査項目として実施した。分析は、テーマティック・アナリシス法を用いてコーディングを行い、国際生活機能分類（ICF）をもとに検討した。結果として、成人聴覚障害者のスポーツ実施意欲に影響を与えた体育での経験として、「体育の楽しさに影響を与えた経験」「体育での困難な経験」「配慮された経験」「集団の中での経験」「他者に対する思い」「障害理解」「種目のモチベーションに関わる要因」「スポーツへの思い」「体育に参加するための工夫」9つのテーマが存在することが示された。スポーツ実施意欲に肯定的な影響を与える経験を得るためには、保健体育教師による環境因子や個人因子に着目した支援が有効であると示唆された。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY204)

[学校保健体育-B-15] 不登校経験者を対象とした1年間の「からだ」の授業で獲得されるからだづくりの認識 (保)

高校1年生の学習ノートを基に

*上野 亜海¹、佐藤 海音¹、鹿野 晶子²、野井 真吾² (1. 日本体育大学大学院博士前期課程、2. 日本体育大学)

【目的】神奈川県小田原市にある A高校には不登校を経験した子どものみが入学するクラスがある。このクラスでは、①自分のからだを知る、②生活に役立つからだの機能や役割を学ぶ、③生涯にわたって健康に生活するために必要な知識・技術を学ぶことを目標とした「からだ」の授業が行われており、スポーツではなく自他のからだと自然を教材としたからだづくりが行われている。他方、教育科学研究会「身体と教育」部会ではからだづくりが体育科の基本目標であるという考えの下、古くからその認識項目が議論されてきた。無論、「からだ」の授業は体育ではないが、その目標はからだづくりそのものである。そこで本研究では、このからだづくりの認識項目を用いて、1年間の「からだ」の授業で獲得される認識を検討した。【方法】分析材料は、A高校に在籍する2022年度の1年生82名が1年間の「からだ」の授業で使用した学習ノートとした。分析では、学習ノートの各記述を野井(2004)の認識項目を用いて、富川ら(2005)の方法で分類した後、各認識項目の獲得の有無を検討した。その際、森林ウォーキング、からだの使い方、ものづくりの3つの教材間で獲得される認識の偏りを χ^2 検定により検討するとともに、有意な分布の偏りが認められた場合は残差分析も実施した。【結果】本研究の結果、森林ウォーキングでは「その他」、からだの使い方では「からだの事実・法則・ねうちの認識」、「からだづくりの目的・方法の認識」、「からだづくりに対する感情の認識」、「生活の認識」、ものづくりでは「運動の技能・技術」、「運動に関する感情の認識」、「その他」の認識の獲得が有意に多い様子が示された。このような結果は、体育授業で獲得される認識を検討した先行研究(富川ほか, 2005)とは異なる傾向を示唆するものであった。

12:10 ~ 12:24 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 RY204)

[学校保健体育-B-16] 不登校児童生徒の能動的運動参加に関わる要因 (ア)

エスノグラフィーに基づく質的検討

*金子 真悠¹、澤江 幸則²、齊藤 まゆみ² (1. 筑波大学大学院体育学学位プログラム、2. 筑波大学体育系)

2021年度に不登校とみなされた小・中学生は24万4940人で増加傾向にある(文部科学省,2022)。その中で齊藤(2006)は不登校児には不安定な対人関係があることを指摘した上で、その回復過程では適切な高さのハードルになる社会活動の場とそれに結びつけてくれる他者の存在の必要性を指摘している。そこで適切な高さのハードルになる社会活動の場となりうる運動場面へ、能動的に活動参加する要因を明らかにすることを目的とした。特に能動的活動参加に影響すると考えた運動有能感(岡沢,1996)に着目し、学校体育のような一斉指導よりも、個に対応し得る個別指導が有効ではないかと仮説を立てるとともに、離職防止に用いられるモチベーション理論のひとつである ERG理論(Alderfer,1969)を基軸に考察することを試みた。そのために A県にある民間フリースクールに在籍する不登校児5名を対象にエスノグラフィーの手法に基づく参与観察を行った。調査では週1回行った運動場面及びフリースクールでの生活場面について、202X年3月から8月まで計258時間分の観察を行い、逐次フィールドノートへ記録した。その結果、一斉指導場面では集団同調が求められることから集団場面に對する苦手さがあったが、長く通う子どもを中心に他者を受容する行動が見られた。例えば、活動とは違う課題に挑戦している生徒がいても否定することなく、成功を見守る場面がそうであった。一方、個別指導場面では個々のペースに合わせた活動の展開により、自分の運動に集中することができ、運動有能感の中の統制感が向上する様子が見られた。また、生活場面においてフリースクールがどんな自分でも受け入れてくれるという、安心できる存在により安全な場の役割を果たしていた。つまり不登校児の運動参加には ERG理論のうち、特に他者関係(R)を充足させることが重要であることが示された。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】口頭発表③

座長：都筑 真（日本女子体育大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY301 (良心館3階 R Y 3 0 1 番教室)

[健康福祉-A-07] 一般成人と体育・スポーツ系学部同窓生の Physical literacyの違い (測)

*松永 美咲¹、鈴木 宏哉¹、染谷 由希¹、河村 剛光¹、鄧 鵬宇¹、春日 晃章²、青野 博³、森丘 保典⁴、伊藤 静夫⁵、松尾 哲矢⁶、岡出 美則⁷、内藤 久士¹ (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 岐阜大学教育学部、3. 日本スポーツ協会、4. 日本大学スポーツ科学部、5. 東京マラソン財団、6. 立教大学コミュニティ福祉学部、7. 日本体育大学スポーツ文化学部)

11:25 ~ 11:39

[健康福祉-A-08] オンラインでの自重トレーニングがメンタルヘルス関連指標に与える影響 (介,生,心,トレーニング科学)

*佐藤 雄也¹、望月 佑季奈¹、齋藤 未花¹、出口 実¹、上妻 歩夢¹、菊池 さやか¹、田代 空¹、本間 洋樹¹、岡本 孝信¹、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学)

11:40 ~ 11:54

[健康福祉-A-09] 膝前十字靭帯再建術後のアスリートの膝関節屈曲・伸展筋力 (スポーツ医学)

*梅田 朋宏¹、若原 卓¹、新井 彩²、北條 達也¹ (1. 同志社大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 同志社大学スポーツ健康科学部)

11:55 ~ 12:09

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY301)

[健康福祉-A-07] 一般成人と体育・スポーツ系学部同窓生の Physical literacyの違い (測)

*松永 美咲¹、鈴木 宏哉¹、染谷 由希¹、河村 剛光¹、鄧 鵬宇¹、春日 晃章²、青野 博³、森丘 保典⁴、伊藤 静夫⁵、松尾 哲矢⁶、岡出 美則⁷、内藤 久士¹ (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 岐阜大学教育学部、3. 日本スポーツ協会、4. 日本大学スポーツ科学部、5. 東京マラソン財団、6. 立教大学コミュニティ福祉学部、7. 日本体育大学スポーツ文化学部)

【目的】 Physical Literacy (以下、PL) は、生涯を通じて身体活動を維持するための動機、自信、身体的資質、知識および理解などであり、身体活動を規定する要因のひとつとして注目されている。本研究では、一般成人と体育・スポーツ系学部を卒業した同窓生の PLの違いを明らかにすることを目的とした。【方法】対象者は、2022年1月に日本スポーツ協会「身体リテラシー (Physical Literacy) 評価尺度の開発」プロジェクトの一環で実施された全国調査に回答した一般成人4000名と、2022年12月から2023年2月にかけて J-Fit⁺Studyの一環で実施されたアンケートに回答した順天堂大学体育学部およびスポーツ健康科学部同窓生の528名であった。分析には、比較可能であった一般成人2486名、同窓生444名を用いた。PLの評価には Physical Literacy for Life self-assessment tools (PL4L) を翻訳して用いた。PL4Lの回答結果をもとに、身体領域、感情領域、認知領域、社会領域の PL得点を算出し、一般成人と同窓生の得点の差を対応のない t検定を用いて比較した。また、差の大きさ (効果量: Cohen's d) を算出した。【結果】全ての年代、性別において、同窓生は一般成人よりも全ての領域で PL得点が有意に高い値を示した ($p < 0.01$)。身体領域においては、30代男性の効果量は1.31、60代男性は0.48、30代女性は0.99、40代女性は0.48であり、男女ともに年代が上がるにつれて効果量が小さくなった。一方、感情領域、認知領域、社会領域では、年代による効果量の減少は見られなかった。【結論】体育・スポーツ系学部同窓生は、1) 一般成人と比較して、PLが高い。2) 身体領域において、年代が上がるにつれて一般成人との差が小さくなる。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY301)

[健康福祉-A-08] オンラインでの自重トレーニングがメンタルヘルス関連指標に与える影響 (介,生,心,トレーニング科学)

*佐藤 雄也¹、望月 佑季奈¹、齋藤 未花¹、出口 実¹、上妻 歩夢¹、菊池 さやか¹、田代 空¹、本間 洋樹¹、岡本 孝信¹、菊池 直樹¹ (1. 日本体育大学)

【背景】オンラインでの自重トレーニングは筋力、筋量を増加させるだけでなく、メンタルヘルスも改善することが明らかとなっている (Kikuchi et al, 2023)。しかし、メンタルヘルスの評価は心理学的指標のみであり、生理学的効果は評価されていない。抑うつなどメンタルヘルスの改善には脳由来神経栄養因子 (BDNF) が関連していることが報告されており (Shimizu et al, 2003)、心理学的指標と併せて検討する重要性は高い。【目的】オンラインでの自重トレーニングがメンタルヘルス関連指標に与える効果を明らかにすることを目的とした。【方法】対象者は健康な成人53名 (男性24名、女性29名) で、ランダムにオンライン群と対面群に振り分けた。その後、24名が個人的理由などで脱落し、29名 (男性14名、女性15名 / オンライン群20名、対面群9名) がすべてのトレーニングを終了した。トレーニングは8週間16回の自重エクササイズ (7種目) を実施した。測定はトレーニング期間前後に CES-D (抑うつ度)、WHO-5 (精神健康度)、採血 (血清 BDNF濃度)、30秒腕立て伏せテスト (30PUT)、30秒椅子立ち上がりテスト (CS30) を測定した。【結果】30PUTとCS30において、時間と群の交互作用はみられなかったが、時間の主効果がみられた (30PUT: $p < 0.001$, CS30: $p = 0.006$)。CES-Dは時間と群の交互作用はみられなかったが、時間の主効果がみられた ($p = 0.04$)。WHO-5は両群で有意な変化はみられず、血清 BDNF濃度も有意な変化はみられなかった。血清 BDNF濃度の変化率とCES-D、WHO-5変化率の間に相関関係はみられなかった。【結論】オンラインでの自重トレーニングは対面同様

に筋力と抑うつを改善するが、血清 BDNF濃度には影響を与えなかった。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY301)

[健康福祉-A-09] 膝前十字靭帯再建術後のアスリートの膝関節屈曲・伸展筋力（スポーツ医学）

*梅田 朋宏¹、若原 卓¹、新井 彩²、北條 達也¹（1. 同志社大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 同志社大学スポーツ健康科学部）

【緒言】 膝前十字靭帯(ACL)再建術では、ドナー腱に膝蓋腱を利用する場合と半腱様筋(Semitendinosus : ST)腱を利用する場合があります、一般的に後者が選択されることが多い。ただし、ハムストリングスのひとつである ST を採取すると膝関節屈曲筋力に影響する可能性がある。一方で、再建術後の競技への復帰は患側の膝関節伸展筋力が健側の80%以上となることが目安とされている。そこで、今回われわれは競技に復帰を果たしている ACL 再建術後のアスリートを対象に膝関節屈曲筋力および伸展筋力を評価したので報告する。

【方法】 ST腱を用いた ACL 再建術を受けて1年以上経過し、競技に復帰を果たしているアスリート10人(男性6名、女性4名、21~24歳)を対象とした。等速性筋力計に対象者を仰臥位で固定し、膝関節屈曲60度から120度まで10度間隔で両下肢の等尺性の膝関節伸展筋力（以下、伸展筋力）と膝関節屈曲筋力（以下、屈曲筋力）を測定し、健側と患側の筋力を比較した。

【結果】 伸展筋力は全ての膝関節屈曲角度において、患側と健側との間に有意な差はみられなかった。患側/健側比は全ての膝関節屈曲角度において、88%以上であった。屈曲筋力は全ての膝関節屈曲角度において、健側と比べて患側が有意に小さかった ($p < 0.05$)。また、患側/健側比は全ての膝関節屈曲角度において、73%未満で、屈曲角度が大きくなるほど低下傾向を示し、膝関節屈曲60度に対して80度、90度、100度、110度、120度で有意に小さかった($p < 0.05$)。

【考察およびまとめ】 競技復帰を果たしていても、健側と比較して患側の屈曲筋力は低下しており、特に、膝関節屈曲角度が大きくなるほど筋力の低下が大きかった。そのため、半腱様筋をドナー腱とした ACL 再建術では、競技種目に応じた慎重な評価とトレーニングが重要であると考えられる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会 【課題 A】 口頭発表③

座長：綿引 清勝（東海大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY305 (良心館3階 R Y 3 0 5 番教室)

[生涯スポーツ-A-07] 放課後等デイサービスの指導者が運動指導場面において困難感を抱える心理的プロセスの類型化（ア）

*高橋 一真¹、澤江 幸則²（1. リーフラス株式会社、2. 筑波大学 体育系）

11:25 ~ 11:39

[生涯スポーツ-A-08] スポーツ中継を通じた視覚障害者のスポーツ理解と面白さの生成に関するコミュニケーション論的分析（政,ア,社）

*植田 俊¹、山崎 貴史²（1. 東海大学、2. 北海道大学）

11:40 ~ 11:54

[生涯スポーツ-A-09] 障害者のスポーツ施設利用を阻害する要因の検討（ア,社）

*高田 侑子¹、渡 正²（1. 順天堂大学スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部）

11:55 ~ 12:09

11:25 ~ 11:39 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY305)

[生涯スポーツ-A-07] 放課後等デイサービスの指導者が運動指導場面において困難感を抱える心理的プロセスの類型化 (ア)

複線経路・等至性モデル (TEM) による分析をもとに

*高橋 一真¹、澤江 幸則² (1. リーフラス株式会社、2. 筑波大学 体育系)

近年、発達障害児の放課後の居場所として放課後等デイサービスの利用が大幅に増加している。しかしながら、支援の担い手である指導者は、その支援に対して困難さを感じていることが明らかとなっている(板川,2018; 木村ら,2019)。そのなか、運動・スポーツ種目を療育に取り入れている事業所は少なくなく、同じように困難さを感じていることが指摘されている(小崎ら,2022)。これまでに、運動指導場面に焦点を当てて、指導者が困難感を抱える心理的プロセスを検討した研究は散見の限り見当たらない。そこで、本研究では、放課後等デイサービスの指導者が運動指導場面において困難感を抱える心理的プロセスを明らかにするために、心理学的ストレスモデル(Lazarus & Folkman, 1984)に依拠して検討することを試みた。

その目的を達成するために、まず事前調査により、放課後等デイサービスにおいて発達障害児への運動指導に携わっている指導者を選定した。その後、選定された指導者に対して、運動指導場面にて経験した困難事例をもとに、半構造化されたインタビュー調査を複数回実施した。インタビュー項目は、心理学的ストレスモデルをもとに6項目設定した。得られた結果は、複線経路・等至性モデル(TEM)により分析し、TEM図を作成した。TEM図を作成する際には、2回目以降のインタビュー調査において、事前に作成したTEM図を対象者に見せながら発言の意図や内容などを確認した。そうすることで、筆者と対象者の意見が一致するTEM図を完成させた。以上の結果をもとに、放課後等デイサービスの指導者が困難感を抱える心理的プロセスやその影響要因を検討した。さらに本研究では、TEM図を類型化することで、困難感を抱える心理的プロセスにはどのようなパターンがあるのかについて考察することを試みた。

11:40 ~ 11:54 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY305)

[生涯スポーツ-A-08] スポーツ中継を通じた視覚障害者のスポーツ理解と面白さの生成に関するコミュニケーション論的分析 (政,ア,社)

*植田 俊¹、山崎 貴史² (1. 東海大学、2. 北海道大学)

本報告の目的は、スポーツの中継放送で用いられる〈言葉〉が視覚障害者にいかなるスポーツ実践のイメージをもたらすかを検討することである。

本研究では、スポーツをまず1)個人で行うスポーツ、2)団体(チーム)で行うスポーツに大別した上で、ア)格闘で勝敗を競うスポーツ、イ)得点の多少で勝敗を競うスポーツ、ウ)演技の出来栄で勝敗を競うスポーツ、エ)先後着で勝敗を競うスポーツに細分化し、さらに甲)非視覚的鑑賞を前提として言語が駆使され実況解説(=ラジオ放送)されるスポーツと乙)映像を前提として言語が駆使され実況解説(=テレビ放送)されるスポーツに区分した。それを踏まえて、相撲、野球、サッカー、スキージャンプ、フィギュアスケート、競馬を事例として取り上げ、①中継の中でどのような言葉が選択されて状況伝達が行われているか、②その伝達が行われるのはどのような場面状況についてか、③その内容伝達に用いられた表現を聞いて視覚障害当事者はどのような場面イメージを構築するか、の3点について解明を試みた。

分析の結果、現時点までに、スポーツ中継においては1)客観的に把握した状況を正確に伝える「説明」(=実況)と、2)さまざまな文脈情報や補足知識を添付して行われる状況の「解釈」(=解説)が行われていること、3)「説明」と「解釈」が合わさることで視覚障害当事者はスポーツを「理解」していること、4)「説明」と「解説」がそれぞれ意味をなす(=視覚障害者に理解される)には、それぞれ必要とされる

予備的知識が異なること、5) スポーツ中継を通じたスポーツ理解は放送主体から一方的に発信される情報を受信してのみ行われるための奥行きや幅に限りのある「モノログ」的理解に留まるが、一緒に観戦する支援者との双方向的なやりとりを通じてなされる「ダイアログ」的スポーツ理解により面白さを感じていたことが明らかとなった。

11:55 ~ 12:09 (2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 RY305)

[生涯スポーツ-A-09] 障害者のスポーツ施設利用を阻害する要因の検討

(ア,社)

体育施設運営者の抱く「予期的懸念」に着目して

*高田 侑子¹、渡 正² (1. 順天堂大学スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康科学部)

障害者のスポーツ推進のためには、障害者専用スポーツ施設のみならず、公共スポーツ施設の障害者利用の増大が必要である。これまで施設の利用促進/阻害要因については主に物理的環境やソフト的な条件の整備や検討が行われてきた。それに対し、石井ら(2020)は、施設運営者へのインタビュー調査から、施設運営者が障害者の施設利用で起こる問題を先回りして想定してしまうことがあることを指摘した。それが障害者の施設利用を阻害する要因となっており、「予期的懸念」と名付けた。これは石井らが構築した概念であり、いまだ仮説に留まっており実証する必要がある。そのため本研究では、質問紙調査から、この「予期的懸念」を定量的に導き出し、どのような要因について予期的懸念を抱くのかを明らかにする。本研究では、千葉県・東京都の公共スポーツ施設416箇所を調査対象として選定し調査依頼書を送付した。質問項目は施設の運営状況に関する9項目と、施設の障害者利用に対する取り組み(施設の物的条件、利用者の意識)に関する32項目を設定した。それぞれの項目の充実度と懸念度を4件法で回答を求めた。回答を得られた70箇所のうち、不備のある回答を除いた68施設(有効回答率16.9%)を分析対象とした。施設の状況についての懸念度と充実度についての各項目の回答から、①懸念/充実、②懸念/非充実、③非懸念/充実、④非懸念/非充実の4つに分類することができた。この4分類のうち、①は、運営者が施設の取り組みが充実しているにもかかわらず、障害者の利用に懸念を持っていることである。つまり、その取り組みについて、「運営者が先回りして持ってしまう」ものであり、これが石井らのいう「予期的懸念」であると捉えられた。以上の検討を踏まえ、本研究ではさらに、予期的懸念がどのような項目で抱かれているのか、施設のプロフィールで差異があるのかを検討した。